NARUTO ―― 外伝 ―― 星空のバルゴ

さとしん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ　――　外伝　――　星空のバルゴ

【Ｎコード】
Ｎ６８２８Ｋ

【作者名】
さとしん

【あらすじ】
ここは火の国より遥か西。
石畳の市街地を、コツコツ歩く男女が二人。
話に聞いた街並みは、聞いてた通りの石造り。
貧富の差が激しくて、人の心も石造り。
里長火影の任を受け、やってきました霧の街。
受けたる密命胸に秘め、自分の思いを刃で殺す。
邪魔するヤツは排除する。不思議な術で、排除する。
鍛え抜かれた忍術で、咲かせて見せよう彼岸花。

プロローグ

「素晴らしい……！」

歓喜のあまりに思わず出た声が薄暗い部屋の闇に吸い込まれるようだった。

照明としている蝋燭（ろうそく）も深い闇の前にはさして意味を成さず、僅かな光は深い暗黒を讃えるかのように揺らめいている。

壁には様々な言語で書き綴（つづ）られた人体解剖図が貼り付けられており、他にも札や魔方陣も所狭しと乱雑に貼り付けられていた。

部屋の中央には真っ黒いフードを被った男が一冊の本を携え、一人ほくそえんでいる。

人間の皮膚を用いて創られた分厚い表紙には、近年になり貿易が盛んになってきた東の国の文字が表題となっており、その書体自体が一つの芸術品と言っても過言ではない。

恐らくインクとして人間の血を用いて書かれたであろうその本は、何か不思議な力により読むことはおろか、開く事すら叶わずに封印されている。

だがしかし、男にはその不思議な力に男は心当たりがあった。

魔法。複雑な知識と長い呪文の詠唱により外界の魔力と、体内の魔力を紡ぎ合わせ発せられる神秘の具現。魔力は東の国では気やチャクラとも言われ、古くから生物の体内に存在する事が確認されていた。

魔法は体内で練った魔力を呪文として詠唱することより、外界に働きかけ指向性のモノへ転ずるれっきとした物理現象である。

しかし、膨大な量の知識や血による魔力の継承、果ては外界の魔力の塊、つまりは精霊や悪魔と呼ばれる霊的な存在と『力と代償の契約』をしなければ大きな魔法を行使できないといった理由から、その担い手は少なく、現在男が所属する組織が認定している魔法使いは、男を含め十二人しか居なくなってしまった。

彼らは自らを十二の徒と呼び、各々が各分野での研究に勤しんでいる。
聞くところによると、東の国では呪文を用いないで魔法を使える者達がおり、その技術を脈々と今日まで受け継いでいるらしい。
まるで正反対ではないか。東の国に貿易船に乗った船乗りから噂話として聞いた時の感想だ。
もしもそんな人間が居るのであれば、逢ってみたい。そしてその術を実際に目で見て、あまつさえ、解剖し自分たちと異なる点があるかじっくりと考察したい。そして自らの魔法を遥か高みへ。そう考えるには時間は掛からなかった。
男の手元にあるのは、闇ルートでようやく手に入れた、秘術が記された『魔書』である。いや、人間を『魔へ導く』ような不思議な存在感は『魔導書』と言った方がしっくりくる。
今だ開く事の叶わない『宝の本』を大事そうに抱きかかえ、ゆっくりと鏡に写った自分を見る。目的の達成ならば手段も犠牲も厭わない外道の姿がそこにあった。
「もう少しだ。もう少しで私の望みが叶う」
呪詛を纏った言葉が闇に溶けて消え、執念を孕んだ双眸が蝋燭の光を映しているようだった。
奇怪な道具が乱雑に置かれた机の上に、異彩を放つ『普通』の写真立ての中の美しい女性は、今も変わらぬ笑顔をこちらに向けている。
尽きかけた蝋燭の炎が最後の力を振り絞り、一際大きな明かりで辺りを照らし、光に反射した写真の中の女性と目を合わせた。
「君の為なら、私は悪魔となろう」
愚かなる男の決意に、揺らめく影が嘲笑(わら)った気がした。

忍者、異国を駆ける　1

隙間無く綺麗に組まれた石畳をようやく履き慣れてきた革靴の底がコツコツと音を立て、人通りが多い街の往来を足早に歩く。道の中央には馬車の車輪による轍（わだち）があり、倫敦という街の歴史と歳月の重厚（おも）さを如実に物語っていた。

行き交う人々の姿も黒の背広やドレスのような出で立ちで、まるで国全体が舞踏会場か何かかと勘違いした程だった。

だが、それは一部の裕福層に過ぎず、街の中心より外側は貧富の差がそのまま着る者を表す事を示す見本のようで、華やかな服を着る者が煌びやかな生活を送っている一方で、路地裏では餓死者が野良犬に喰われ、娼婦が裸同然の格好で身なりの良い男を誘惑している。親に産み捨てられた子供はギャングを形成し、スリや盗みを働く。

『里』を出る際、夢の街。霧の街。希望に満ちた新天地（ユートピア）と聞いていたイメージとのギャップに＞星空　バルゴ＜はため息を漏らした。情報源の相棒、＞うちは　ミゾレ＜は悪びれる事もなく知らん顔をしている。

「あたしだってこの国の事は人づてに聞いただけなんだから、しかたないでしょ」

「別に。俺は何も言ってないぞ」

ここでミゾレに文句の一つでも言えば自分の事を棚に上げ、自分の目で確かめない方が悪いなどと理不尽を言われるのは明白だった。

「それより街の造りは頭に叩き込んだ？」

「ああ。帰って地図と比較でもするか」

金髪や茶髪、グレーやヘーゼルといった色彩の瞳を持つ者が多い中、黒絹のような黒い髪に光沢のある黒い瞳は、顔立ちの良さも相まって周囲の目を惹いて離さない。おそらくは遺伝なのであろうその美貌は非の打ち所無く、完璧な彫刻のようだった。

「……何よ?うすらトンカチ」
バルゴの視線に気付いたミゾレがしかめっ面で睨む。
「別に」と言いかけたところでドンと人にぶつかってしまった。
ブカブカの帽子を深くかぶり、着ているオーバーオールは染みや汚れで汚い。背格好からまだ年端もいかぬ少年のようだ。
手を差し伸べるバルゴの手を払い「気をつけろ」といって走り去ってしまった。
「……。大して入っていないんだがな」
「やられたわね。追いかけましょ」
懐の財布が無い。典型的なスリのパターンである。神業に等しい手際は通常であればスられた事にまず気付けない。惜しむらくは、相手が悪かった。ただそれだけだ。
生まれた時からそうなる事を定められ、幼少の頃より過酷な訓練を重ね、壮絶な努力により己が心身を刃とすべく琢磨した。鍛え抜かれた身体能力は常人の比ではなく、洞察力、反射神経は人間が持つ機能を大幅に強化している。
それは忍と呼ばれる存在。国における軍事を司り、諜報、謀略、時には暗殺といった影の仕事を生業とする者達の総称。そして星空
バルゴ、うちは　ミゾレは忍を軍事力として有する国の中でも取り分け、力のある『忍五大国』が一つ、火の国の、木ノ葉の里の忍者なのである。
「向かった方角からいって、南の貧民街のほうだな」
「先行するわ。よそ様のモノを盗むなんて許せない」
バルゴの脇を一陣の風が抜けたかと思うと、すでにミゾレの姿は無く、後に残されたバルゴもまた路地裏の闇へと姿を消していった。

忍者、異国を駆ける　2

大人なんて皆バカばかりだ。
ブカブカに被った帽子を直し足早に路地裏を歩く。
さっきぶつかった際に盗んだ財布には大金とまではいかないが、数日は食料にこまらないだけの金額が入っていた。
この街では見ない顔だった。おそらくは旅行者なのだろう。あんなところをいい服着てボヤボヤ歩くヤツがいけないんだと呟きながら後方を注視し、誰もついて来ていない事を確認する。
無作為に立てられた建物が迷路のような複雑さを造り、土地に暮らす者でなければ下手をすれば警察だって迷いかねない迷宮にアジト、『ミノタウロス』はあった。
迷宮に住むとされる伝説上の怪物の名前で、強そうで迷宮のような場所に住む自分たちにぴったりだという事で決定した空き家の名前である。
深い街の裏側にある空き家は、大人たちから見放され、教育もロクに受けられない少年少女たちが、家族の繋がりを求め、集まり寄り添い、温もりを確かめ合うそのアジトは同時に心のよりどころとなっていた。
木製の扉を開けると、自分よりも小さい『兄弟』たちが出迎えてくれた。親に捨てられ、虐げられ、また親をなくし行くあての無い者たちが、辛い過去を微塵も出さずに満面の笑みで、自分の無事を喜んでくれた。
永遠に続くかのように長い時間を生きる子供たちにとって、仲間との絆は何よりも尊い。そしてそれを象徴するかのように、壁には『ミノタウロスの誓い』という張り紙が貼られている。

一つ、食べ物は分け合え。
一つ、喧嘩は両成敗。

一つ、年上の言う事に従え。
一つ、年下を可愛がれ。
一つ、寝る場所は取り合うな。

その他にも『兄弟』たちが平和に暮らす為に書かれた誓いは最後に『一つ、兄弟を裏切るな』という文で締めくくられている。
「ただいま。みんな、喧嘩しなかった？」
『少年』の問い掛けに「そんな事よりお腹空いたよ」「ねぇ聞いて私……」などと思い思いの感情を顕(あら)わにするいつもの光景に、苦笑する。
サイズ違いの帽子を脱ぐと、ウェーブが掛かった綺麗な金髪が肩先まで現れた。
「ねぇお姉ちゃん。お客さんが居るよ？」
一番小さい妹が扉の方向を見て訊ねてきた。
いつのまにか扉に寄りかかっていた黒い髪の大人の女には見覚えがある。
「ふーん。男の子かと思ったら女の子だったんだ」
「そんな。どうして？」
つけられている雰囲気はなかった。迷宮に入る際も入念に後方をチェックし、誰も居ない事を確認しながらも、あえて入り組んだ道を選択したのに、どうしてこの女はここに居る？在り得ない光景に思わず目を疑う。
「盗んだ財布を返しなさい。人の物を取るなんていけない事だわ」
この街の実情も知らない、能天気な旅行者のくせに。華やかな街の裏側では食べる物も無く、泥水を啜(すす)り、それでも餓えで死にそうな人間がゴロゴロいる現実を目の当たりにしている彼女にとって、聖人君子のように、当然の事を平然と言い放つ黒髪の女に、恨めしい気持ちと苛立ちの感情が湧き上がる。
が、幼い兄弟たちの手前、言葉を荒立てまくしたてるのは得策ではない。

深いため息を付きながら冷静さを取り戻す。自分の手を強く握る妹が今にも泣きそうな顔でこちらを見上げている。そうだ。何よりも今現在ここを守る年長者として、兄弟たちが傷つくような事は絶対に避けねばならない。

「……判った。財布は返すから、警察には言わないで……」

大人しく観念し、素直に盗んだ物を差し出す金髪の少女の態度が以外だったのか、目を大きくしてこちらを見返している。

女が財布を受け取ろうとして手を伸ばそうとした時、

「いや、それはあげるよ」

後方で、見覚えのある男がいつの間にか立っていた。

黒に近いダークブラウンの仕立ての良いジャケットを羽織った青年。今少女が手にもつ財布の持ち主である。

晴れ渡った空のような青い眼に、太陽のような金髪が印象的な青年が、両の手をポケットに入れゆっくりとこちらに歩いてくる。

「バルゴ、いいの？」

バルゴと呼ばれた青年は肩を竦(すく)め、然(さ)もありなんといった表情で少女の前に立つ。

「大した金じゃないが有益に使ってくれ」

同情でもなく、侮蔑でもない、それは何気ない一言。だがしかし、少女にとって初めて触れた大人の優しさであった。少女の後ろに隠れている幼い兄弟は何が起きているか理解できずに今だに怯えている。

「行こう、ミゾレ」

そういって立ち去る青年の背中を追いかけようとするが、思い出したように振り返り、少女の鼻先に人差し指を突きつける。

「今後はこんな事は辞めなさい。でないと、いつか大切な人たちを巻き込む事になるわよ。……そうなってからじゃ、遅いんだから」

強い口調で、それでいて悲しそうな瞳で注意する女の忠告を、無言で頷く。

ミゾレと呼ばれた女は、突きつけた手を少女の頭に乗せ、華が咲

くような笑みで微笑んだ。

忍者、異国を駆ける　3

それは今からおよそ四ヶ月前に遡る。
里の長、『火影』から緊急の召集を受け、執務室へ向かう回廊で見慣れた顔と出くわした。
うちは　ミゾレ。かつて一族が犯した過ちを払拭すべく、その咎を一身に背負い、『火影』になる事で、うちはの名に染み付いた汚名を返上すると豪語している忍。
その能力はずばぬけて高く、遂行不可能とされたS級の任務を数多くこなしている優秀な上忍である。
彼女との付き合いが長いバルゴは、目を合わせた瞬間その異変に気付いた。
「また振られたのか？」
無言で射殺すような視線を平然と受け流せるのは、里広しといえどバルゴだけであろう。
例えそれが判ってもあえて触れないとか、友人として慰めるとか、そういった配慮がまったく無い相変わらずの朴念仁っぷりに深いため息が出る。
「はぁ。あたしの事より、バルゴも呼ばれたの？」
「ああ」
ミゾレも呼ばれたという事は十中八九、新たな任務に関する事であり、上忍が二人も呼ばれる事からその特務性は極めて高い事が予想される。
木製の扉を開く。入り口から真正面に迎えた机に、褐色肌に、右目に眼帯、白い髪の男が鎮座していた。
木ノ葉の里、第十三代目火影＞流氷　ヒョウガ＜
「星空　バルゴ、並びにうちは　ミゾレ、参上致しました」
「うちは　ミゾレ、並びに星空　バルゴ、参上致しました」
互いが自らの名前を先頭に出し到着を告げる。

相変わらずの不協和音に里一番の忍者にして、里の目標であるその男は人懐っこい微笑で二人を出迎えた。
「急な知らせで悪かったね。楽にしてくれ」
言われなくても楽にしている、変わらない二人の姿に安堵の表情が伺える。
かつて三人一組を組んだ、第二十五班＞ヒョウガ組＜の姿がそこにあった。
「バルゴ、前回の任務の怪我はもういいのかい？」
「はい」
昔から多くを語らず、冷静に沈着に任務をこなすバルゴ。
「ミゾレ。彼氏とは上手くいっているのかい？」
「はえ？もう別れましたけど？」
炎のような情熱と、氷のような冷酷さを併せ持つミゾレ。
仲間想いで、里から絶対の信頼を得ていたヒョウガ。彼の率いる二十五班は名実ともに最強の部隊として里の内外に知れ渡っていた。
おそらくここに来る前にひと悶着あったのだろう、ジト目で見詰め合う凸凹コンビに苦笑しながら机に設置された装置を操作する。
室内が急に真っ暗になり、部屋の中央に赤、青、黄の三原色から成る球を象(かたど)った立体映像が音も無く浮かび上がった。
部屋の雰囲気が変わった事を受け、話が本題に入る事を察したのか、じゃれ合うのを止め本来の忍の表情を火影に向ける。
「近年の西洋からの『文明開化』の影響は知ってるね。この光学装置もその恩恵の一つだ。そのおかげで火の国はもちろん、各国で文化水準が大幅に上がり、僕たちの暮らしは稀に見る成長を遂げた。これは一重に西洋貿易の賜物だ」
初めて見る不思議な光の幻惑にじっと見入る。まったく同じ反応を見せる忍二人。
「今回の五影会議でも協議された事だが、各里においても華やかな文化交流の裏で忍の秘術が流出しているらしい。無論それは木ノ葉とて例外では無い」

手元の装置を操作すると立体映像が球体から長方形の形へと変化した。よく見ると書物のようで、忍術による封印がなされているのが判る。
「今映しているのは先日地下書庫より盗み出された封印指定書だ」
封印指定書。それは過去様々な忍術による人体実験の成果を書き記した、解体記録ともいうべき書物で、その成果の一部は暗部の抜け忍処理などにも流用されている。
だが、狂乱じみた実験の成果の全容を知る事は里として禁止し、厳重な管理と強固な結界を施された地下書庫に、忘れさられる事を目的として封印されてた。
そしてそのうちの一冊が、先日堅牢な看視を抜け持ち出されるという事件が発生した。
「盗んだ実行犯は捕まったんですか？」
「もちろん拘束した。が、すでに書物は無く、拷問の末吐き出した情報によると、水の国より船にて西洋の大陸へ運び出したそうだ」
ミゾレの問い掛けに視線を移動させ答える。
「そこまで話した直後、舌を噛み切って自死したそうだ。ついさっき検死結果が僕のところに来てね。賊は木ノ葉の抜け忍だったらしい」
立体映像が書物から一人の男を映した平面の写真に切り替わる。
「名は小魚　メザシ。五年前に殉死した事になっていた。現在当時の任務内容や部隊の事などを早急に調べさせている」
それはにわかには信じられない事だった。忍が任務中の怪我が元で、引退するという事はよくある。その際は里から莫大な慰謝料が支払われ、その者の一生を保障する。だが、任務中の裏切りなどによる『抜け忍』となった者には、木ノ葉を影で支える暗殺戦術特殊部隊、通称暗部が派遣され、その者を秘密裏に処理をする。
忍者の存在自体がその里特有の秘密を保持し、万が一敵の手に落ち、里の秘術を研究、暴露される結果となれば、戦略的に大きな損害となる。

それを避ける為、選抜された精鋭が事に当たる。
達成率は常に１００パーセントを保ち、また任務失敗は絶対に許される事はなく、それは過去に暗部に従事していた二人も重々に承知するところだった。
「……ですが信じられません。任務中の殉死ならその死体を持ち帰る、もしくは焼却し証拠の処分が原則のはずです。そういった理由からも三人一組、四人一組という制度を採っているのですから」
「そうだね。五年前と言えば、僕はまだ一介の忍だったから、その理由は判らないけど、もし今回の事件がその頃から周到に計画されていたとなると、敵は木ノ葉内部にまだ存在するという事になる。また数ある禁術書の中で、それだけを選んだもの何か意図しての事なのかもしれない」
つまり、根は深いという事であり、それに同意したミゾレが言葉を失う。
「盗み出された書物は、正式名称、＞甲第一級禁術封印指定書＜名を『大蛇丸の書』という」
大蛇丸。確か三代目火影暗殺の実行犯として悪名高い伝説の忍。バルゴたちにとっては歴史の教科書や御伽話に出てくる空想上の怪物、怪人のような魔物といったイメージが強く、およそ一世紀近く経過した今日においても、その名は恐怖と畏怖の代名詞として、口にする事すら憚（はばか）られる禁忌中の禁忌である。
「里の内部は僕が調べさせるとして、だ。君たちにはこの書物を追ってほしい。任務は禁術書の可能な限りの奪還。ただし、回収不可能と判断した場合は『完全なる封印』をする事。方法は問わない。現地での判断に任せる」
最高の忍から最上の信頼を得る誉れ。それはけっして讃えられる事の無い闇の世界を生きる者たちにとって至上の喜び。
「班長はバルゴ、君がやれ」
「はい」
表情を表に出す事なく短い返事で了解する。反面、隣のミゾレは

不服そうにバルゴの顔を睨んでいる。
「あと、もう一人バックアップとして暗部の人間を付ける。名を狢（むじな）という。三人一組ではあるが、君たちは基本的に二人一組で行動しろ。その方が怪しまれないだろう」
火影の含みを持った言い方にイヤな悪寒がする。それはバルゴも感じるところであったようで、悪巧みを思い付いた、かつての部隊長の子供じみた視線を背け、隣で同じような表情をしているミゾレと目を合わす。
「つまり、君たちはこれから夫婦だ」

後日、恐ろしい事に当人たちの与（あずか）り知らぬところで、本当に婚姻が受理されていた事を知ることとなる

忍者、異国を駆ける　4

「ミゾレ。大問題だ。この店にもラーメンが無い」
道幅の広い石畳の路上にテーブルが並んでいる。
大きな道に面したレストランは食事している客自体が街の一部分であるかのようだ。
馬車や赤い二階建てのバス、黒塗りのタクシーが行き交う姿は里ではお目に掛かれない光景で、不謹慎であるが観光気分に浸ってしまう。
別の店からヴァイオリンの生演奏が風と共に流れてくる情緒溢れるランチタイムに真顔でトンチンカンな事を大事のように言う忍者が一人。
確かに脂っこいフィッシュアンドチップスや肉ばかりでは飽きてもくるが、それでも西洋の異国に来てラーメンはないだろうと、頭が痛くなる。
「ならスパゲッティとかにすれば？あたしはサラダだけでいいから。好きなの食べなよ」
「むぅ」
メニューを睨むように見ている姿は幼く見え、とても同い年には見えない。
思えばアカデミーに居た時から、この歳まで友人として付き合っている人間は少ない。多くは部下となってしまっているか、または殉死したかに分けられる。
幼馴染とも言えなくもない相棒は、現在書類上ではミゾレの夫となっているが、その事実をバルゴは知らない。
婚姻届が受理されたと連絡を受けたのは偶然を装った必然だった。
長期任務の為、役所で手続きをしていると部下の中忍が「おめでとうございます」と花束を手渡してきた。この時初めて事の顛末を知る事となる。

火影が重要書類に押印する際に使用される印鑑で押された届け出用紙は、火影でないと破棄できないという悪質なモノで、当の本人は砂隠れの里へ出向いており、これが計画された確信犯である事は間違いなかった。ちなみに花束を渡した中忍も、当然火影の仕込みであった事は言うまでもない。

一体どんな意図があるのだろうか。昔から火影の言う事は自分の想像を及ばない。いっそ考えるだけ時間の無駄というものだ。ならば任務を無事終え、本人に直接聞くとしよう。その為には、異国で果てる事など絶対に許されない。そう決意を固める。

しかし、ここで一つの疑問が沸いてくる。

自分と形式上夫婦となった事を知ったバルゴはどういう反応を示すのだろうか。

「考えたくないわ……」

思わず思考が言葉に出る。

「んん……」

好みの物が無い為か、ずいぶん長い時間悩んでいる。知らぬが仏。人の気も知らないで暢気なものである。

「この店ならマルゲリータピザがお勧めだよ」

いつの間にかそこには深い帽子を被り、汚れたオーバーオールを着た先ほどのスリの少女が得意げな顔でそこに居た。背の高いテーブルに手と顔を出す姿はまるで猫がこちらを見ているかのようである。

「じゃぁそれにしようかな」

「そうしなよー」

尻尾があれば振ってそうな勢いで身を乗り出す。

「ここのピザはねぇ、最高の自家製のトマトソースにコクの深いモッツァレラチーズを使っててね、　とぉーっても美味しいんだよ！」

「そうか。それは楽しみだ」

突然沸いて出てきた少女の登場に、まったく違和感無く進めるバルゴのやり取りに、もはや突っ込む気力すら失くしてしまった。突

然の少女の登場に驚いている自分が馬鹿馬鹿しくなる。
「ミゾレは、サラダだけでいいのか？」
「うん……」
脱力のあまり、俯き力なく手を振って答えるミゾレ。
「じゃぁサラダと、丸刈りーたピザを頼もうか。二人分な」
子供らしく両手を上げて喜ぶ少女と書類上の夫。
……何だか、むしょうにラーメンが食べたくなってきた。

忍者、異国を駆ける　5

傍から見れば不思議な組み合わせだっただろう。
若い夫婦の旅行者と思しき男女と地元の貧しい子供が昼下がりのストランで和気藹々と食事を楽しんでいる姿は、行き交う人々が一瞬でも目を奪われるくらい奇妙な光景だった。
「でね、私考えたの。私くらいこの街の事を知ってる人は居ないから、その豊富な知識でバルゴたちみたいなカモ……じゃなかった、旅行者相手にガイドをすれば儲けられるんじゃないかって！」
その少女＞アリアドネ＜は出会った時の印象とはまるで正反対の、明るい笑顔と軽快な口調で自分の希望を楽しそうに語った。
「だからね、バルゴのお金はその前払い金って事」
「アリアドネ。口の周りにソース付いてるわよ」
そう言って口の周りをナプキンで拭く光景は、まるで親子のようだと、綺麗になったアリアドネの口元を見て思い、赤面した。墓穴を掘った気分である。
「どぉ、バルゴ、ミゾレ？いいでしょ？」
「その考えには賛成だが、俺たちに付いてくるのはダメだ。俺たちは別に遊びにこの街に来ているワケじゃない」
アリアドネの申し出を断ったのは以外にもバルゴだった。
食後のコーヒーを啜りながらも、はっきりと拒絶の意を示す。
「そうね。あたし達は大事なお仕事の最中なの。あたし達に関わっていたら危険な事に巻き込まれるかもしれないしね」
あくまで諭すように柔らかく伝えるミゾレ。
「逃げ足には自信があるもん」
子供らしい口調で我を通そうとするアリアドネ。その雰囲気から意地でも付いてくる気である事が伺える。
深いため息をしながら、仮面を脱ぎ去るように気持ちを切り替える。冷酷なうちは本来の瞳で、小汚いガキを見据える。

「こうして会ったのも何かの縁だと思って、食事もご馳走してあげたけどね。あたし達に関わっていたら、あんたも、そしてあんたが守りたがってる子供たちも危険に晒されるって言ってるのよ。四の五の言わずに言う事を聞きなさい」
優しいお姉さんの雰囲気から一転、無機質で冷たくドス黒い瞳で睨まれ声を失い、蛇視を受けた蛙のように身体が硬直し動けない。
「行こう、ミゾレ」
「ええ」
手早く会計を済ませ、何事も無かったかのようにその場を後にする。
が、容易くは引き下がれない。恐怖で笑う膝に鞭打ち、人ごみに消えそうな二人を追いかける。
おかしい。走れど走れど二人との距離は一向に縮まらない。
二人が大通りの角を曲がったかと思うとその姿は忽然と消えていた。
まるで狐につままれた面持ちで辺りを探るが誰も彼も似たようなうしろ姿をしている。
それらしい姿を見つけ駆け寄ろうした時、汚れたオーバーオールを強い力で引っ張られしりもちを付いてしまった。
何が起こったのか判らないまま、引っ張った相手を足から見上げる。
「あ……」
倫敦市警＞ジュリド＜が警棒を持ち、侮蔑と貪色（どんしょく）に満ちた表情でアリアドネを見下していた。
この街で絶対に関わってはいけない大人。スラムの子供をターゲットにした嗜好的児童性虐待者。最悪の屑と呼ぶに相応しい、最低な男。
舐めるような視線は先ほどの身を刺すような恐怖とはまったく違う、おぞましい程の悪寒に全身が竦む。
助けを求めるが、傍から見れば悪さをした小汚いスラムの子供が

警官に捕まっているようにしか見えず、誰もが見てみぬフリをし、その場を通り過ぎる。

眼前へと近づいてくる穢れた掌に、少女の絶叫が曇天の空に響き渡る。

湿り気を孕んだ風が雨の到来を告げていた。

忍者、異国を駆ける　6

「まさか、あそこまで懐かれるとは思わなかったな」
バルゴの呟きに同意しながら下宿先を目指す。
西の旧市街にある格安のボロアパート。呼び鈴が壊れ、鍵も簡単に複製できそうな単純な造り。四階建の赤レンガ造りの外装は、見渡せば無数に乱立しており存在の隠匿を常とする忍の隠れ家とするには最適だった。
古い真鍮製の鍵をガチャリと回す。七畳程度の広さにベッドが二つの殺風景な部屋が主の帰りを待っていた。
着いてすぐに任務を遂行できるよう、先行しこの地に来ていた暗部の狢（むじな）が金銭面を考慮して手配したものだが、シングルサイズのベッドが二つ、部屋の半分を占めており狭い。
普段何事においても文句など言わないバルゴでさえ「狭いな」と苦言を洩らした程であり、それは長い時間を共有してきたミゾレが初めて聞いた不満の言葉でもあった。
「バルゴ、そういえばさっき何買っていたの？」
「ああ、この部屋に緑が欲しくてな。観葉植物を一個買ってみた」
バルゴの掌に乗る程度の鉢に、蔦状の植物が青々と顔をだしていた。ネームタグには＞アイビー＜と記入がある。
「うっきー君と名付けた」
そのネームセンスはどうかと思うが、確かに限られた空間に植物が一つあるだけで心持が違う。
うっきー君を窓に置き、倫敦市街の地図を床一面に広げる。
丸一日を費やし確認した倫敦の主要施設はホテル、鉄道、大時計、巨大跳ね橋、果ては銀行や博物館や劇場まで及ぶ。
「やはり怪しいのは、ここね」
ミゾレが地図の中心に×を付ける。
倫敦大学連合。

ラッセル・スクエアという公園のような巨大な広場に十九もの大学と、十二の研究機関が存在する、西の国最大の大学である。
「そうすると禁術書は何かしら意図を持ってこの街に運ばれてきた？」
ミゾレがマーカーを顎に当てて独り言のように呟く。
「その目的は禁術書の閲覧か？忍術による封印を施された物を、何の知識を持たない者が開封できるのか？」
ミゾレの疑問をバルゴが継ぎ足す。
疑問による言葉のリレーは何の生産性もなく、ただ時間だけが消費される。
考えが纏まらない議題を放棄し、ミゾレは枕を抱いてうつ伏せになり、バルゴは手裏剣、クナイの手入れに勤しんでいる。
自分たちが何者であるかも忘れる程の、静寂で優しい刻。
静まり返る室内に雨が窓を叩く音が響く。
「そういえば」
ミゾレが枕に顔を埋めたまま、独り言にしては大きい言葉を口にする。
クナイに鑢（やすり）を掛ける音が宙を漂う。
「あの娘はどうなったかな」
アリアドネの事だろう。元々そういう性格なのか、ミゾレは『縁』を大切にする傾向がある。そこには、何かの縁で繋がっているとしか思えない相棒、バルゴという男の存在が大きく起因している。
故に冷酷になれるが、非情にはなれない。そこがミゾレの長所でもあり、欠点だという事をバルゴは承知していた。
この女が真に心を刃と成り得ないのであれば、自分が刃（は）となり、悪となろう。忍は善である必要もないが、必要以上に悪で要る事も無い。この女の足りない感情を自分が補ってやろう。そう考えていた。
「心配か？」
手入れを終えた忍具を丁寧にホルスターに仕舞いながら訊ねる。

「必要以上に傷付いていなければいいけど」
自分は言葉が足りないと自負しているが、ミゾレという女は大切な一言が足りない。
いつもの事に、聞かれないように静かにため息をする。
「なら見に行こうか。夜警も兼ねて、バレないよう外から覗いて様子を見よう」
外は雨脚が強く、既に暗くなった視界は不良。
戦闘装束にマントを羽織り、街灯の発するオレンジ色の光に揺らめく影二つ。
二人の忍が異国を駆ける。

忍者、異国を駆ける　7

気が付けば四方を石で囲われた倉庫のような場所に居た。
硬い木製の椅子に手足は鎖で繋がれており身動きが取れない。
アリアドネの細い腕を錆びた鉄の錠が猛禽類の爪のように食い込み、捕らえて離さない。
ようやくはっきりしてきた目で辺りを伺う。
白熱球に照らされた周囲には誰も居ない。
しかし、見るからに痛そうな鞭や用途不明な道具が几帳面にも壁に並べられており、理解のできない恐怖が全身を包む。
しばらくすると自分の身体が『綺麗』になっている事に気付いた。
ウェーブの掛かった金髪や垢だらけだった身体は、まるで石鹸か何かを用いたかのようにさっぱりし、染みや泥だらけで汚かった衣服はまったく別の物へと履き替えられていた。
バルゴのような黒いスーツの男装をさせられた自分の姿に混乱する。
次第に覚醒してきた頭が意識を失う直前の記憶を呼び起こす。
そうだ。自分はあのジュイドに捕まったのだ。
倫敦市警ジュイド。熊のように大柄な男で賄賂さえ渡せば殺人すら揉み消す悪漢。そして最近スラムの子供たちが突然行方不明となるという噂の犯人とされる人物。
先日も『ミノタウロス』の家族で、年上だった＞ミノス＜という少年も神隠しに遭い、今だに発見されていない。
スラムのガキなど何人死のうが居なくなろうが事件にならない。警察に相談しに行ったアリアドネがはっきりと聞いた無常な現実。
馬鹿馬鹿しいにも程がある。
だが、この街では金の有る無いだけで、命の天秤が大きく傾く。
だったらバカな大人からその金を巻き上げ、幼い兄弟たちを養おうと思った。悪い事だと理解はしていたが、兄弟たちが餓えで死ぬ

姿を想像するよりマシだった。
ミゾレの言葉が脳裏をよぎる。
『今後はこんな事は辞めなさい。でないと、いつか大切な人たちを巻き込む事になるわよ。……そうなってからじゃ、遅いんだから』
これはその報い。改心し、やり直そうとしても手遅れだったという事なのだろうか。唯一の救いは、その毒牙が、兄弟ではなく自分に振ってきた事。
しかし残された幼い兄弟たちの気持ちを考えると涙が出て止まらない。
ふいに部屋の隅の小さい机に輪で閉じられた鍵があるのを見つけた。
冷静に状況を把握すると、右手の鎖の締め付けが指二本分、他より弱い事に気が付いた。
束縛する手錠から渾身の力で手を引く。
白い肌に傷が付き、血が滲み出す。
手首の関節が抜ける寸前で手錠の拘束が解かれた。
椅子を引きずり、体重移動で鍵の元へとたどり着く。
三つあるうちの一番小さい鍵が見事に他の手錠の鍵穴に収まり、カチャリと拘束を解く事ができた。
残る鍵は金、銀の二つ。察するに部屋の扉の鍵であろう。
長い間同じ姿勢でいた為、手足が少し痺れ、足元がおぼつかない。
ふらつく身体を壁で支え一歩ずつ部屋の扉の前へ歩みを進める。
扉に耳を当て、向こうに誰も居ない事を確かめる。
ひやりと冷たいドアノブを、ゆっくり、音を立てずに回す。
おかしい。鍵が掛かっていない。
容易に開いた扉を抜けた先は、漆黒。
一寸先すら見えない暗黒にようやく慣れた目が写したモノは、長い廊下だった。
窓すら無い牢獄のような通路は、まるで黄泉路へ続くかのようで、明かりの無い道を一歩一歩確かめながら進む。

石の壁に手を着きながら歩んでいると、石とは違う感触に思わず手を引っ込める。
鉄の扉が、異様な臭気を放っている。いや、正しくは鉄の扉の向こうから、生き物が腐ったような臭いが漏れ出していた。
有りすぎる心当たりに大粒の汗が滴り落ちる。
その扉には銀の鍵が納まった。
開けてはならない。脳が危険を理解し、開放を拒否する。
中には何が？
意識が、脳の命令を拒絶する。
中には何が？
ゆっくりと、腐臭漂う空間へ続く扉を、開く。
中には何が？
開放され、流動した大気を察知した蝿の羽音が静寂を犯していく。
中には何が？
咽返（むせ）すような濃密な臭気に思わず嘔吐し、涙が流れ、口と鼻を手で覆う。
中には、何が？
少年だった残骸が。少女だった名残が。そこにはあった。
四肢を寸断され。皮を剥ぎ取られ。内臓を切り分けられ。脳髄をくり貫かれ。この世のモノとは思えない惨劇を目の当たりにし、身体が、精神が崩れた。
あまり腐敗の進んでいない新しい物体に目をやる。
そこには見覚えのある顔があった。
見間違うはずがない。それは『ミノタウロス』の家族。一番年上のミノスだったモノが、頭と身体を切り離され、放置されていた。
ここに在るモノは全て、あの悪魔（ジュイド）に、身体を犯され、人権を侵され、魂を冒された末。
早く逃げろ。
家族だった少年が、アリアドネに告げた気がした。
気を抜けば発狂しそうになる精神を寸前で押し留め、廃絶した空

間を後にする。
フラフラと定まらない足元を『金の鍵』という一縷(いちる)の望みが支える。
もう他の扉には目もくれず、出口を目指す。
錆び付いた階段を下へ下へと降りていく。
もう他に通路は無く、下へ続く階段も無い。
眼前には頑丈そうな鉄製の扉が一枚。隙間からは僅かに風が吹き、外が近い事を教えてくれていた。
震える手で、金の鍵を鍵穴に差し込む。
深呼吸をし、ノブを掴む手に力を込める。
ガチャリと、錠内のシリンダーが回る音がした。
白熱球程度の光が暗闇に慣れ過ぎた瞳を穿つ。
中には、何が？
そこには、人の皮をかぶった悪魔が邪悪な笑みを携え、僅かな希望を手に地獄を抜けてきた少女を待ち構えていた。
「おめでとう。ここが終着駅だ」
鬼畜生にも劣る男が嬉しそうに艶やかに哂う。
この時アリアドネの手にした三つの鍵は、希望へと続く切符などではなく、最初から仕組まれた絶望への招待状だったという事を、ようやく理解した。

忍者、異国を駆ける　8

南の貧民街。入り組んだ迷宮の一角にある、小さな一軒家。
身寄りの無い少年少女たちが他人の温もりを求め合い、寄り添いあう隠れ家。
ミノタウロス。
ギリシア神話に登場する、牛の頭と人間の身体を併せ持つ怪物の名を冠した秘密の基地は、アリアドネという中心の少女を失い、太陽を欠いた空同様、真っ暗な部屋の中で幼い少年少女たちが泣き喚き、葬式同様の雰囲気が漂っていた。
「どうだ、ミゾレ？」
降りしきる雨の中、付近の建物から部屋の様子を伺っているミゾレに声を掛ける。
読唇術を心得ているミゾレは中で話している人間の唇の動きを読み、会話の内容を盗み取っている。
「やっぱり帰っていないみたいね、あの娘。一体どこに行ったのかしら」
振り返るミゾレの両の目は三つの勾玉文様が浮かびあがり、色彩が真紅に輝いている。
写輪眼。
うちはの一族が今日まで伝えてきた秘術中の秘術。
その特性は、ずば抜けて高い洞察力により『忍術、体術、幻術』の全てを見切るといわれ、高速で動く物体すらその視野に置く程の高性能な瞳術。
稀有な特異体質は血継限界と呼ばれ、多くが強大な力を有し、その秘密を守り、伝承する事は一族の、そして里にとっても隠匿する必要のある、生ける財産ともいうべき代物であった。
しかし、高すぎる能力を持つ者は自然とその土地の支配者となり権力を振るう事となる。

それを妬んだ者たちにより差別や迫害を招く要因ともなり、その過去はまさに血塗られた歴史と言っても過言ではない。
取り分け、うちはの一族はその業が深く、木ノ葉里を壊滅させる程の事件を度々起こしており、その粛清によりうちはの栄華は衰退の一途を辿る事となり、宿命の業火は彼女の代になっても、その身を焦がし続けている。
「事件にでも巻き込まれたのかしら？」
焦り、苛立つ瞳で幼い子供たちの会話を探る。
そしてようやく見て取れた単語は、中央通り、大人、ミノス、連れ去られた、東の倉庫街。そしてジュイド。
瞬きするのも忘れる程の集中力でようやく得た有力な手がかり。
『中央通り』と『大人』というのは、察するに自分たちの事だろう。
つまり自分たちと別れた後、ジュイドという者に東の倉庫街へ連れ去られたと解釈するのが一番しっくりくる。
ミノスという名前も、『ミノタウロス』のメンバーなのかもしれない。
バルゴの腰に下げた懐中時計が、刻一刻と秒針を削っていく。
悪意を持った大人がか弱い子供に何をするか。言うまでも無い下劣で最悪な想像に焦りが生じる。
アリアドネと別れて既に数時間が経過している。もはや一刻の猶予も無いかもしれない。
東の倉庫街にある倉庫の総数は大小合わせて、五百にも及ぶ。一つ一つ調べていたら夜が明けてしまう。
ミゾレが辛酸を舐めた面持ちで東の街を見下ろす。
「……先行するわ。チャクラが見える倉庫を片っ端から調べる！」
バルゴが「待て」と言い終わる頃には既にミゾレの姿は夜の闇へと消えていた。
雷遁系の忍術による肉体活性による高速の移動。その神速と称されるミゾレの足は里随一を誇る。

とはいえ、冷静さを欠いたミゾレは本気で全ての倉庫を捜索するつもりだろう。人目につくようなヘマはしないだろうが、あまりにも非効率だ。

「僭越(せんえつ)ながら……」

バルゴの後方から声が聞こえた。中性的な声は男とも女とも判断できない。

誰が。というのは愚問だった。今この倫敦の地に居る忍は三人。

バルゴ。ミゾレ。そして――。

「狢(むじな)か」

振り返ると、暗黒を纏(まと)っていると見紛うような黒いフードをかぶり、『狢』の名が示す通り、狸の面をした忍がそこに立っていた。

眼下の街灯が二人の忍を妖しく照らす。

「何だ。言え」

味方であるとはいえ、明らかに警戒の意を示すバルゴの口調に微かに戸惑いが見えた気がした。

「では申し上げます。現在のミゾレ様、バルゴ様の行動は、任務とは何ら関係がありません。無関係な少女の捜索など、即刻辞めるべきかと」

それは忍としてまったく正しい言葉。正論。任務の成功を最優先とすべく、私情挟むべからず。非情たれ、無慈悲たれ、という言葉を常とする忍の掟。

教科書どおりの文章を口にする忍をバルゴが冷酷な瞳で見据える。

その双眸からは明らかな敵意が読み取れる。

「俺たちにとって、任務達成は必ず遂げねばならないモノだ。その為に仲間と協力し、時にはいかなる犠牲も厭わんとする。　そんな世界に身を置くからこそ、俺たちは仲間との繋がりを大切にする」

いつになく饒舌に話すバルゴの表情は決意にも似た意思が宿っている。

「だから、俺は、あいつが大切にしている『縁』を大切にする」

それはバルゴが唯一、己が胸中に抱く忍道。生死流転の目まぐる

しい闇の世界で、流れ流れる年月を経て得た結論。
「邪魔するな」
漆黒の闇を孕んだ言の葉に、心臓が捕まれたような感覚を覚える。バルゴの殺気に身体が震えている。まるで呼吸する事すら許されない絶対的な恐怖。
「判りました。そこまで言われるのであれば、その少女の捜索、私も協力致します」
「助かる」
そう言いながらも狢に向けた敵意と警戒を解く気配は無い。
「索敵は、私の得意分野です」
この男と分かり合えるには、まだ暫く時間が必要なのかもしれない。
何か諦めたように肩を落とした狢が両の手を眼前に沿え、人差し指を合わせ虎の『印』を作る。
火遁を司る虎の印は、体内を通るもう一つの神経、経絡（けいらく）に活性を促し、流れるチャクラの量を高め術の発動を促す基本的な印でもある。
「白眼！」
それは木ノ葉の中でも最強を誇る『日向一族』の秘伝。絶対可視の特性を持ち、視界は３６０度。視認範囲は数十キロ以上にも及び、構造物の内部はおろか、人体構造すら把握する千里の瞳。
無機質な仮面の奥で、全てを見通す白き瞳が東の倉庫街をくまなく探す。
「東の倉庫街で、それらしいチャクラを発見しました。ですが、経絡の動きから、何者から逃げているように見えます。ミゾレ様は……離れた所を捜索しているようです」
「場所は？」
「似たような建物が無数に隣接しています故、案内します」
「頼む」
先導を狢に任せ、戦闘装束に仕込んだ無線でミゾレに呼びかける

が、降りしきる雨が電波を妨害し、通信が出来ない。
間に合ってくれ。
神にも祈りたい気持ちを噛み締め、暗雲立ち込める東の空を、翔る。

忍者、異国を駆ける　9

その男は、自身を歪んでいると認識していた。
幼くして実の父に虐待を受け、母もおらず、友人と呼べる者は皆無。
食事も満足に与えられる事も無かった。灰皿が無いと煙草の火を押し付けられた事もあった。顔が気に食わないと真っ暗な倉庫に閉じ込められた事もあった。理由も無くバズタブに沈められ溺れかかった事もあった。
やせ細り、痣だらけの少年に近寄ろうとする者などおらず、故に相談できる相手もなく、理解者もなく、孤独だった。
地元の有権者だった父が、死んだのはその男が二十五歳を過ぎてからだった。
原因は急性心不全による心筋梗塞。見取る者も無く，寂しい最後だった。
傍若無人で唯我独尊であった父にはお似合いの最後であると、腹を抱えて哂った。
既に倫敦市の警官になり一人前に自立し、父の手の届かないところに居た男は、父の残した莫大な遺産の整理をしていると自分の戸籍を見る機会があった。そこには、やはりというべきか、『養子』とはっきりと記入されていた。
几帳面に付けられていた父の日記には、男の誕生日の日に玄関に置かれていたと書かれていた。
何の感慨も沸かず、何の感情も生まれず、ただあるがままに受け入れた。
それから暫くして、好きな人ができた。
二つ下の美しいブロンドの髪を持つセーラという女性。まだ駆け出しの女優でミュージカルを見て一目で好きになった。
猛烈なアタックの末に遂に念願の両想いとなり、婚約まで行き着

けた。
幸せだった。父の呪縛から解き放たれ、何もかもが上手く行くと思っていた。
だが、それは泡沫(うたかた)と消える事となる。
セーラの目的は初めから父の残した遺産だった。
真面目に街の見回りをしていると、偶然にもセーラが路地裏に入っていく所を見かけ、驚かしてやろうと後を付けると、そこには見知らぬ男がセーラとキスをしていた。
天地が逆さになるかのような衝撃だった。足元が瓦解し、自分という存在が崩れてしまうような錯覚を覚えた。いや、思えばこの時、亀裂が入っていた心が完全に崩壊してしまったのだと思う。
手に持った拳銃で男を射殺し、婚約者からただの女に成り果てた女を、悲鳴と共に殴り、号哭(ごうこく)と共に蹴り、懺悔の言葉と共に爪をはぎ、後悔の念と共に歯を折り、陵辱の限りを尽くし、慟哭と絶望の果てに殺した。
女の阿鼻叫喚は今まで経験した事のない快楽を男に与えた。
何かの役の格好だったのだろうか、男装した姿を嬲るのはとても楽しかった。
だが、何かが違う。こうではない。足りない。満たない。何かが欠けてる。
名も知らぬ男と、恋人だった女の屍骸を、父の潰れた会社の倉庫に隠し、欠けた何かを捜し求めた。
埋まらない空白とは何か考える場所は静かでなくてはならない。周囲を空き家や、使用者の居ない倉庫で囲まれた、父の倉庫は、考え事をするのに最適だった。
そんな最中、運悪く何も無い倉庫に物盗りに来た少年が、男と出くわした。
少年の姿を眼にした瞬間、過去父に受けた虐待の経験がフラッシュバックした。
まるで天啓を受けたかのように何かが満ち、何かが充(み)ち、そして

何かが狂った。
内に眠る悪魔が福音と共に目を覚ました。
追って追って追って、恐怖から逃げ惑う後ろ姿が好きだった。
さぁ、逃げろ。必死に逃げろ。捕まったら死んじゃうぞ。
獲物が一番絶望する表情を見せるのは一体どんな時か。
それは希望が絶望に変わる瞬間。
その為に与える困難は難しい程いいスパイスとなる。
様々な試行錯誤の末、たどり着いたのは幼少時に読んだ昔話だった。
シャルル・ペロー著『青髭』という名前の童話で、青い髭を生やした金持ちの男が、結婚したばかり新妻に屋敷の鍵を渡すが、金の鍵の扉は入ってはいけないよと忠告する。
その忠告を無視した新妻が見た光景は、青髭の前妻の成れの果てだった。
昔話では新妻の兄が助けに入るという終わりをしているが、鍵をあえて渡すという発想は面白いと思った。
そして実行した。
今、逃げ回っている少女は、本当にいい表情をした。
本気で外に出られると思ったのだろう。残念。そこは逃避の終着駅。
真っ暗な道を懸命に走っている。歩いてきた地獄を逆戻りしている。
さぁ逃げろ逃げろ。
どこに居るのかな。
この扉かな。
あっちの扉かな。
獲物がたどり着く場所など決まっている。
男にとっては一番奥の部屋。少女にとっては初めの部屋。
わざと足音を立て、ゆっくりと歩く。途中の扉を開閉し、しだいに近づいてくる恐怖を煽る。

さぁ、この扉で最後だ。
晒うのを堪える事ができない。
内側では少女が鍵の無い扉を必死に押さえつけている姿が想像できる。
ドアノブに手をやり、力を込める。
当たりだ。
少女の絶叫が鉄の扉の向こうから聞こえてくる。
堪えきれなくなった男の哂いが少女の哀号と共鳴する。
少女の力が大人の力に敵うワケもなく、ついに最後の扉が開かれる。
部屋の隅へ後ずさりする。恐怖で涙や鼻水でくしゃくしゃになった顔に思わずイきそうになる。
泣いている表情。咽び啜り落涙し零涙し涕泣し号泣し哀泣し悲泣し絶泣泣嘆号哭泣哭涕哭痛哭慟哭慟泣絶哭哀悲哭哄哭嗚咽。
渾然一体となり混沌にも似た顔。そうだ。その表情を待ち焦がれていたんだ！
初めからこの部屋で愉しむつもりで、色々な道具を壁に掛けておいた。
鞭を手に取り、少女を見下ろす。
泣け。喚け。命を乞え。全てを無駄と悟り、俺の玩具となり飽きるまで嬲られ続けろ。
少女のウェーブのかかった綺麗な金髪に、男が手に掛けようとした寸前、落雷のような豪快な音と共に石壁が砕け、衝撃と共に雨を纏った突風が室内を爆砕した。
「アリアドネ！」
若い男の声が室内に響いた。
ありえない第三者の介入に困惑する。
粉塵が晴れ、その輪郭がしだいにはっきりしてくる。
そこには金髪碧眼に見たことも無い格好の青年が、そこに居た。

「バルゴ！」

予想すらしなかった助けに悲泣（ひきゅう）が感涙（かんるい）へと変わり、バルゴと呼ばれた青年の胸で大粒の涙を流した。

忍者、異国を駆ける　１０

突然の来訪者に慌てふためく。
何だコイツは？どうやって分厚い石の壁を破壊した？そもそもなぜここが判った？
得体の知れない人間。いや、人間であるのすら疑わしい。
悪魔だ。魔女だ。ひょっとするとそれ以外の何かなのか？
知覚できない未知の恐怖に足が後退する。
「アリアドネ！無事？」
「ミゾレぇ！」
今度は黒髪の女だ。似たような格好をし、その出で立ちからこの国の者ではない事が伺える。
女のもとへ駆け寄り、母に慰められるように、また泣いている我が子を慈しむようにその腕に抱かれている。
もうワケが判らない。
「バルゴ、アリアドネをお願い」
「ああ」
短く返事をすると金髪の男が少女を抱きかかえ、自分が空けた穴から音もなく鳥のように跳び去ってしまった。
雨音だけが時間の流れを告げている。
静かな空間で黒髪の女と、倫敦市警の男が対峙する。
「何だよ、貴様……。一体何者なんだよぉ！」
混乱や怒りを孕んだ男の怒号がけっして広くは無い石造りの部屋に響く。
「あんたみたいなゲス野郎に名乗る名なんか無いわ」
女の両目が真紅に光り、瞳の勾玉文様が幾何学模様へ姿を変える。
魔性を帯び妖しく光る瞳から目が離せない。
「その罪、地獄の業火で贖いなさい。永遠に続く刻の檻でね」
万華鏡写輪眼。月読。

黒髪の女が告げた瞬間、全てが元通りになっていた。
金髪碧眼の男が破壊した壁もその形跡すら無い。
しかし、違和感がある。自分はいつ椅子なぞに座ったのだろう。
周囲には誰も居ない。取り合えず立ち上がり、部屋の隅の小さなテーブルに金と銀の鍵が置いてあるのを見つけた。
何だこの鍵は？考えても判らないから、取り合えず部屋を出よう。
ふと、違和感に気が付く。自分の視点は、こんなに低かったか？
部屋を抜けるとそこは真っ暗な一本道。ますますワケが判らない。
暫く歩くと、鉄の扉があった。
銀色の鍵を指し込み、恐る恐る扉を開く。
金属が軋み、猫なで声を発する。
ゴリゴリと何かを削る音がする。
一心不乱に何かの作業をしている影に、足音を立てずに近づく。
そこには――。
顔を絵の具か何かで黒く塗りつぶされた大柄な男に、『自分』が四肢を切断されていた。
思わずしりもちを付いてしまい、悲鳴を上げる。
それに気付いた男が表情の見えない黒い顔をこちらに向ける。
殺される。
本能が告げ、悲鳴と共にその場を走り去る。
暗い暗い一本道を一目散に抜け、錆び付いた階段を一心不乱に下った。
呼吸も絶え絶えにようやく辿り着いた大きな扉。
ロダン作『地獄の門』のミニチュア版のような禍々しい扉の鍵穴に、金の鍵を差し込む。
眩い光が差し込み、目が眩む。
よかった。これで逃げられる。安堵し、全身の力が抜けた
床に目を落とし、荒れた呼吸を整える。
部屋の白熱球が、自分とは違う別の人間の影を作った。
誰だ？そう思い、虚ろな表情で、目の前に立つ人物を見上げる。

そこには、
そこには、死んだはずの父が嬉しそうな嘲笑を浮かべ、男を見下していた。
「おめでとう。ここが終着駅だ」
どこかで誰かが言った台詞。寸分の狂い無く再現された己が狂気。
これから始まる地獄の饗宴に、ジュイドと呼ばれた男の精神は、現実とは違う幻の世界で今度こそバラバラに砕け散り、砂礫と化した。

その後。

いつの間にか雨がやみ、湿り気を帯びた清純な空気が霧の街を漂っていた。
厚い雲間から月は見えず、オレンジ色の街灯が優しく霞みを照らす美しい街を、二人の忍が闇夜を駆ける。
狢はいつの間にか姿を消しており、暗部の人間らしい行動にバルゴが苦笑にも似た笑みを浮かべる。
胸に抱かれたアリアドネは壮絶な緊張から開放された為か、穏やかな寝顔を浮かべている。純粋無垢な顔に思わず顔が綻ぶ。
それは隣にいるミゾレも同意だったようで、顔を合わせると堪えきれなくなった温かな感情に笑みが出る。
ミノタウロスに着き、少女を下ろそうとするが、小さな手は夢の終わりを拒絶するかのようにバルゴの腕をしっかり捕らえて離さない。
アリアドネの手を無理やり振り解くのを諦め、忍の隠れ家に連れて行く事にした。
相変わらず狭い部屋で観葉植物のうっきー君が出迎える。
二人が寝るには狭いシングルのベッドも二つ重ねれば、大分余裕が空く。

手早くシャワーを済ませ、三人川の字で眠りに付く事にした。
何だか親子のような雰囲気にミゾレは、照れとまんざらではない自分の感情に驚きを感じながら、横たわるアリアドネを慈愛の瞳で見つめる。
その奥では相棒が既に寝息も立てずに眠りについている。
一夜限りの親子ごっこ。朝日が昇る頃には全てが幻のように散る関係。
だが、その手を握る小さな、それでいて確かな手ごたえを優しく握り返し、ゆっくりと瞼を閉じる。
誰に告げる事なく呟いた「おやすみ」は、その余韻を残し、静かに闇へと消えていった。

幕間　　狢―むじな―

今から五ヶ月程前に遡る。
第十三代目火影より召集を受けた私は西の異国『倫敦』へ、ある書物を追う任務を受けた。
名を『甲第一級禁術封印指定書』通称大蛇丸の書と呼ばれる、長い木ノ葉の歴史に中でもその異質性、異常性は群を抜き、最悪の術を記した禁忌中の禁忌として、忘れ去られる事を目的として地下深くに封印していた書である。
実行犯は拷問中に自死。協力者は目下捜索中。目的も不明。ただし、他の暗部の情報によると、西洋の貿易船により海を渡ったという所まで判明したらしい。
忍の任務は基本三人一組で行われる。理由は後人の育成。生還率の向上などが上げられる。今回私の他に、＞星空　バルゴ＜そして＞うちは　ミゾレ＜の両名がチームとして加わるらしい。
訂正。加わるのは私の方だ。彼らは現火影の元チームメイトであり、火影が任務を行う立場から指示する立場に変わったこの数年、ほとんどの任務を二人一組で行っていたらしい。
暗部でも無い忍が三人以下で任務を行うのは異例という程でもないが、珍しい事例であり、現在百を超える小隊が木ノ葉に存在するが、二人一組で行動しているのは、彼らだけであり、それが火影の信頼を得ているという証でもある。
つまり、この二人の上忍は、私なんかでは及ばないほどの凄腕、歴戦のベテランという事になる。
特に星空　バルゴの名前は昔から知っていた。いや、星空の一族についてと言った方が正しい。
星空の一族は、その名が示す通り木ノ葉に根付いた者ではなく、衰退し滅亡した他の里から流れて来た流浪の一族であり、既に半世紀が過ぎようとしている今でも『新参者』『異邦人』『野蛮人』等

の影口を叩かれている。
　しかし、出身者は総じて有能、優秀な者が多く、今まで一族の名前に胡坐(あぐら)を掻き、保身しか考えぬ一部の無能な者たちが吐く戯言に過ぎず、有無を言わさぬ高い実績は、確実に里全体の信頼を得ている。
　更に次期当主であるバルゴが、十三代目火影が率いていた小隊に在籍していたという事実もその要因となっている。
　古くから木ノ葉を守護し続けてきた『日向』の一族が、良くも悪くも興味を示したのは、一族に名を連ねる私ですら意外な事であった。
　星空一族の優秀さに目を付けた本家の当主が、当時まだ十二、三歳だったバルゴと同い年の次女、日向　ヒヨリとの婚儀を申し出たのだ。
　日向一族としても有能な新しい血を欲し、星空一族としても里で最も力のある一族の仲間入りを果たせるという両者の利が一致。それは早急に執り行われたと聞く。
　だが、結納直前にそれは破談となる。
　日向　ヒヨリの急死。そこには権威の傀儡と成り果てた古参の者たちの思惑があった。
　実行犯、腰掛　キンシ。三代目火影を輩出した猿飛一族の分家筋にあたり、懐古主義者であり、保守派の筆頭でもあった男。のちに、『枯れ葉事件』と呼ばれ処理される事となる。
　初め、バルゴを標的としたキンシは就寝中のバルゴを襲撃。直前に気付かれ失敗。この時、弟の星空　レオが彼を庇い意識不明の重症。
　現在は回復したが、忍としての生命線は断たれる事となった。
　バルゴ暗殺未遂を聞きつけた日向一族が総力を挙げ犯人を特定。追い詰められたキンシは特攻覚悟で再度バルゴを襲撃するも失敗。
　一件落着と思われたが、キンシが謎の獄死を遂げる事で事態は急転する。食事に毒を盛られた明らかな他殺であり、検死の結果、そ

の毒はある一族が呪印を施す際に使用される薬を用いて作られた、極めて珍しい薬物である事が判明した。
それは日向一族が白眼の秘密を守るため、分家筋の者に施す呪印。繁栄しすぎた日向の意思は一つではなくなってしまった事の証明でもあった。
犯人は日向　カイコ。
日向の分家の人間で、キンシと同じく懐古主義者で、今回の婚儀の件を『本家の暴走』とし、拘束された際、仲間は他にもいると洩らしたという。
これを知った本家次女、ヒヨリは自らが死ぬ事でバルゴを護れると思い、同じ毒で服毒自殺を図る事となり、最悪の結末を迎える事となった。
バルゴは眠っているかのようなヒヨリの亡骸に、声を上げ、大粒の涙を流し、妻となる筈だった少女の死を悲しんだという。
その後、暗部へ配属されたバルゴはその秘匿性ゆえ活躍は公開される事が無いが、名声は噂として、私のような後輩にも伝説として語り継がれる事となる。
だから私は、星空　バルゴという人物に憧れ会ってみたいと思っていた。
そして話した。
結論は、流石というべきか、私が日向の一族の者である事は見抜かれていたようだ。
『狢』というコードネームはあからさま過ぎなのかもしれない。
同時に、ヒヨリを死に追いやった『日向』を憎んでいるとも感じだ。
それで良い。
彼はヒヨリの死を忘れてはならない。今の彼があるのは我が姉、日向　ヒヨリの犠牲の上にある事を、彼は忘れてはならない。
メメントモリ。死を想え。忘れるな。それは自身へ向けられた言葉なのだと。

狢。『同じ穴の狢』という言葉が示す意は、『結局は同類である』という例え。
狢。化け狸の別称。
狢。それが私の今の名前。
狢。化かすのは、敵か味方か。

忍者、異国で戦う　1

倫敦大学病院。倫敦の中心に近い場所に位置し、倫敦大学連合の建物が整然と立ち並び、学生や関係者が日々研究に勤しむ、地域における医療の要。

赤いレンガ造りのその建物の地下深くにそれはあった。

何重にも掛けられた鍵は何人の侵入をも阻み、薄暗い通路の奥からは時折、断末魔の叫びにも似た咆哮が、地下特有の澱(よど)んだ空気を震わせていた。

封印された扉の奥、建物の建築図面上、あるはずの無い部屋で白衣を着た研究者と思われる男たちが様々な研究用機材を操作し、その結果を克明に記録している。

研究者たちの眼前には分厚いガラスの壁があり、その奥では、四方を染み一つない真っ白な壁に囲われ、中央には一人の精神崩壊者が、生きた屍となり静かに椅子に座らされていた。

「この男かね。東の倉庫街で大量の遺棄された死体とともに発見された唯一の生存者とは」

「はい。ただ、脈拍、心拍、脳波ともにかなり数値が低く、首の皮一枚残して、かろうじて生が繋がっていると言った方が的を射ているかもしれませんね」

おそらくその場において一番偉いのであろう中年の男が手渡された資料を端から端まで、興味深そうに読んでいる。

男の名はジュイド。倫敦の有権者の息子にして警官。父が残した倉庫の中で大量の遺棄死体とともに、精神が完全に崩壊した状態で発見された。

だが、発見の前日までは普通に出歩いている様子を街の住民から目撃されている。

彼はごく一部の仲間に、貧民街の子供をターゲットとした人間狩りを行っていると自慢げに話しており、見つかった倉庫はその遊技

場兼解体場所であろう。
しかし、一夜にして人間の精神をここまで完全に壊す事など出来るのだろうか。
外傷も、薬物を注入された痕跡も使用した様子も皆無。その他外的要因の可能性で無いとすれば、他に一体どんな要因が考えられるだろう。
故にこの男は研究者たちの、興味深い実験体としてここに運ばれてきた。
もう公的には死亡したとなった男の末路は、『ジュイド』という名から『被験体』として番号が振られ、開発中の薬物実験の良い対象となり、最後は廃棄となり処分される。
「教授、お持ちになられている本が……」
教授と呼ばれた中年の男が大事そうに抱えている不気味な本が、心なしか紫色にぼんやりと光を発しているように見える。
「これは……？」
頼りなく点滅を繰り返す様はまるで蛍の光のようで、だがその邪悪な蛍光は今まで見たこともない美しさを男の目に焼き付けた。
だが、何故だ。一体どういう事だ。今まで如何な手段を用いても一切の反応を見せなかったこの『魔導書』がこんな場所で、こんなにも禍々しい光を発しているのか。
ガラスの向こうに座っている、精神崩壊者に双眸を向ける。
あの男と関係があるのか？
研究員の制止を振り切り、書に導かれるように男のもとへ歩みを進める。
手に持つ魔導書が、男との距離に比例するかのように光を強める。
が、眼前まで来たところで、まるで興味を失ったかのように発光を止め、完全に沈黙してしまった。
一体なぜ？
つい今しがたの出来事が嘘だったかのような静かになった魔導書に眼をやる。

何かが起きようとしている。
予感めいた自分の勘に、堪えきれなくなった笑いが、無機質な白壁にこだました。
魔導書よ。我に天啓を。
世界に呪いを。人々に災いを。
邪悪な意思を以って悪逆不動の境地を我に与えたまえ。
共に歩もう。魔導書よ。そして我が願望を享受したまえ。

忍者、異国で戦う　2

その日は珍しく朝から雲一つ無い快晴だった。
紙袋いっぱいの日用品や食料を買い込んだバルゴとミゾレが、整然とした石畳の街を悠々と歩いていた。
両手に余るほどの荷物を抱えているバルゴとは対照的に、ミゾレはハンドバックをぐるぐるとぶん回し、マーケットで購入したリンゴを、陽気に鼻歌を歌いながらしゃくしゃくと食べている。
少しは持てよ、と言いたくなる衝動は、見上げると眩しい太陽の暖かな日差しにかき消され、何だかどうでもよくなってしまう。
大通りの道の向こうではウェーブの掛かった金髪の少女が、観光客と思しき若いカップルを先導し、にこやかに街の説明をしている姿が見える。
先日助けた少女、アリアドネは二人に気付く事なく、中央へ続く道を元気に歩んで行った。
その様子を目で追っていたミゾレは、姿が人ごみに消えると同時に振り返り、その綺麗な黒髪を優しく流れる風に揺らす。
「あの娘もちゃんと頑張っているみたいね」
「頑張って重たい荷物を持っている俺も労ってもらいたいな」
「軟弱。いいわ。あのお店で休憩しましょ」
ミゾレが指差した先にはある小さなカフェテリアが昼時の賑わいを見せていた。
そういえば朝から何も食べてない。これはちょうどいいのかもしれない。
石で舗装された店内は満席で、道に置かれたテーブルで食事をする事となった。
外に置かれた三つテーブルは、既に二つが埋まっており、残った最後のテーブルへ着く事にした。
注文したのは以前アリアドネに紹介されたマルゲリータピザ。

違う店ではあるが、その単純でかつ店によって事なる食感や風味に魅了されてしまったらしい。
一度はまると集中的に食べ続けるというバルゴの食癖を熟知しているミゾレは、驚く事もなく、少しばかりのため息と栄養バランスを考えなさいと注意するだけに留まっている。
ピザが好きな忍者は、確か甲羅を背負っていたような。
「すいません……。ここ、合い席いいですかねぇ？」
のんびりした声に振り返ると、無精ひげを蓄えた中年の男が車椅子の少女を連れ、愛想笑いを携えバルゴの後ろに立っていた。
「どうぞどうぞ」
バルゴの代わりにミゾレが答える。
「へへ。すいませんねぇ。若いカップルの邪魔をしちまいまして。俺も歳だから、少し歩くと足腰が悲鳴上げてるんですわ。ほら、テセアラもお礼を言いな」
「どうもありがとうございます」
「どういたしまして」
またもやミゾレが笑顔で答える。移動したのはバルゴなのだが、口数の少ない彼の分を補っている。
無言で席をあけるバルゴにヘコヘコしながら愛想笑いをする。
赤毛に整った顔立ちをした少女がミゾレの隣に席をつける。
「今日は観光か何かでこの街に？あ、ひょっとして新婚旅行ですか？いいですねぇ」
新婚旅行という単語に反応したミゾレが、思わず口に含んだ紅茶を噴出す。
むせているミゾレに一瞥もくれる事なく、バルゴが「そんなところです」と短く答える。
「こんな美人と結婚できたなんて羨ましいですねぇ。何ですか、もう熱い初夜は過ごされたんですか？」
「お父さん！恥ずかしいからやめてよね。もう」
娘からのクレームに「悪りぃ悪りぃ」と頭を掻くが、その様子か

らまったく悪びれてない。
どうやら娘の方が人間として出来ているという事は、今の会話ではっきりと見て取れた。
中年の男は＞ギムレット＜といい、東の倉庫街で積み下ろしの作業を行っているらしく、先日の死体遺棄の倉庫と近い場所で勤めており、今日は警察が事情聴取や倉庫内の捜索を行っていた為仕事にならず、早引き。一人娘とこうして散歩がてら街を出歩いているのだという。
「ほら、お前の好きなパンケーキが来たぞー。切ってやろうか」
「自分でできるから！子ども扱いしないで」
その表情は穏やかで、明るく優しい。
仕事に対しては不真面目であるが、娘への愛情は真摯である事は感じ取れる。
こんな男が何故、
何故、こうも強烈な血の臭いを発しているのか。
二人の忍が自然に警戒を強める。
『そんなに警戒しなさんな。俺はもう引退した身でね。今はこの娘だけが生きがいなのさ』
それは、特殊な口の形で指向性の音声を、目的の相手だけに聞かせる術。男のすぐ隣にいるテセアラにはまったく聞こえない声で、バルゴに話しかけた。
このような術を心得ているのは、忍か、スパイか、暗殺者か。いずれにせよ裏社会の住民だけだろう。
『こう見えても、俺は元殺し屋でね。今まで話した事も全部本当。だから今日の出会いも偶然なのさ。同業の旦那』
男の、ギムレットの乾いた瞳にバルゴが映る。
「お父さん、はいあーん」
テセアラの可愛い催促に、だらしなく目じりを下げ「あーん」とパンケーキを頬張る様子に、少しだけ肩の力が抜けてしまった。
バルゴとミゾレが目を合わせ、警戒を解く。

全てを信用したワケでは無いが、全てを否定するには、いささか状況が間抜けでお粗末だ。
食事も終わり、重たい荷物を両手いっぱいに抱え帰路に着こうとする。
『何しにこの街に来たかは知らないが、達者でな』
視線はテセアラに向けてはいるが、その言葉は紛れも無くバルゴたちに向けたモノ。
『ああ。娘さんを大切に』
バルゴも同様の技法で言葉を返す。
『言われんでも俺ぁ娘ＬＯＶＥだぜ』
他人には絶対に聞かれる事のない秘密の会話。
秘密にする必要のない、あまりに下らない内容と、屈託ない男の笑顔にバルゴも釣られて笑みを浮かべた。

忍者、異国で戦う　3

西の旧市街。赤レンガ造りの古いアパートの一室。周囲を似たような建物に囲われたその部屋は忍二人が身を隠す隠れ家である。
7畳程度の部屋にシングルベットが二つも置いてある狭っ苦しい部屋で、バルゴが購入した食材を冷蔵庫に整然と並べ、ミゾレが自分の目に目薬をさしている。
万華鏡写輪眼。うちはの一族の中でも、特殊な開眼方法ゆえに、扱える者が極めて少なく、絶大な力と引きかえに使用者の視力を徐々に奪っていく諸刃の刃。
かつて木ノ葉を壊滅寸前にまで追いやった数々の事件の裏には、この瞳術が暗躍していたらしい。
ミゾレは己が瞳に宿ったその力を呪いであると認識していた。使用の度に擦れる視界は治す術などなく、奈良一族秘伝の点眼薬で、失明までの時間を先延ばしにしているような状況であった。
「瞳術使いは、目が命っと」
「感情に任せてそんな大術使うからだ」
ミゾレの身を案じたバルゴが珍しく小言を言う。
「ここに来る前に受けた検診ではまだ両目とも2．0よ。十分じゃない」
「もとは3．5だっただろ。私生活や任務で支障をきたす数値とも思えんが、使わない事に越した事はない。今後は控えろ」
「はいはい。判りましたよーだ」
言いたい事は全て吐き出したのかそれ以上何も言わず、蛇口から出したコップ一杯の水を観葉植物のうっきー君にチロチロと与えている。
「お前何読んでいるんだ？」
ミゾレの手には一冊の薄い本が握られていた。読書する事自体は珍しく無いが、そのタイトルには見覚えがある。

「じゃーん。『よだかの星』よ。たまには文学もいいものだわ。バルゴは読んだ事あるの？」
「ん……まぁな」
昔の詩人が書いた童話。その内容は、他者を食らう事でしか生きていけないこの世界に絶望した醜い姿のよだがが、最終的に夜空の星になるという子供向けの童話である。
その話なら一言一句間違う事なく復唱できる。
バルゴは窓際でポケットに手を入れ、空を眺めている。
その表情は遥か遠くの景色を眺めており、傾きかけた夕やけと憂いを帯びた表情が相まって、話かけるのを阻んでいるかのようで、時間の流れですら介入を許されないと思えるくらいに神秘的な光景だった。
何だか地雷を踏んだっぽい。ここまで物思いにふけるバルゴも珍しい。
そういえば彼との付き合いは親族を除いて、里で一番長いと自負しているミゾレだが、バルゴの私生活についてはほとんど知らないし、聞いた事もなかった。
興味が無かったといえば嘘になる。だが、星空　バルゴという人物の寡黙な性質上、必要最低限の事しか言わないか、はぐらかされるかのどちらかというのは明白で、ミゾレも自分の私生活部分においては、踏み込んでほしくない領域である以上、越えてはならない一線であると思っていた。
今から思えば、そういった繊細で絶妙な線引きがあったからこそ、自分たちはここまでやってこられたのではないだろうか。
全てを知り、理解しあうことも仲間でもあるが、知っているからこそ、互いの領分を侵さないのも仲間としての理解方法の一つであると思っていた。
だが、共に暮らす事でその境界線が崩れようとしている。
あの火影はそれを見抜き、私にそれを意識させたかったのか？
本に視線を落としながらそんな事を考えていると、下の階で大家

が怒鳴っているのが二人の耳に届いた。
どうやら家賃の不払いによる督促らしいが、それにしても五月蠅い。
何事かと様子を見に行くと、一番下の階の部屋についさっき出会ったばかりの顔があった。
車椅子の少女、テセアラが膝に手を置き、大家の怒鳴り声という嵐が通り過ぎるのを必死に耐えている。
テセアラに気付かれないように階段の上から事の成り行きを見守る事にした。
ギムレットが真っ先に飛んでこないところを見ると十中八九不在と思われる。
散々怒鳴り散らして気を良くした大家はそのまま外出してしまった。おそらくこの先にある行き着けのバーで一杯引っ掛けるつもりなのだろう。
一部始終を見届けたバルゴたちはテセアラに声を掛ける事なく、自分たちの部屋に戻っていった。
「あのギムレットとかいうオッサン。中々喰えないわね」
「そのようだな」
昼間、バルゴたちに合い席を頼んだのは偶然などではなく、上の階の人間がどんな人物なのかを調べ確認するための必然。
何が『この出会いは偶然』だ。
今娘を放置して外出しているところを見ると、自分たちは害は無いと判断されたのだろうが、正体を探られ、あまつさえ堂々と接触を試みようとした事に対しては憤りを覚える。
バルゴたちは忍だ。ましてや遠く里を離れ、西の異国では、急な救援は望めない。つまり失敗は死であり、その可能性は怪しまれた時点で格段に跳ね上がる。
下手な動きは出来ない。喉元にナイフを突きつけられているようだ。
であれば、こちらにも考えがある。事を構えるつもりはないが、

情報は多い方がいい。
「狢（むじな）」
バルゴがこの倫敦に居るもう一人の忍の名前を呼ぶ。
数秒もしないうちに開け放たれた窓から、真っ黒いコートを羽織った狸の仮面をした忍がバルゴとミゾレの前に現れ膝をついた。
「ここに」
「このアパートの最下層に住んでいるギムレットについて調べろ。念の為テセアラもだ」
「御意」
必要最低限の指示に切るような返事。
これだけで動けるという事は、狢も優秀な忍なのだろう。
バルゴが冷ややかな目で狢を視界に入れ、風が部屋を吹きカーテンを揺らしたかと思うと既に狢の姿は消えていた。

忍者、異国で戦う　4

古くて大きな振り子時計が左右に揺れている。
美しく絢爛な応接室にギムレットは居た。
この悪趣味な部屋に通されるのは何回目だろうか。
富、名声、権利、そんなモノにはまったく興味の無かった男にとって、相変わらずこの眩いばかりの金銀に囲まれた部屋は好きになれなかった。
元々が質素な性格なのだろうか、必要最低限の生活を送れればよいと思い、これまで生きてきた。
あの少女、テセアラを拾うまでは。
とある場所で死に逝く母に抱かれた、赤子だったあの娘を見た瞬間、ギムレットの全身に衝撃が走ったのを今でも覚えている。
誰かの助けが無いと消えてしまう命の灯火。あの娘を見つけた場所には野犬が多く、自分が居なくなれば数刻と待たずに餌食となってしまうのは明白。泣きつかれて寝ている顔は、泥糞に塗れた自分の目の前に天使が舞い降りたかのようだった。
既に冷たくなっていた母親の前で静かに十字を切り、赤子を抱き寄せる。
温かい。その温もりは硬く閉ざされた男の心を溶かしていくようだった。
見晴らしのよい丘にその女の亡骸を埋め、石の墓前で再度十字を切った。
安心して眠るがいい。これからは俺がこの娘の親だ。
例えそれが、『血』が繋がっていなくとも。
例えそれが、『人外の仔』であろうとも。
おそらくそれからだろう。自分が、金という俗物的なモノに興味を示したのは。
だからこうしてこんな胸糞の悪い場所にも進んで来れる。

獅子をあしらった金のドアノブが回り、この『屋敷』の主がようやく現れた。
「やぁ待たせたね。ギムレット君」
「……どうも」
現れたのは中年の男。顎に蓄えた髭と、人を射殺すような目。手には最近闇ルートで手に入れたという不気味な本を常に手放さないでいる。
男はジャックと名乗ってはいるが、それが偽名であるというのは子供でも判る。
自らを『魔法使い』と言う、男の口元には常に人を見下したかのような下卑たる嘲笑(えみ)がある。
だが、それ以上に得体の知れない男だ。それが第一印象だった。
初めて会った時、もし仮にナイフを取り出し、その切っ先で喉笛を掻っ切り致命傷を与え、止めに心臓を一突きにしたらどうだろうと考えた事がある。
いや、それは叶わない。
確かに、身体能力では明らかにこちらに分があるが、野生じみた本能が告げる。
あいつには関わるな、と。
『殺す』という行動においては、自動人形のように精密に、正確に、確実に行動を行う事ができる。それは自負でもなく、自信でもなく、ましてや自尊でもない。自分が『ギムレット』と名乗るまでに積み重ねた結果が、そう結論付けさせる。
その膨大なまでの経験値が、今眼前に立つ男の、いや、男が持つ本の異常性に警報を鳴らしている。
もう一度言う。ギムレットという人物は『殺す』という行動については、一般人に比べ遥かに耐性がある。そこには感情、倫理、道徳といったものは無く、その定義は『人間』だけに留まらない。いや、『人外』の者に対してこそ、真価を発する。
抹殺者。

西の異国で普及している『十字教』において、自らが定めた神以外の、『神に仇なす化け物』を始末する事により、人間の生活を守護し、歴史の闇おいて常に暗躍してきた者たち。
取り分け、ギムレットが所属していた『蒼き薔薇の十字会』は、その攻撃性が凄まじく人々を守護する盾であり、化け物を駆逐する剣であると内外から畏怖され、危険視されていた。
自然が持つエネルギーが集まり、意思を持ち、形を成したその力は、常軌を逸しており、近隣の村や町が一夜にして滅ぶというのも珍しくない。
地域信仰に根付いた神、悪魔、精霊、悪霊、鬼。時には人間。人に危害を加えようと無かろうと、等しく『神の裁き』の下、存在を否定し、抹消してきた。
その直感が告げている。あの歪で、奇怪で、邪悪な書物は『魔書』であり、魅入られたジャックという男は『魔人』の類であると。
「どうしたのかね？」
「あ、いえ。お気になさらず」
本を睨むギムレットの視線に気付いたジャックが不敵に笑う。
「やはり気になるかね。前職での噂は色々と聞き及んでいるよ。抹殺者君」
「はは。今はもう若くないですから」
「時に、君の娘は健在かね」
心臓が跳ね上がる音が、ギムレットの耳に届く。喉が渇き、既に冷えた紅茶を啜る。湯名な地方の高級な葉を使用しているらしいが、味を感じる余裕もない。
一言、やっとの事で「おかげさまで」という社交辞令を絞り出す。ギムレットの心情を察してか「結構」と短く言葉を切る。
「今日君を呼んだのは他でもない。君が先ほどから見入っているこの『魔導書』についてなのだが」
「旦那。面倒ごとに巻き込まれるのは御免ですぜ」
笑いながら哂えない冗談に拒絶の意を示す。

「まぁそう言うな。私には君しか頼れる者が居なくてね。先日、この書に微かではあるが、反応があってね。君がアルバイトをしている倉庫で発見された男に反応して、光を発したのだよ」
「あのーすいません。今はそっちが、本業なんですがね」
「これは失礼。で、漠然として申し訳ないが、何か心当たりが無いかと思い、お呼び立てしてしまったのだが、いかがだろうか」
直接関係があるのかは判らないが、思い当たる節はある。
あの雨の日。倉庫内のチェックで珍しく残業した帰り。何かを爆砕したかのような轟音と共に現れた二人の男女。
その顔は間違いなく自分が住むアパートの最上階に住む夫婦と思われるカップルだ。
見たことも無い装束は、素早く動く事に特化した武装である事が見て取れた。
しかし、金髪の青年が使った術は初めて見る術で、魔法でも無く、北欧のルーン文字を使用した魔術の類でもない。
倉庫で見つかった男がどんな状態で、どのような状況下で、『魔導書』が光ったかなど知るよしはないし興味も無いが、彼らが引き金となっているのは、まず間違いない。
「残念ですが、判りません。もう組織を抜けて十四、五年ですからね。ピンと来るもの無いし、最近は腰も痛いし」
「そうか。何かしら参考になるやもしれんと思ったが、仕方がないな。今日のところは以上だ。どうもありがとう」
「いえ、こちらこそすいませんねぇ」
冷めた紅茶を一気に飲み干し、勢いよく立ち上がる。
「それじゃ、俺ぁこれで」
「ああ。今後も君には期待しているよ」
「かんべんしてくださいよ」
冗談でもない、正直な気持ちを本音として表す。
ジャックの表情は相変わらずの嘲笑がある。
気のせいだろうか。その瞳がまるで爬虫類のように縦に走り、蛇

の瞳を連想させる。
自分が何か隠しているという事を気取られている。
絡み取られるような視線に背を向け、重々しい扉を開ける。
「次回はあの娘、テセアラと言ったかな。一緒に来るといい。美味しい茶菓子を用意しよう」
娘の名前を教えた記憶は、無い。
ゴクリと唾が喉を通る。
「ギムレット君。これからも私の良い友人でいてくれたまえ」
ジャックに一瞥をくれる事なく、バタンと扉を閉める。
血のように赤い高級なカーペットを、急ぎ足で歩きながら逃げるように屋敷を後にする。
どこまでも底が見えない、魔に魅入られた男の存在に、純粋に恐怖した。

忍者、異国で戦う　5

空は曇り、昼間の快晴が嘘のようだった。この地で星なんてモノは数えるくらいしか見たことがない。

産業革命真っ只中の倫敦の空気は最悪だったらしく、星を見た事の無い子供もいたらしいが、成る程毎日こんなぼやけた空を眺め、それが日常となってしまえば、晴れ渡った夜空に燦然と輝く星々を見上げ喚き散らすのも、まぁ理解はできる。

とても静かな闇夜。石畳を叩く靴の音すらも吸い込まれそうな静寂。

あの娘を拾ったのは、こんな夜だった。

まだギムレットと名乗る前、別の名前の抹殺者だった頃。

倫敦の街は一年を通して雨や曇天の空模様が多く、温暖ではあるが、遠くから見下ろせば街全体に霞が掛かっているかのような、幻想的な街並は薄ら寒さを覚える。

幻想の世界に生きる者にとって、そこは紛れも無く現実の世界で、現実の理に生きる者は虚構の世界に夢を馳せる。

一体本物の現実と何なのだろうか。

あの日、抹殺者は一人の女を殺した。

人間の女ではない。化け物だ。

男が所属する組織の命を受け、初めて倫敦という街にやってきた時、人外の化け物たちによる怪奇事件が後を絶たない混沌とした状況だったのを、好んで思い出そうとするものは、そう多くはないだろう。

女は化け物だった。

人の生き血を啜る化け物だった。

有り体に言えば吸血鬼。古い魔女の家系の女らしいが、どのように吸血鬼となったかなどの経緯は興味も無かったし、それを知る必要も無かった。

不死である吸血鬼を殺す事は難しいが出来ない事ではない。
肉体と魂の結びつきの弱い吸血鬼には、『鎮魂の神文』を刻んだ銀の銃弾が効力を発揮する。
吸血鬼が多発するという西の旧市街。戦闘装束で武装した抹殺者の前に、美しい女が現れた。
霧を纏ったその女の瞳はルビーのように紅く、一目で人間でない事は理解できた。
吸血鬼は言う。血が欲しい、と。
抹殺者は問う。それは何故か、と。
吸血鬼は答える。我が仔の為、と。
そういう吸血鬼は赤ん坊を大事そうに抱えていった。
無機質で、無表情で、無感情の瞳で吸血鬼を見据える。事情など関係ない。お前らは存在自体が悪なのだ。だから、ここで死ね。
肩に下げたライフルを構え標準を女に合わせる。
モーゼルＫａｒ９８ｋ。独逸（ドイツ）が誇る傑作騎兵銃。全長は１１００ｍｍと短く、重量は４１００ｇと扱いやすく、持ちやすい縦長の造りは、その後のライフルにおける見本となり手本となり、派生したライフルも総じて優秀な性能を兼ね備えている。
抹殺者が持つライフルは、７．９２ｍｍ×５７口径に、手動のボルトアクション形式を採用した動作不良の少ない安定性と、胡桃製の硬質で、吸い付くようなストック部分。銃身であるバレルには彫刻師（グレーバー）による鎮魂歌が刻まれている。
『Ｒｅｑｕｉｅｍ ?ｔｅｒｎａｍ ｄｏｎａ ｅｉｓ， Ｄｏｍｉｎｅ， ｅｔ ｌｕｘ ｐｅｒｐｅｔｕａ ｌｕｃｅａｔ ｅｉｓ．』
『主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしください』
果たして、その魂の安らぎは、銃を構える自身へ向けた戒めか、銃を向けられた相手への手向けの歌か。
装弾する五つの弾は全て洗礼された聖銀製で加工され、対魔性が高い。

仕事は、思いの他てこずった。
抱えていた赤ん坊を質量を持った霧に覆わせ、身軽になった吸血鬼は、残像を残しながら一足で抹殺者の目の前まで迫る。
舌打ちし、後ろに後退しながら、一発目の銃弾が吼え声を上げるが、直線的な軌道は簡単に見切られ避けられてしまう。
鋭く伸びた爪を、左足を軸に回転しながら紙一重で躱し、手早くボルトハンドルを引き、次弾を装填する。
吸血鬼の心臓を正面に捕え、トリガーを絞るように引くが、二発目の銃弾は、直前に銃身を弾かれ、あらぬ方向へ飛んで行ってしまった。
吸血鬼の異様な強さに驚嘆しながら、ストックの銃底で吸血鬼を殴り、一旦間合いを空かす。直前に　抹殺者の攻撃を避けようとするも、神の洗礼を受けた聖銃の前に逃げる事も敵わず、鈍い音と共に弾き飛ばされる。
顔面を庇った右腕は、銃身と同じように刻まれた鎮魂歌の神文により、痺れ、鉛のように重くなり、使い物にならなくなってしまった。
刻まれた神文は『Ｋｙｒｉｅ　ｅｌｅｉｓｏｎ．』『主よ、あわれみたまえ』
あわれみとは慈悲。求めるは、彼の罪を許し、彼を救う神の御言葉。
生き返る罪をあわれむ詩は、一度死んだ吸血鬼にとってじわじわと全身に広がり、やがて身体の自由を奪う毒。
それを察した吸血鬼は驚いた事に自らの腕を切り捨て、苦悶の表表情で呪文を呟く。
『Ｉｌ　ｍｉｏ　ｓａｎｇｕｅ　？　ａｃｃｉａｉｏ』『我が血潮は鋼鉄に』
本来大掛かりな儀式や長い呪文、強い集中を必要とする魔術の発動が、数節の韻を踏む事により組み上げられたという事は、生前に何かしらの自然エネルギーの結晶と『力と代償の契約』を行い、そ

の成れの果てであるという事を物語っていた。
女の死亡原因は、その儀式によるものか？
頭をよぎった推測と疑問は、その答えを出す間も与えられず、吸血鬼から流れ出る夥しい量の血が宙を舞い、鉄の質量を以って抹殺者に飛礫（つぶて）のように襲い掛かる。
空気の抵抗を受け、棒状に伸びる姿はまさしく回避不可の槍の雨であり、致命傷を寸前で避けるが、腕や足は容赦なく穿たれ、所々風穴が空いてしまった。
石畳に突き刺さった血槍は、一向に血液に戻ろうとしないでいる。
周りこまれ、後方から吸血鬼の牙が抹殺者を襲う。が、三発目の銀弾を放ち、ぎりぎりで避ける。
吸血鬼の頬から一筋の血が流れる。百余りの血槍はいい加減弾切れのようで、失った右腕を庇い、赤ん坊の所へ後退していく。
おそらく、この場を去るつもりなのだろう。
然らば。
俺も遊びを終わらそう。
吸血鬼に向けていた標準を、ゆっくりと子供へと合わせる。
然らば、赤ん坊を餌に、親を殺す。その後で、子供も殺す。
赤ん坊が泣いている。
抹殺者の意図を察した吸血鬼が子供を庇うように覆い被さる。
赤ん坊の泣き声がやたらと耳につく。
やめろ。
この時、初めて抹殺者の表情に、焦りが伺え、心中に迷いが生じた。
貴様らは化け物だ。人を操り、騙し、喰らい、己が欲望を満たす為に、狡猾で、残忍で、人間という種族を見下し、蔑み、弄ぶ『悪』だ。
だが、今目の前に居る吸血鬼はどうだろう。我が仔を護る為に必死になっている『母親』そのものではないか。
やめてくれ。

貴様らに慈愛や、慈しみや、他者を思いやる気持ちなど存在してはならない。
でなければ。
でなければ、俺が今まで殺し、存在を否定し、抹消してきた他の化け者も、何かを護る為に戦っていたという事になるではないか。
ならば悪とは何だ。悪とは誰だ。悪とは『それ』を奪う者の事か？
ならば、悪とは、悪とは俺の事か。
獣のような男の絶叫が、無慈悲な聖銃の咆哮が、霧に覆われた倫敦の夜空にこだました。

目の前に、横たわる吸血鬼の死体。
取り乱し、混乱し、錯乱した自分。
ああ、自分は、取り返しのつかない事をしてしまった。
心臓を聖なる銀弾で貫かれ、絶命しながらも、残された左腕は優しく赤ん坊を抱いている。
開いた瞳は光を失い、それでも愛しい我が仔を映している。
最後に残った銃弾で自分の頭を打ち抜こうかと思った。
だが、死ぬなら吸血鬼が命を懸けて護った赤ん坊を一目見てからにしようと思った。
精神的に打ちひしがれ、磨り減った手足を動かし、血だらけの身体を引きずるように赤ん坊の下へ歩み寄る。
泣きつかれ、眠ってしまったその仔は、とても、可愛かった。
自分の視界が霞み歪んでいる事に気付いた時には、頬には涙が止まるのを忘れたかのように流れていた。
抹殺者から、ただの男へと成り果てた瞬間。
男の嗚咽が、静かな夜の帳へと吸い込まれていった。
贖罪のつもりではない。救われたかったのかもしれない。自らが悪であると気付いた、この愚かな魂を、浄化して欲しかったのかもしれない。
湿った風が、『ギムレット』の頬を撫でる。

今となってはどうでもいい。
赤いレンガの古びたアパートを見上げる。
三階の窓には、優しい明かりが灯っている。
すぐに帰ると言ったのに、思いのほか時間が掛かり、ずいぶん彼女を待たせてしまった。
仮に、今までの出来事が夢幻でも、自分を迎えてくれるあの笑顔は、紛れも無く本物の現実。
足早に愛娘の下へ帰るギムレットの姿を、カラスが一羽、ただただ無言で見つめていた。

忍者、異国で戦う　6

「以上が、ギムレット、テセアラ両名を調べた結果にございます」
あれから一日と経たずに割り出された隣人の歴史。
最低でも三日はかかるだろうと見込んでいたが、それにしても早すぎではないだろうか。まるで、予め周到に調べていたかのような。
おそらく、この狢へは自分たちとは別の任務が言い渡されているのかもしれない。
テーブルも満足に置けない狭い部屋に大人が三人。
7畳程度の一室は二つのシングルベッドによりほぼ半分を占拠されており、そろそろ慣れてきたとはいえ、狭いものは狭い。
「でも、ある程度は予測していたとはいえ、こっちの国にも忍みたいな奴等がいたのね」
「規模が小さいとはいえ、かつての尾獣のような化け物を相手している連中だ。『蒼き薔薇の十字会』と言ったか。戦闘技術の錬度は相当高いと言ってもいいだろうな」
尾獣。その定義は尾を持つ魔獣。正体は膨大なチャクラの集合体であり、発生については諸説あり、未だに特定されていない。
一世紀ほど前も九体の尾獣をめぐり忍による戦争が起こり、軍事力、他国への牽制、抑止力などの理由から、血で血を洗う争いの火種となった忌むべき存在。
制御する術などなく、人体に封印し管理する方法でしか律せない。
尾獣を埋め込まれた人間は『人柱力』と呼ばれ、強大すぎる力はいつ爆発するとも知れない爆弾が、隣人として存在する感覚で、疎外され、倦厭（けんえん）され、忌み嫌われ、迫害の対象となるケースも少なくない。
かつて何世代か前の火影も『九尾』の人柱力であり、幼少時は友人も無く孤独に暮らしていたという。
「ところで、その話が本当だとすると、テセアラって娘も吸血鬼っ

ていう事になるんじゃないかしら」
「おそらくは吸血鬼となる前に生まれた子供かと」
「あの娘の本当の父親については調べはついたか？」
「はい。母親の幼馴染だった男で、少女が生まれる前に流行り病で病死しておりました」
「なら関係ないか。あの足は生まれつきなの？」
ミゾレの問いにバルゴも同意する。テセアラという少女の足は不自由のようで、出会った時も車椅子で行動していた。
「いえ、四歳の時に車に撥ねられる事故に巻き込まれており、下半身不随の障害を負ったそうです」
この国に来てから、車や馬などの移動手段が多い事に驚かされた記憶がある。
基本的に忍は自らの足で行動した方が機動的で、かつ迅速であり、馬車や二輪や四輪の自動車の発展はその必要性もなく皆無。知識で知ってはいたものの、その数にはこの地に到着した当初は戸惑ったのを覚えている。
しかし、ここで一つの疑問が出てくる。
「狢。それだけ大掛かりな手術の『費用』は、一体何処から出た？」
「詳しい金の流れは判りませんでしたが、地元の援助金と、倫敦大学連合のサポートがあったようです」
「倫敦大学連合」
バルゴが口の中で反芻しながらミゾレと目を合わす。
それは『大蛇丸の書』が有ると目されている場所。
しかし、依然として明確な情報が掴めず、またその目的もまるで見えない為、現在周囲の情報をまとめ固めている。
情報は磐石。動くなら必中。殺すなら必殺。
忍の心得の基本である。
「ところで、『蒼き薔薇の十字会』とやらが俺たちの敵となる可能性は？」
「関連性がありません。ギムレットという男も組織を抜けたのでは

なく、この土地を管理するという事と名目で戦線を離脱しているようで、ここ数年連絡も行っている形跡もありません。可能性として考えられますが、おそらく皆無かと」
　狢が一呼吸、間を空ける。
「つまり、殺しても差し支えないかと」
　任務遂行における障害となるもの、可能性のあるものは除外する。当然の理由。当然の選択。
「それと、倫敦大学連合には裏の顔がある事が判明しました」
「裏の顔？」
　二人の忍が同時に声を発する。
「はい。この国における忍術のようなもの、『魔法』を研究する組織、『十二の徒』なる集団が存在するようです」
「十二の徒？」
　またも同時に声を発する。何だかんだで息の合う二人に、狢が仮面の奥でクスリと笑う。
　とあれば、『大蛇丸の書』を所有しているのは十中八九、その組織だろう。
　しばしの逡巡の後、バルゴが班長としての決断を下す。
「ギムレットたちの件は俺たちが預かる。お前は引き続き『十二の徒』について調べろ。おそらくはそいつらが『書』を所有しているハズだ」
「御意」
　先日と同じように短く返事をし、ビデオを観ているかのようにまったく同じ動作でこの場を去る一つの影。
　狢の気配が完全に消えてから、バルゴがため息をつきながらミゾレのベッドに置かれた『よだかの星』を拾い上げる。
　星になる直前のよだかのイラストが表紙にある。その表情は、嬉しそうでもあり、悲しそうでもある。
「どうしたの？それ読む？」
　不思議そうな表情でミゾレが訊ねてくる。

「ギムレットという男、よだかに似ていると思ってな」
ミゾレの頭上に『？』が浮かんでいる。
「日も沈んだ。少し出てくる」
「一人で？何処へ行くの？」
「近くのバーでギムレットと酒でも飲もうかと思ってね」
「あたしは？」
「お前と飲むと潰されかねん」
里一番のウワバミとして名高いミゾレが頬を膨らまして「ずるい」とむくれている。
子供っぽい表情に苦笑しながら狭い部屋を後にした。

忍者、異国で戦う　7

忍は裏の裏を読むべし。
相手の隙をつき、不意をつき、意表をついてこそ忍。
先日、人通りの多い道で接触するという奇抜な行動を取ったギムレットも、まさか今度は自分も同じような目にあうとは、予想していたかもしれないが、それを選ぶ可能性は限りなく低いと思っていたに違いない。
事実、呼び出した時の表情は人懐こそうな笑顔を凍りつかせ、自分の正体を知った上で酒に誘うという常軌を逸したバルゴの行動に、躊躇と戸惑いと、警戒の意を示した。
ともあれ、それは数十分前の話。
「いやぁ、まさか旦那がご近所さんだったとは！これもあれですかね、運命とかいうヤツなんですかね？」
ギムレットの白々しい嘘に耳を傾けながら安いワインを舐めるように飲む。
この土地にきてから初めて飲んだのだが、どうも喉に引っ掛かる感じが好きになれない。もっとも、ミゾレはおいしそうに毎日ボトル一本を空けるペースで飲んでいる。その飲みっぷりは豪快の一言に尽き、里内外においても酒豪、ウワバミ、ザル等、名（迷）声を馳せている。
ここは西の旧市街において数あるバーの一軒。バルゴたちの住むアパートの大家も常連である小さな店。
そこそこ繁盛しているのか、薄暗い店内の入り口付近の二席しかないテーブル席は満員。六席程度のカウンターの真上には逆さに吊るされたワイングラスが整然と並べられ、淡い照明とあいまって美しい光のシャンデリアとなっている。
「しかし、まさか『あんな物』で呼び出されるとは思いませんでしたよ」

バルゴの右手でクルクルとペン回しされている細長い物。犬笛である。人間には聞き取り可能な周波数が存在し、人の耳は２０００ヘルツの音域を聞き取れる。しかし、犬や猫の場合、聞き取り可能な周波数は更に広がり、犬笛は２２０００ヘルツまでの音を発する事ができ、普通人間の耳にはどんなに強く吹いても聞き分けられない。

しかし、忍や暗殺者は暗号や、合図として用いる必要がある為、特殊な訓練によりそれを克服している。

アパートの外から犬笛を吹き、ほどなくギムレットが窓から顔を出した時、やはりこの国は侮れないと改めて認識した。

人間の持つ肉体的な限界の上限を熟知し、限りなく高め、暗殺、諜報を行わせるという思考。おそらく忍も抹殺者も存在意義も目的も大差無いはずである。

「はは、まぁ、俺たちの出会いと、今日という良き日にぃ、乾杯！」

「これで何回目だ？」

すでに酔っているのか十回以上の『乾杯』をしている。バルゴも律儀にグラスをチンと鳴らし、チビチビと飲む。

「ところで、あの美人の奥さんはどうしたんですかい？男同士の飲みもいいですが、やっぱ、華がなくっちゃぁ」

「あいつは留守番」

「旦那ぁ、そいつは殺生ってヤツですわ。美しいモノは文化だ！共有財産だ！この倫敦にも綺麗な観光名所が沢山あったでしょ。だから旦那には、あの奥さんをここに呼ぶ義務がある！」

身振り手振りで大げさに表現する酔っ払い。

火影の陰謀により、本人の知らぬところで書類上、結婚している事になっている事実を知らないバルゴだが、任務とはいえ同棲している事実は否定できず、かといって反論する理由も見当たらず、かつ、周囲にそう思わせ、怪しまれないようにするのが目的である以上、相棒の呼ばれ方は関与しない事にしている。

『さて、と。旦那、俺の事は一体どこまで調べたんですかい？』

先日の昼間と同じように、特殊な口形による指向性の声を隣のバルゴに聞かせる。
目の前で丁寧にグラスを拭いているバーのマスターには全く届かない声。
酔っていながらも、紅葉のような赤い顔とは対照的に、その瞳はまっすぐバルゴを捕らえていた。
『一通り。あんたが侮れない人物であるというくらいには調査した』
漠然敵に抽象的に、自分が知っている事を、まるで伏せたトランプのようにはぐらかす。
口を吊り上げ「へぇ」と呟くギムレットの視線は鋭い。
『それじゃぁ、この前から俺の事を見張っているカラスは、旦那の使い魔ってワケですかい？』
『ほう。それは興味深いな』
バルゴがグラスに視線を据えたままニヤリと口を吊り上げる。
疑心暗鬼。自分の周りの何か異変を感じているのであれば、含みを持って接触してきた人物を疑うのは道理。問いの答えの焦点をずらす事で、こちらのカードを伏せたまま相手のカードを先に切らせる、巧妙な心理の罠。
忍と抹殺者。初めの心理戦はバルゴが先制する形となった。
しまった、と言わんばかりの態度が見て取れる。
『おっと口が過ぎたか。まぁいいや。ならついでに俺を呼び出した、本来の目的を達するとしましょうか』
ギムレットを呼び出した目的。
すなわち、『自分もお前の事を調べた。お互い敵対する意思が無いという状況においてはイーブンという状況だ。なら情報交換ということじゃないか』という無言の交渉。
そしてギムレットはそれに応じた。
『あの使い魔が旦那ので無いとすると、あれは魔法使いの仕業だな』
『誰だ、それは？』
『さぁ。俺も詳しい事は判らないですが、そういえば最近、妙な本

を手に入れたみたいですわ』
バルゴの眉が僅かぴくりと反応する。
それを捕らえたギムレットは不敵に笑みを浮かべる。
『あは。旦那の目的はズバリそれ。当たりですか』
『正解』
誤魔化す事などせずはっきりと答える。
『そうすると、あの本はもともと旦那たちの国のモンで、それを追って来た、と』
『正解』
注文したブルーチーズがギムレットの前に来た。バルゴはカシューナッツをついばみながら、自分の推理が当たりいい気分になっているギムレットの様子を冷静に伺う。
人間とは物事に対して推理したがる生き物。辺と辺を頭の中で繋ぎ合わせる事で、安心と快感を得る習性を持つ。アルコールが入った時などなおさらだ。
考えるだけの情報を与える事で後は勝手に推理をし始める。そして一見相手が交渉のペースを握っていると思わせ、裏ではこちらが大筋を握り、手繰(たぐ)り、操る。
『で、その魔法使いとはどういう関係なんだ？』
食べようとしていたチーズを口の前でピタリと止める。
言うべきかどうか迷っているような表情が見て取れる。
『あー、あの娘が、テセアラが事故に遭った時の、出資者でさぁ』
『出資者？』
『あの娘が負った脊髄損傷の手術代を、金の無い俺に、ある条件と引きかえに大金を出してくれた、取り合えずは、まぁあの娘の命の恩人……という事になるんですかね』
『ある条件？』
意味深なギムレットの発言に思わず聞き返す。
遠い目で宙を見ていたギムレットが口に含んだチーズをワインで流し込む。

ごくりと喉を通過する音がここまで聞こえた。
『化け物の猟犬となる事』
『猟犬？』
『前歴を買われてしまいましてね。魔術を使用するには、自然エネルギーの結晶である化け物の身体の一部やらを用いるのが、一番効率が良いんらしいですわ』
初めて出会った時、ギムレットから放たれていた強烈な血臭は、その為かと納得する。
『そいつはどこに居る？』
いよいよ話が核心へと近づいてきた事を悟ったバルゴは、頭の中で並べた質問事項の中で一番的確な言葉を口にする。
二人の間に沈黙が訪れる。
抹殺者から犬と成り果てた男はやつれた瞳で、主人の敵となる青年の海のように青く、晴れ渡った空のように曇りない眼（まなこ）を見つめる。
そこには、遥か東の大陸。辺りを木々で囲まれた美しい町のような風景が映っている気がした。
ああ、これがこの青年を育てた景色か。自分もそんな青空を観ていられたら、もっと別の道が在ったのかもしれない。
辿った道は同じでも、見渡したモノの違いを経た人間が二人。
ギムレットの胸中に去来するのは後悔か、羨望か。
諦めたように、自分を蔑むように静かに笑い、口を大きく開き、『舌』を出した。
「これが何か判りますか、旦那？」
ギムレットの舌には丸い円に幾何学模様の魔方陣が刺青のように描かれていた。
何の文様かは判らない。しかし、意図は汲み取ることはできる。
「これはね、悪魔の紋章、マルコシアスの魔方陣の応用らしくてね。呪いってヤツでさ」
木ノ葉の里にも似たような意図の呪印はある。日向の分家に与えられるカギ十字型の文様が例に挙げられる。

「マルコシアスって悪魔は、三十の軍団を統治する侯爵と言われて、悪魔の中では珍しく嘘を嫌い、誠実を旨とする実直な悪魔らしいんですわ。んで、この印はその亜種で、主人の居場所を喋った場合……」

ギムレットが自らの舌を歯と歯で挟む。話した場合は、呪いにより、自らの舌を噛み切る事となる、という事だ。

それは即ち、敵対者に捕まった時の為の保険。

どこの世界でも考える事は同じのようだ。

「というワケなんで、この話はこれで仕舞にしましょうや」

確かにこれ以上の言及は出来ない。

だが、得るモノは大きかった。今日のところはこれで引き下がろうとすると、店の入り口付近のテーブルで飲んだくれている親父たちから歓声が上がった。

色めき立つ声に何事かと思い、視線を向けると、一人の女がそこに立っていた。

木ノ葉の酒豪。ウワバミ、酒女神。酒に関するあらゆる称号を持つ女怪、うちは　ミゾレが不敵な笑みを浮かべていた。

「むふん。真打登場。で、バルゴ、今失礼な事考えたでしょ」

なぜ俺の心の声が判る？

写輪眼で僅かな表情の変化を読み取られたのだろうか。

このザル女と飲めば確実に潰される。次の日は二日酔い決定。

そんな事は露とも知らず隣ではギムレットが、その美貌に騙され五月蠅い親父たちと一緒に騒ぎ立てている。

「マスター、白ワインを一本！さぁてバルゴ、夜はこれからよ！」

差し出されたワインをボトルのまま乾杯をし、恐るべき酒宴が幕を開けた。

忍者、異国で戦う　8

「ねぇ。思うんだけど、これって普通逆じゃない？」
酔い潰されたバルゴを背負ったミゾレが、背中で苦しそうに情けない姿を晒している相棒に問いかける。
オレンジ色の街灯が、何でもない石畳の街並みに幻想的な景色を見せる。
気温が低いのか、吐く息が白くなり霧散していく。
まるで夢の国に迷いこんだかのような錯覚。
しかし、背中にのしかかる現実は、そんな一時（ひととき）すら許してくれない。
「……気持ち悪い。揺らすな」
聞いているこっちが切なくなるような、か細い声で訴える。
例えば、介抱しているのが自分でなければ、普段冷静沈着なバルゴ班長の弱点とも言うべき一面を可愛らしく思えたのかもしれないが、いつ暴発するともしれない爆弾を背中に背負っている状態では、デコボコした石の悪路をいかに慎重かつ迅速に歩みを進めるかに細心の注意を払わねばならない為、そんな事を気にする余裕もない。
「今日の飲み代は経費で落ちんからな」
潰れながらもしっかりとその辺の頭は回るようだ。
「……何ならこの場でジャンプしようかしら？」
「だったら俺はお前の背中で吐く」
最悪の事態である。それだけは回避せねばならない。
酔い醒ましもかねて、フラフラと無軌道に夜の倫敦を散歩をする。
いつの間にか、湖のように広いテムズ川まで来てしまっていた。
眼前には巨大な跳ね橋が、周囲のオレンジ色のライトと違い、白いライトが下から光を発し、まるで浮かび上がっているかのような錯覚と存在感を出している。
ゴシック様式の二つの塔は４０ｍほどの高さで、周囲の建物と調

和が取れており、その美しい風景は心身を休めるのに最適な場所だった。
「横にならないでいいの？」
「横になって目を瞑ると、吐く」
「重症ね」
酒で『酔い潰れた事の無い』みぞれには理解の出来ない苦しみだが、目を閉じると遠心分離機に掛けられたかのように視界が回り出すというのは、人づてに聞いた事がある。
俄かには信じられないが、今のバルゴを見ている限り、やはりそうなのだろう。
「ギムレットはどうした？」
「一人でフラフラ帰ったわ」
「一人で……。あいつもタフだな……」
バルゴが苦しそうに「はぁ」とため息つく。
普段見慣れない為か、それとも自分も酒で酔っているのだろうか。その横顔が何だか、色っぽいと思った。
「……何だ？」
バルゴの問い掛けで、じっとバルゴの顔を見ていた事に気が付いた。
慌てて視線を外し、星ひとつ見えない空に視線を置く。
何故だろう。今この時になって『書類上の夫婦』である事を強く意識してしまう。
まさか、バルゴに惹かれている？
いや、それは……無い。
自分の男の好みは、容姿端麗。眉目秀麗。頭脳明晰にして飛耳長目。更に将来有望。意気自如の精神を持ち、どんな事にも粉骨砕身で、それでいて温厚質実な人。
故に違う。それは無い。
こんなウスラトンカチであってはたまらない。
よく友達に、『高望みしすぎ』とか『そんな男は居ない』とか、

最近では『妥協を知れ』と酷い事も言われた。
確かにそうだ。そんな心技体が完璧に備わった完全無欠な男は存在しないだろう。
そんな事は判っている。
別にうちはの一族再興など考えているワケではないが、自分の夢は『火影になる事』である以上は、やはりそれに釣り合いの取れる男でなければ、むしろ男の方が可哀相というもの。
今まで付き合った男は、何かが欠けている。そんな気がしてならなかった。
真剣な恋であったと思う。付き合うまでは。
だからすぐに別れ話を持ちかけるか、逆に振られる事になる。
だが、隣で辛そうにしている男はどうだろう。
顔は、うん。悪くは無い。太陽のような金髪に、光を発しているかのような青い瞳。里内でも隠れファンがいるらしいし、頭脳は自分と同じかそれ以上。忍術は、自分の方に部があるとしても、それを補えるほどの体術がある。どんな作業も黙々と迅速にこなし、必ず最良の結果を出す。将来は、まぁ有能ツワモノ揃いの星空一族の次期党首らしいから、それなりに有望なのだろう。
あれ……？そう考えると、条件は全てクリアしていないだろうか。
もう一度、隣の男に目をやる。相変わらずがっくり肩をうな垂れているが、その瞳はここではないどこかを見つめている。
上目遣いで見つめている視線の先には、空。
この霧の街においても見えない星々が彼の目には映っているのだろう。
星空　バルゴ。
理由は判らないが不思議な名前だと、想った。
「今度は何だ？」
無意識にフルネームを言っていたようで、バルゴが怪訝な顔でミゾレを見返す。
「あ、あー、いや、あの、その」

悪い事をしているわけでもないのに、なぜか動揺している。
さっきから心臓の鼓動がやたらと耳をつく。
「あの……さ、そういえばバルゴ、ギムレットの事を『よだかに似ている』って言ってたでしょ？あれ、何で？」
自分が何に動揺しているかは、たぶんバレてない、と思う。
警戒にも似た表情で暫くミゾレの顔をしかめっ面で見た後、視線を再び曇った空に戻す。
「あの話においてよだかは、捕食し捕食される中途半端な位置に居る。『甲虫（かぶとむし）やたくさんの羽虫が毎晩僕に殺される』って、くだりだな。それに気付き悔いたよだかは虫の捕食を止め、意地悪な鷹に殺される前に『遠く遠くの空の向こう』へ旅立つ決意をする」
それまで何の疑問を持たずに、人外の化け物を殺してきた抹殺者が、過ちに気付き、後悔し、血の繋がらない娘の為に、それまでの生きる術（すべ）を何の躊躇もなく捨て去った。
よだかと違いがあるのは、『捨てる』理由が、逃避か守る為かのみであった事。
そう考えると確かに共通する部分は多い。
残念なのは、よだかはめでたく星となるが、ギムレットは娘の為に悪魔と契約してしまったという事。
「ふーん。詳しいのね」
「まぁ……な」
どうやら上手く誤魔化せたらしい。
「でも、何でそんなに詳しいのよ」
自然と口を付いた疑問。それ以上は立ち入ってはならないと、女の勘が言っているが、すでに発せられた言葉は遅く、取り消しが聞かない。
「昔な、こういう文学の本を好きだったヤツが居たんだよ」
それ以上は聞いてはならない。聞けば、今まで必死に引いてきた境界線に綻びが生まれる。そしてそれは、きっと、二人の関係を時間の経過と共に崩壊させてしまうだろう。

判ってはいるのに、気持ちが先走る。
「それは……」
それ以上は、聞いてはいけない。
「それは……、どんなヒト？」
先走り、空回りする自分の気持ちを抑えられないでいた。
川が流れる音が聞こえる。
風が耳を劈(つんざ)く声が聞こえる。
心臓の鼓動が、聞こえる。
全神経が耳に集中し、バルゴの解答を、静かに、待つ。
「昔な」
ミゾレの視線がバルゴの口の動きに釘付けになる。
「俺の妻になるハズだった女だよ」
「それって……」
その話なら知っている。『枯れ葉事件』　木ノ葉の里という大きな大樹に、古臭い思想でしがみ付き、新たな芽の誕生を妨害したという事件。
ミゾレが知る、自分のプライベートを話さないバルゴの過去の、数少ないうちの一つ。
あれから十年以上が経過しているにも関わらず、その心の傷は今も、バルゴを悩ませ苦しめているというのだろうか。
「あんたは……」
「ん？」
「日向　ヒヨリの後を追おう、とかって思わなかったの？」
いつの間にか、バルゴの顔を覗き込む姿勢になっていた。
やはり、自分の酔っているのだろうか。普段なら聞く事など無い、余計な事まで聞いてしまう。
「あいつは俺の為に死んだ。それを否定する事は……できないよ」
いつになく悲しそうな表情を初めて見た気がした。
ああ、今解(わか)った。
バルゴの心の中には未だ日向　ヒヨリが存在している。いつも見

上げている夜空には、よだかのように星になったヒヨリの姿を探しているのかもしれない。
バルゴという男は肉体的にも精神的にも強い。実力は火影に次ぐと言われている。しかし、鎧のような心の中心は、硝子のように繊細で、指で突付けば容易く崩れるほどに脆い。
バカな男だ。ヒヨリが願ったのは、そういう事ではないだろう。
死んだ自分にいつまでも捕らわれてはいけない。
バルゴの隣に見えた、顔の知らない少女の幻影がバルゴに告げ、ミゾレを見て微笑んだ気がした。
ミゾレの右手がバルゴの頬を撫でる。
自分でも意識していなかった、無意識下の行動に、バルゴ以上に自分が驚く。
しかし、バルゴに見つめられている事に嬉しい自分の気持ちが在るというのも事実。
自らが引いた境界線が、取り払われる。

忍者、異国で戦う　9

あの若夫婦と別れてしばらく。
ギムレットは自分の住む赤レンガ造りのアパートの屋上から、ぼんやりとした街の様子を眺めていた。
腹も丁度良い具合に膨れ、手に持った小さなビンに入ったビールをがぶ飲みする。
出来上がったビールをまた再発酵させ、ハチミツとモモを加えた甘いビールは、ギムレットの喉に何の違和感も無く通り、胃へと到着する。
ワインもいいが、自分の身体にはやはりこちらの方が合う気がする。
自分の生まれた故郷など知らないが、白耳義（ベルギー）産のビールはギムレットのお気に入りだった。
友となったバルゴも、これならいけると美味そうに飲んでいたのを思い出し、頬が緩む。
あの青年はおそらくそう長くはここに留まるまい。
なら居る間くらいは知らぬ異国で、困った事があれば助けてやろう。
ビールをラッパ飲みし、胃に溜まったガスが口からゲップとして出てくる。
「今日はやたらと視線を感じる一日だったなぁ。いい加減出てきたらどうだい？」
残り僅かとなったビールを一気に流し込み、空きビンを振り返りざまに『気配がする方向』へ投げつける。
コロコロと石床を転がっていき、コツンと何かにぶつかる。
闇と影に同化しているような漆黒を羽織った人間の姿らしき人影が、ぼやけた光に当てられゆっくりと輪郭を現す。
「どうも、初めまして」

真っ黒なローブをかぶり動物のような面をした、男とも女ともつかない人物が、男とも女ともつかない声で挨拶をする。
慇懃無礼という言葉が当てはまる態度は、おそらく出会う人間全てが良い印象を持たないだろう。
「お前か。俺の周りをちょろちょろ嗅ぎまわっていたネズミは」
「今日は、あなたにお願いがあって参りました」
会話の成立しない一方的な物言いに、ますます印象が悪くなる。
「こちらの要求を呑んでいただけるのなら、相応の見返りを致しましょう」
自らの正体も明かさずに交渉を行おうとする。先ほどまで飲んでいたバルゴとは雲泥の差。交渉とは何たるかをまるで心得ていない。
「例えば、あなたの娘さんの、足の事とかね」
「……あん？」
「娘さんのご病気を治すという保障はありませんが、しかし、原因を突き止めるくらいならできます」
「オメェ。何を知っている？」
間接的に愛娘を人質に取られたギムレットが、飄々とした普段からは想像出来ないほどの闇を覗かせる。
大気が震えるほどの殺気という牙を向け、得体のしれない相手を威嚇する。
「私の瞳が捕らえているのは、あなたの舌には、奇怪な呪いが埋め込まれている事」
雰囲気はバルゴたちに似ている。十中八九仲間である事は間違いない。故に自分の舌に呪いが掛けられているという事は、バルゴから聞いたとしてもおかしくはない。
しかし、あの青年はおいそれと人の秘密を話すような口軽さは無いように思える。
そして、目の前に居る仮面野朗はなぜ、一人で来た？
もしかして、こいつはバルゴたちとは違う思惑で動いているのだろうか。

仮面の奥の瞳が晒う。
やはり、ギムレットは自分の登場に困惑している。そして気付いただろう。自分がバルゴ班長たちとは違う思惑をもって行動しているという事を。
「……条件ってのは、何だ？」
そうだ。それで良い。
「はい。まず、一つ。あなたの飼い主に、『私』を逢わせていただきたい」
手袋に覆われた手で人差し指を立てる。
「そして、二つ目。私の事は口外しないでいただきたい」
立てた人差し指に中指を添える。
「最後。これが本題なのですが」
オレンジ色の街灯の淡い光が、白い仮面を照らす。
影がまるで張り裂けた口のように横に伸びた気がした。
死神。そう呼ぶに相応しい風貌に、背筋が凍る。
死神の三本目の指がゆっくりと、立てられる。
「星空　バルゴを、殺していただきたい」
まるで意図の見えない要求に、思わず目を大きくし驚く。
「オメェ……。一体どういうつもりだ？」
感情が整理できず、思わず声が上ずる。
「まず一つ目の要求の理由は、あなたの飼い主の魔法使いとやらに、少しだけ有益な話をしたいと思います。二つ目は察し通り、バルゴたちとは別の目的で動いています」
「三つ目は……？」
こいつは、この黒いフードをかぶり仮面をしたこいつは、俺に一体何をさせたいというのだろうか。
そんな疑問を全て込め、異様な雰囲気に負けずにやっと口にできた疑問。
「星空　バルゴを異国で始末する。それが、私の任務の一つだからです」

しばしの逡巡の後。ゆっくりと双眸を曇りの夜空に向ける。
吐く息が白く流れていく。
俺が地獄に堕ちる事は確定している。決まりきった事だ。
だが、娘は何の関係も無い。
あの娘の為なら、猟犬となった。
甘い悪魔の誘惑は、再びギムレットに運命の選択を強いる。
娘の為に『友』となったばかりの青年を裏切るか。
娘が障害を抱えて、長い一生を生きていくか。
答えは、考えるまでもなかった。
毒を喰らわば皿まで。
悪く思わないでくれ、バルゴの旦那。
例え、血が繋がっていなくても親ってのは、子供の為に喜んで地獄の釜に身投げするもんなのさ。
ギムレットが了解の意を込めた手を差し出す。
白い仮面の人物が、その手を握り返す。
悪魔に身をやつし、犬へなり下がった男は、死神の傀儡へと成り果てた。

忍者、異国で戦う　9（後書き）

今回、あまり文章を推敲しなかったので、雑です。
推敲しなくても駄文じゃねーか。
と思われた方、本当にすいません。
生まれてきてすいません。

忍者、異国で戦う　１０

部屋の物資は、部屋の大きさに比例して増えていくのだという。
しかし、７畳程度の室内に大人サイズのシングルベットが二つ。ロッカーは備え付け。そして大人が、二人。
「どうやら部屋の物資というのは人間も含まれているようね」
良く晴れた朝、布団や衣服を干し、何も無い室内を見渡したミゾレが、少し汗ばんだ額を人差し指で拭いながら辺りを見回す。
ミゾレの問い掛けに否定も肯定もせず、バルゴが小さなキッチンで朝食を作っている。
「今日の朝ごはんは？」
「一般的な朝食をイメージしてみた」
トーストにカリっと焼いた目玉焼き。レタスのサラダ。すでにコーヒーは準備完了。
倫敦に来てからほぼ、毎日の朝食作りはバルゴが担当し、ミゾレは清掃といった具合に分担して家事を行っている。
バルゴのエプロン姿も見慣れて久しい。
「さて、任務完了だわ」
「こっちも完了だ」
手や腕に器用に四枚の皿を持ち、観葉植物のうっきー君が乗った小さなテーブルに並べていく。
両手を合わせ、一緒に「いただきます」をする。
「何ていうか……。スタンダードすぎる朝食っていうのも、逆に斬新ね……」
「文句があるなら、明日からまたピザな」
「うっ。朝からピザは重いかも……」
「冗談だよ」
さて、この穏やかな時間は、一体いつまで続くのだろうか。
できる事なら、いつまでもこの何気ない幸せを味わっていたい。

自分で作った朝食を頬張るバルゴの顔を見て、自然と顔が綻ぶ。
食後のコーヒーも飲み干し、後片付けに入ろうかという時、ドアをノックする音が室内に響き、ドアに一番近いバルゴが応対する。
念のため、ナイフを一本、右手に持ちドアへ向かう。
この部屋に用があるような人物は限られている。
大家か、狢(むじな)か、ギムレットか。
家賃の滞納は無し。よって大家の線は消える。
狢はバルゴたちが呼びかけない限り、姿を現す事は無い。
最後に残ったのは、煮ても焼いても喰えない男、ギムレットと言う事となる。
ドアの備え付けられたレンズから、向こうの様子を探り見る。
魚眼レンズ越しに、ギムレットの鷲鼻が大きく映っている。
「旦那ぁー。バルゴの旦那ぁー。いらっしゃいまかぁ。いらっしゃいますよねぇ」
ナイフを腰のベルトに挿し、ドアを開く。
「おはよう。どうした？」
「旦那！今日は何曜日か知ってますかい？」
意図の見えない質問に、バルゴの頭上に『？』が浮かぶ。
「今日は！なぁんと日曜日なんですよ！」
「知っているが」
「旦那ぁ。こんな良く晴れた日曜に部屋に閉じこもっているつもりですか？まぁ美人な奥さんとイチャイチャするつもりってんなら、止めやしませんがね」
朝からハイテンションなギムレットの冗談に、昨日の晩の事が思い出され、少しだけ顔が赤くなる。恐らく後ろで控えているミゾレもそうだろう。
「用が無いなら帰れ」
冷たくあしらい、ドアを閉めようとするが、足を挟み妨害する。
マルサか、こいつは。
「痛い痛い痛い！旦那ぁ痛いですって」

ギムレットの必死の抗議にようやく力を緩める。
「用件は何だ？」
「いやぁ、天気もいいんで、みんなでピクニックに行こうと思いましてね。こうしてハイテンションでお誘いしたんですわ」
「結構」
短く切るように断る。
「いや、そんな事言わずにね？正直に本音を話しますから」
「機嫌を直してちょ」と、ギムレットが人をおちょくる。
その言葉にイラッとしながら、取り合えず『本音』とやらに耳を傾ける。
「あの、今日はテセアラの母親の命日なんですわ。んで。墓参りを兼ねて出掛けようと、そういう魂胆でさ」
この男にしては、意外と真面目な用件だと関心した。
「なるほど。話は聞かせてもらったわ」
いつのまにか後ろに立っていたミゾレが、ギムレットに問いかける。
「おっくさぁーん！本日もご機嫌麗しゅう。こんな良い天気の日は、俺とどっかにでかけませんか？」
あくまでマイペースなおっさんに、頭痛がしてくる。
「まぁ、いいんじゃないかしら」
「マジですかぁ！ありがとうございます！いやーテセアラも喜ぶと思いますわ」
「本気か？」
思いもよらないミゾレの言葉に思わず真意を確かめる。
「一日部屋に篭ってばっかりじゃ、若さが腐るわ」
いや、その発想事態がもう若くない、と言いかけたところで、口をつぐむ。
この女とは、確か同い年だったはずだ。
「はぁ。で、何時にどこに集まればいい？」
「十一時頃に、アパートの玄関で待ってますわ」

「了解した」

幸せな時間は過ぎ去るのが早いというのは、誰が言ったのだろうか。

彼らにとって穏やかな一時（ひととき）は、矢のような速度で、光のような速度で、終焉へと向かおうとしている事に、まだ彼らは気が付いていない。

忍者、異国で戦う　１０（後書き）

この物語は起承転結を予定しております。
なので、承の部分に当たるこの２章は、転結に向けての
伏線が入っている為、他の章に比べ若干長めを予定しています。
まぁそれでも、ダラダラのグダグダにならないようには
気を付けます。

忍者、異国で戦う　１１

倫敦の郊外より遠く。市街を遥か先に眼下に見下ろす小高い丘。
青々と広がる気持ちの良い空と、緑々と流れるような草原が後方に控える壮大な景色。
崖のような先端に、それはあった。
墓標に名前の無い、辺りを花で囲まれ大きな石で造られた、テセアラの母親の墓。
黙祷を捧げ、二時を告げる鐘と同時にその場を離れる。
バルゴは石の墓と、倫敦の郊外が一緒に視界に入るこの景色を眺め、他の者達に遅れるように、ゆっくりと歩き出す。
「どうしたの？」
ミゾレが振り返り、バルゴに問いかける。
「いや。墓参り自体久しぶりだと思ってね」
それは、自身の先祖の事か、それとも妻となるはずだった少女の事か。
少しだけ寂しそうな表情から恐らくは後者であろうと、ミゾレは結論付けた。
日向　ヒヨリがどんな少女であったのか。それをバルゴの口からは絶対に聞くことはないし、自分も聞くことはしない。
確かに気になるところではあるが、聞いてどうなるというわけでもない。
彼女は既に故人であり、思い出はバルゴだけのモノ。それを好奇心という土足で立ち入ることは愚考にして、愚行というもの。
「バルゴさん。今日のお弁当、私が作ったんですよ。沢山食べてくださいね」
笑顔で語るテセアラの両膝には大きなバスケットがある。
「旦那。この子ってば、『バルゴさんも来るんだぁ』なんて張り切ってやがりましてね」

両手を重ね、くねくねと身体を動かす中年の男。
「お父さん！変な事言わないでよぉ！私は……その、別に」
真っ赤な顔で抗議をし、直後に俯き、同時に声がか細くなる様子は、やはり年頃の少女で、周りを暖かくする独特の可愛らしさに、何だか鼻の頭がむず痒くなる。
「実を言うと、俺達も弁当を持ってきたんだ。食事が愉しみだな」
ぽふっと、軽くテセアラの頭に触れる。
「ここらは見渡しも良いし、そろそろ飯にしようか」
「おほ！このピザ、奥さんの手作りですかい？いやぁ嬉しいなぁ！」
「いや、あたしは……」
「味わって喰えよ」
「え？」
思わぬバルゴの言葉に挟む口を失う。
本当はバルゴがせっせと作ったのだが、否定も肯定もせず薄ら笑うバルゴ。
ミゾレはその横で、バルゴという男の意外な一面を見た気がした。
少しばかり遅い昼食は、とても穏やかだった。
テセアラが作ったというサンドイッチや、ミートパイにクッキー。そしてミゾレ（バルゴ）が作ったマルゲリータピザに、おにぎりというよく判らない組み合わせ。
だが、初めて見るライスボールに、テセアラの興味は深々で、小さな手に米粒を付けながら、異国の味を愉しんでいた。
「ははぁ。見るからに、こっちのピザは奥さんが作って、おにぎりとやらは旦那の工作ですね」
「よく判ったな」
もちろん嘘である。料理がヘタ、というか、先天的に何かが欠けているミゾレの料理は、とても食べれたものではない。
両者が承知しているからこそ、家事を分担し、バルゴが料理を担当している。
「そりゃぁ、そうでしょう！見てくださいよ、このピザのチーズや、

トマトソースの絶妙なサジ加減！こりゃ、女性でなくちゃ作れませんて」
この男の眼に舌に、味の差異、違いなど判るのだろうか。
「このおにぎりって、何だか面白いですね。食べるまで中身が判らないなんて」
「この国では、米は主食でないからな」
「フィッシュアンドチップスには、もう飽きました？」
「いくらビネガーを掛けても、脂っこさは抜けないしな。でも、やっぱりラーメンが恋しいなぁ」
「ラーメン？」
テセアラが初めて聞く食べ物の名前に、首をかしげる。
「ああ、トンコツ醤油にチャーシュー大盛りは、俺のお気に入りだ」
「とんこつ？チャアシュウ？」
「おにぎりの話じゃなかったの？」
脱線しかけた話にミゾレが強制的に元に戻す。
どんな食べ物か興味を持ったテセアラが身を乗り出して話を聞こうとする。
楽しげな娘の顔を、少し遠い目で眺めていた。
十数年前のあの霧の夜に拾った、吸血鬼となった女の赤ん坊は、家でもよく笑う娘に育ってくれたが、この青年たちと居る時は、一段と輝くように微笑んでいる。
和気藹々と、それでいて和やかな雰囲気。何でもないような光景に、ギムレットの頬に何かが伝った。
雨か？いや、違う、これは……。
「ギムレット。何を泣いているんだ？」
判らない。なぜ、俺は泣いているのだろうか？
「お父さん。みっともないから鼻水拭いてよ」
娘の困った声。
「変なやつだな」
バルゴの笑った顔。

「テセアラも大変ね」
ミゾレの髪をかきあげる仕草。
俺はどうして涙を流したのだろう。
ああ、そうか。心のどこかでは、もう理解しているんだ。
もうこんな日が来ないという事を。
もうすぐ彼らに会えなくなるという事を。
だから悲しいんだ。
だから切ないんだ。
だから尊いんだ。
だから、だから泣いたんだ。
歳を取ると涙もろくなるというのは、どうやら本当だったらしい。
テセアラ。お父さんは誓うよ。
神でも、自分の心でもない。
愛する君に誓うよ。
今日、この日、この時間、この場所。この風景。そして、この面子。
例え、この身が第七地獄へ堕ちようとも、網膜に焼きついたかのように、切り取られたこの刹那だけは忘れないと、愛すべき魂に誓った。

忍者、異国で戦う　１２

美しく絢爛な応接室にギムレットは再び居た。
つい最近も来たばかりの居心地の悪い、悪趣味な部屋は精神的な牢獄と言っても過言ではない。
前回と違うのは、傍らに睡眠薬で眠らされた娘が車椅子に座っているという事。
そして、黒いローブをかぶった動物のような面をした死神が同席しているという事。
ギムレットは静かに目を閉じ、この屋敷の主である魔法使いの訪れを待っていた。
前回と同じように、金の獅子のドアノブがガチャリと回り、『魔道書』を大事そうに抱えたジャックという偽名の男が姿を現した。
瞳をゆっくりと開き、見上げるようにジャックへと視線を向ける。
魔道書の影響か、以前よりも数段にも増して邪悪を帯びた気配は、もはや人間の限界を超えているように思える。
このままでは、臨界に達した自らの魔力に、そして膨張した魔道書に、自身が飲み込まれ、暴発し、ヒトの原型すら留める事を許されない程の『大惨事』を招くかもしれないと思ったが、それをあえて口にしないのは、ギムレットが望む穏やか生活を奪う、この男へのせめてもの抵抗なのだろうか。
屋敷の主人が舐めるように客三人を見る。
「やぁ、ギムレット君。今日は、君の娘さんが来ると聞いて、約束通り美味しい茶菓子を用意させたのだが、ああ、どうやら寝てしまっているようだね」
「ええ。しばらくは起きません。何があっても」
「ふむ。それは残念だ。まぁ、いい。ところで、この仮面（マスケラ）を付けた方かね。私に会わせたいという人物は？」
動物の面をした黒衣の人物が音もなく立ち上がる。

「初めまして、魔法使い。私は狢(むじな)と申します」
「狢……。それは偽名、かね？」
「ええ、貴方と同じく」
驚いた事に狢は魔法使いの偽名があるジャックである事も、すでに調べていたようだ。
魔法というのは、存在自体を隠匿する必要がある。
目的は、一般人への混乱を避ける為、が主として挙げられるが、その裏にはある一つの法則が存在する。
固定概念否定の法則。
魔法という神秘は、大衆が持つ固定概念から省かれ、弾かれ、隔離される事により可能範囲が広がる性質を持つ。
例えば、火を起こすのに、現在はライターという着火装置によって簡単に行うことができるが、それが無い時代は、『火が起きる』事自体も原理として理解されておらず『火を起こす』行為は、魔法であり、『火を起こせる』人物は、総じて魔法使いであった。
しかし、魔法という不確かで不確定で不鮮明なモノに、恐怖と畏怖を覚えた大衆は、魔法が奏でる理論に、下世話な理屈を求め、自分たちの常識という手元に置く事で安心を得、同時に『火を起こす』という魔法は、なんでもないただの科学と成り下がった。
それは、『魔法堕ち』と呼ばれる現象である。これによって、単純な『火を起こす』魔法自体は無くならないものの、その行為は魔法ではなくなり、魔法の可能範囲が狭まってしまった事になる。
非常識は、常識によって駆逐される。それが、世の理であり、大衆が望む真理である。
それに逆らい、時代の進むべき道と逆行するからこその魔法。
故に、魔法使いは闇に隠された真実を白日の下へ晒す、この狢という人物に、敵意と、警戒と、侮蔑を含んだ瞳で睨む。
冷たい沈黙が流れる。
規則正しく聞こえてくる振り子時計がイヤに耳につくような緊張。
一食触発の空気がギムレットの目の前に漂っている。

「まぁ、いい。それより、この魔道書について、何か有益な情報をいただけると聞いたのだが。相違は無いかね？」
「はい。ただし、私が要求する事を呑んでいただけたら、の話ですが」
「要求？」
ジャックの眉がピクリと跳ねる。
「それもそうだな。無償で得られる情報に信憑性なぞまるで無い。いいだろう。言ってみたまえ」
顎に蓄えた髭を擦りながら、仮面の奥を見透かすように目を細める。
「私の要求、というより、このギムレットさんの願いなのですが」
仮面の奥の瞳が車椅子で座っている少女に向けられる。
「あの娘の神経を蝕んでいる『呪い』を、解いて欲しいのです」
狢の言葉に大きく反応したギムレットとは対照的に、ジャックと名乗る偽名の魔法使いは顔色一つ変えない。
「あ……。おい、そりゃぁ、一体どういう事だ？」
堪える事の出来ない動揺が、ギムレットの表情を激しく歪ませる。
「ギムレットさん。あの娘の身体を診て、私の瞳が捉えたのは、『蛇』でした。それも、下半身から徐々に頂上である脳へ伝い、侵食していく無数の蛇が、内部に巣食っています。進行は刻一刻と、今もなお」
「どういう事だ！一体……、答えろ！応えろ！ジャック！」
困惑し、怒号とともにジャックの胸倉を掴み、今にも殴りかかりそうな雰囲気。
無機質な瞳でギムレットを見つめ、否定も肯定もしようともしないジャックは、怒りのあまり真っ赤な顔をしているギムレットから視線だけを逸らし、狢へ瞳を移す。
「どうやって見知った？」
一言。
その一言で、狢の言った事を真実であると物語った。

「人の話を聞けぇ！」
堪えきれなくなったギムレットの感情が暴力としてジャックに襲い掛かる。
抵抗もせず、右の頬に渾身の鉄拳が食い込み、壁まで勢いよく叩きつけられる。
口の中が切れたのか、赤く腫上がった頬と、口から一筋の血が流れる。
血を拭いながらも、その瞳は依然として狢を捉えて離さない。
その態度にこちらが折れねば話が先に進まないと観念した狢が、ギムレットを片手で静止し、仮面の奥でため息をする。
「私の瞳は全てを見透かす特別性です、とだけ伝えておきましょう」
「全てを見透かす……。真理の瞳とでもいうのか。なるほど実に興味深い」
「加えて言うのであれば、私はその『魔道書』の奪還に、この異国に馳せ参じた者です」
「これを、奪い返しに来たと？」
「その辺の話は、後ほど。今はあの娘の呪いを解いてもらえるかどうかが、話の主題だったはずです」
無論断れば先の話など無い。無言の脅迫。
「いいだろう。喜びたまえギムレット君。君の娘は歩けるようになるぞ」
「ジャック……。てめぇは、どこまで人をおちょくりゃぁ気が済むんだ」
怒りに肩を戦慄かせながら、振り上げる拳の行き先を必死に抑えている。
「理由を、聞かせてはいただけませんか？」
狢から意外な一言が発せられる。
元々、ジャックに会わせるという交渉理由でテセアラの症状を看破する約束だったのだが、律儀にもそれを呪いと見抜き、呪いを掛けた本人の前で言い当て、『治す』という確約まで取り付けた。

そこまではいい。話の流れ、成り行きで結果的に娘が歩けるようになっただけ、とも取れる。
しかし、ジャックがテセアラに呪いを掛けた理由は、狢には関係の無い事だ。
「理由を。魔法使い」
再度、同じ台詞で事態の原因を追究する。
ギムレットには、狢の考えている事が理解出来ないでいた。それを示すかのように、血が滲むほどに握っていた拳の力は抜け、呆然と黒衣の人物を見つめる。
「ふむ。あえて言うなら、保険だな。ギムレット君が裏切らない為の……ね」
身動ぎ一つせず、先ほどと同じように視線だけを動かしギムレットを見る。
「嘘、ですね。真実を話していただけませんか、魔法使い。でないと私も真実を話す事が出来ない」
「君の瞳は言葉の嘘すら見抜くのか？」
ニヤリと口を歪めるジャクの表情に、初めて感情が垣間見えた気がした。
「そうだな。どう、話そうか」
顎の髭を擦り、思案する。
古い振り子時計が、午後三時の訪れを間延びした音で告げる。
「ギムレット君」
「あ？」
「例えば、だ。そういう仮定で聞いて欲しい」
「勿体つけずにさっさと話しやがれ！」
苛立つギムレットが声を荒げる。
おそらく、ジャックがこれから話す事は『例えば』でも、『仮定』でも何でもない、真実だろうというのは、暗黙の了解。
「例えば、私があの娘の親族だとしたら、どうするかね？」
「テセアラの……本当の父親だって事か？」

「まさか。私は、あの娘の叔父なのだよ。あれの母親は、私の妹だ。」
今にも高笑いしそうな面持ちのジャックとは対照的に、目を大きくするだけで、意外にも冷静なギムレット。いや、あまりの衝撃に、嗜好が追いついていないのかもしれない。
しばらく声も出せずに、ジャックの言った事を反芻する。
その表情に満足したのか、ギムレットを鼻で笑う。
「知っての通り、我が一族は魔法使いでね。その身体の内部は、一般の人間と造りが違う。そう、魔法を使う為に膨大な魔力が日々、蓄えられている。テセアラに呪いを埋め込んだのは、蓄えられた魔力を、呪いを介して私に供給させる為だ。一番効率の良い方法が結果として、あの娘の神経の繋がりを鈍くさせ、歩けなくしてしまったのだが、それだけだ。他に他意は無い。この呪いは祓うとしよう」
「……そうですか。判りました」
これも、嘘だ。
狢が仮面の奥で目を細める。
やはり、どの国にも『狸』は居るようだ。
その考えを読み取ってか、ジャックが狢と目を合わせ、哂う。
ようやく廻り出したギムレットの頭脳に、稲妻が走ったかのような閃きがあった。
十数年前、ギムレットが所属する組織に一つの依頼が舞い込んだ。
『倫敦の街に女の吸血鬼が現れた。これを始末して欲しい』
短く、要点しか書き出されていない文章に組織の上層部は、初めは困惑したらしいが、抹殺者を一人派遣し、真偽を確かめる事にした。
結果は当たりで、抹殺者はこれを撃破。しかし、倫敦の街の管理・守護を名目に戦線を離脱する事となった。
今、目の前に居る男は、魔術の果てに吸血鬼となってしまった自分の妹を、『俺』に始末させたというのか。
「アレの専門は不老不死でね。おそらく魔術の発動中の事故で、偶

発的に吸血鬼化してしまったのだろう」
魔法使いというのは、魔法使いという人種は、否、この男は、歪んでいる。狂っている。魔法意外の何かに取り憑かれている。
でなければ、身内の死を、自分の妹の死に様を、こうも嬉々と語る事など出来ない。
「さて、理由は語った。真実も白状した。ギムレット君。私は魔法使いだ。その原則は『等価交換』となる。今の情報の対価を、支払ってもらいたいのだが、いかがだろう？」
正直ギムレット自身、頭がどうにかなりそうだった。
いっそジャックが話した出来事を全て無かった事にして、テセアラと何処か遠いところで暮らしたい。現実逃避寸前の思考は、何も知らずに薬で眠らされている、愛しい娘の寝顔により引き戻される。
もう、引き返せないトコロまで来てしまった。
今更ながらに後悔の念だけが、ギムレットを支配した。
「あんたは、俺に……何をさせたいんだよ」
疲れきった声で、静かに問いかける。
「最近、私の周りをかぎ回っている輩がいる。それを排除してくれないだろうか」
「ああ、それは私からお願いしている事にかぶりますね」
ジャックの言葉に狢が語尾を付け足す。
狢も言うのだから、『排除』する人物は必然的に限られてくる。
星空　バルゴ。太陽のような金髪に、青空のような碧眼した青年。
自分に拒否する権限など無い。
それは、魔法使いと初めに取り交わした契約。
『自分の依頼を断るな』
裏を返せば、断れば娘の身に危険が迫るという意味である。もとより、自分に拒否する権限など、無い。
「ああ、判ったよ。その代わり……」
「安心したまえ。先ほども言ったように、テセアラの呪いは解除しよう。つまり、君への依頼はこれで最後となる、と受け取ってもら

っても良い」
ギムレットの視界が、まるでネガが反転したかのように白黒に写った気がした。
それは、すなわち……。
「娘は……、テセアラの呪いは、必ず……」
「ああ、契約しよう。悪魔と魔法使いは契約には律儀であるというのは、知っているだろう？」
契約破棄は、命を以って。
それは魔術を使う、あるいは遣う者にとって、絶対の理。
悪魔は契約を取り交わすからこそ力を発揮でき、魔法使いは契約に縛られるからこそ力を行使できる。
大昔、魔法使いの祖が敷いた改竄不能の絶対ルール。
それを口に出したからには、一先ずは安心できる。
「判った。猟犬は猟犬らしく、獲物を狩ってくる」
「よろしい。では、早急に入院の手配を取るとしよう。人目のある場所に置いた方が、色々と安心できるだろう？」
「お願い……します」
そう言って頭を下げる。
思えば、人の親として、この男に頭を下げるのは、これで二度目だ。
「それと、これを持って行きたまえ」
そういって豪華な装飾をした棚から、銀色の筒を取り出す。
初めて見るそれは、紛れも無く笛。形状からフルートと呼ばれる楽器に近い。
だが、魔法使いが差し出すからには、何かしらの魔術が施されたモノであることはいうまでも無かった。
「悪魔ハーメルンの笛だ。街中で事を行うなら、これで人を遠ざけるといい」
そういって哂う魔法使いの表情は、何処までも黒く、醜く、歪んでいた。

その光景を見ていた狢が仮面の奥で、ただただ無表情で見つめていた。

忍者、異国で戦う　１２（後書き）

夢で、会社の人に『この小説ってさ、（内容を）詰め込みすぎだよね』
って言われました。

……確かにそうかも。
現実で、お礼を言いました。キモがられました。
ありがとうございます。
反省します。が、僕にその忠告を活かせる技量はございません。ｏｒｚ

忍者、異国で戦う　１３

「昔、旦那たちが来るずっとずっと前、この倫敦（ロンドン）はそりゃあ、酷いトコロだったんですわ」
珍しく月が煌々と顔を出している、静かな闇夜。
いつものバーで一杯引っ掛けようと、誘われたバルゴはギムレットと二人、しんと静まり返った街を歩いていた。
突然倫敦の街の過去を振り返るギムレットに違和感を覚えながら、否定も肯定もせずに後を付いていく。
「ご存知の通りの吸血鬼騒動や、改造された動く死体、切り裂き魔。放火による大火事。街が石造りなのは、火事対策なんですぜ」
「ギムレット」
様子がおかしい。それに気付いたバルゴがギムレットを呼び止める。
「でも、そんな街だからこそ、俺ぁ娘に出会えたんですわ。あの娘の母親は俺が始末してしまったワケですがね」
「ギムレット！どうしたんだ？様子がおかしいぞ」
先を行くギムレットの足がピタリと止まる。
円状に少し開けた広場の中央にある噴水を挟んで両者が対極に位置する。
ポケットからライターを取り出し、煙草に火を付ける。
「お前、煙草を吸っていたのか？」
別に大人なら、珍しくもないが、バルゴはギムレットが煙草を吸っていたところは一度も見たことがない。
紫煙を肺に送り込み、ため息のように重く吐く。
「禁煙……してたんですわ。テセアラを拾ってから、ね」
「そういえば、街が静か過ぎるな。人の気配が感じられん」
「流石ですね。旦那」
紫煙を頭上に吐く。薄い煙が大きな満月にかぶる。

「街の人間は全員、今日だけこの街から退場願いました」
「どういう事だ？」
「そのまんまの意味ですよ。今、倫敦の街には、俺たちのような人間以外、居ません」
ギムレットの乾いた双眸がバルゴを見据える。
およそ半分まで吸った煙草を石畳に擦りつけ火を消す。
「こないだ行ったテセアラの母親の墓、覚えていますか。ちょいと魔術で誘導させてもらいました」
何のために。
愚問だ。
ギムレットの双眸は自分を獲物として捕らえている。
つまり主から自分を殺せ、と命が下ったのだ。
命令に従い、友人となった者をその牙に掛けんとする姿は、忍に、いやバルゴ自身に重なって見えた。
「ところで旦那。今日は、奥さんはどうしました？」
「風邪を引いたらしくてな、身体がダルいらしいから安静にしている」
「……そうですか」
ギムレットが静かに目を閉じる。
その姿は瞑想のようで、何か覚悟を決めているようにも見て取れた。
瞼の裏の暗闇に己が内の『神』に祈りを捧げる。
主を許したまえ。主よ慈しみたまえ。主よ哀れみたまえ。
神は、何も応えない。そんなコトは判りきっている。
過去、幾度と無く繰り返された行為。もう何千何万と捧げられた祈りという名の懺悔。
神は、何も答えない。そんなコトは解りきっている。
そんな自分に自嘲し、刃物のような視線で目の前に立つ獲物を見定める。
「もうお察しの通り、主から一つの命令が下りました」

ギムレットが右に数歩歩みを進める。
姿が噴水に隠れ見えなくなる。
「娘の未来の為に。旦那、死んでください」
深い闇から響くかのようなドス黒い声がバルゴの耳に届く。
再び姿を現したギムレットの姿は、さっきまでの衣服とはまるで違っていた。
全身を黒いコートに包み、その奥には銀色に輝く鎖帷子が見える。右腕には1メートル程の筒が握られている。
あれが、銃とかいう代物か。
スッと目を細め、その流麗なフォルムを瞼に焼き付ける。
なるほど。どんな手法かは知らないが、膨大なチャクラが秘められている。
あれなら確かに尾獣クラスの化け物でも太刀打ちできるだろう。
「悪いなギムレット。俺にはまだやらねばならないコトがある。テセアラの為に、死んではやれない」
懐から一本の巻物を取り出し、口に加える。
虎の印に始まり酉、羊、猿、辰、亥と高速の印を組む。
目を閉じ、ギムレットの置かれた状況を考えてみる。
恐らく失敗した場合、待っているのはテセアラの死。
もし、自分がギムレットと同じ立場なら同じことをするだろう。
お前の気持ちは十分理解できる。
悲しいな。俺たちはこんなコトでしか、自分たちを語れない修羅。
酒なんかでは癒せない心の傷を、また一つ増やさなければならない。
しかし――。
バルゴの身体がドロンと煙に覆われる。
一陣の風が、戦闘装束に身に纏った忍の姿をさらす。
現れたのは心を刃で殺した冷徹な一人の男。
木枯らしが石畳の街を滑るように舞い渦を巻き、オレンジ色の街灯が闇夜を儚く幻想的に染め上げる。

胸中に在る想いは任務か里か。
一人の忍が異国で戦う。

忍者、異国で戦う　１４

遠い東の異国の戦士の戦い方が、『速度』に徹底されたという事は、あの雨の日の夜、南の倉庫街で　遠目で見た時からある程度は理解できた。

しかし、これは予想外だ。いや想定はしていたものの、人体の企画を大幅に底上げされたかのような鍛錬の成果が成せる業に、ギムレットは驚嘆していた。

数十メートルの距離が一速でゼロになるかのような速さは、もはや風。

「中々速ぇじゃねえか！」

喜ぶような大声を出し後方へ大きく跳躍し、同時にライフルの標準をバルゴに合わせ、引き金を絞る。

闇夜を弾けるように照らす一瞬のマズルフラッシュがバルゴの網膜に焼きつく。

「ちっ」

片目を塞ぎ、刹那で捕らえた鉛弾の軌道を正確に捉え未来予測し、眉間に当たる直前でクナイで弾く。

ギムレットの足が石畳を捉えるのが僅かに早く、クナイによる袈裟切りを寸前で避ける。

だが、すでに二撃が繰り出されているのは、予想すら出来ず、初撃の遠心力を用いて繰り出された裏拳がギムレットの左頬を直撃する。

チャクラを纏った強烈な一撃は顔面を突き抜け、頭蓋を粉砕する威力を持つ必殺の技。

だが、何か見えない分厚いゴムのような感触に阻まれ、それは敵わない。

「蚊でも止まったか？」

仰け反った体勢からギムレットの瞳がギラリと光る。

右腕を万力のような力で捕まれ、獣のような咆哮とともに思い切り石畳に叩き付けられる。
背中から全身を叩きつけられ、まるで腹と背がくっつくような衝撃にたまらず吐血する。
頭をめがけた止めの踏みつけ（スタンプ）をかろうじて避ける。
大きな地響きとともに大きく放射状に砕ける石畳。
危なかった。あれを喰らってしまえばそれだけで勝敗が決する。
忍が素早さに特化した暗殺者なら、抹殺者は腕力に特化した暗殺者という事なのだろう。
バルゴが亥、申、酉、子から始まる複雑な印を高速で紡ぐ。
「風遁　風輪華斬（ふうりんかざん）」
それは高速に回転させた真空の輪を幾重にも打ち出すバルゴの得意忍術。
一枚の輪を正面から見ると、まるで華のように見える事からその名が付いた。
対象を八つ裂きにせし煌く風の華がギムレットに牙を剥く。
始めてみる異国の魔法、忍術に興味、興奮、期待を膨らませ、同時に畏怖、恐怖が全身を支配する。
「いけ」
バルゴが短く静かに命令を下したのが合図だった。
四方八方から鋭い音とともに風輪が襲い掛かる
全てを紙一重で避ける。
地面に刃がぶつかり、削れる様を視界の端で捕らえ、思わずぞっとする。
硬い石すら綺麗に削るのだ。人体などひとたまりもあるまい。
気が付けば周囲３６０度を包囲されていた。
およそ数百にも及ぶ斬円をかわし、肩で息をする。
「俺もトシかねぇ」
軽口を呟きながら、思考をクリアにする。
落ち着け。そしてよく考えろ。

アレは何だ？
アレは、忍術とかいう異国の術だ。
忍術とは何だ？
チャクラとかいう体内のエネルギーを変換し体外に放出しているだけだ。
では、チャクラとは何だ？
人体の構造が、自分たちと同じであるならば、チャクラとはすなわち魔力。
忍術とは魔法。
ギムレットの頭の中で異国の秘術と、自国の外法がピタリと合わさった。
一瞬の隙を突き、風の輪が右舷から襲い掛かる。
それは人体を二つの肉塊にするに十分な威力を秘めた真空の刃。
ギムレットの身体に命中した瞬間、水分が蒸発するかのような音とともに真空は渦を巻く風へと姿を変え、二人の間に吹きすさんだ。
まったく対照的な表情を浮かべる両者。
一人は驚愕と困惑を。
一人は笑みを浮かべ、勝ち誇ったように口元を吊り上げている。
「種明かしをするとね、旦那。この聖銀製の鎖帷子は魔力を極端に嫌う性質があるんでさ。だから……」
ギムレットが姿勢を獲物を狙う捕食者のように前かがみになる。
「魔法は俺には効かねぇーんだよ！」
限界まで力を蓄えられた脚力による爆発的な加速。
初速は忍のそれに匹敵する速さで石畳を削るように駆ける。
空間を裂くような双腕の五指がバルゴを喰らうように襲い掛かる。
蛇のようにしなる腕を紙一重でかいくぐる。
右眼球を狙った一撃を避け、左わき腹を抉る一撃をかわし、心臓を突く一撃を右腕で受け止める。
傍目には数手にしか捕らえられない攻防だが、その実、連撃は数十数百にも及ぶ。

両者の動きが止まった瞬間、ようやく介入を許された辺りの空気が烈風となって吹き荒れる。
呼吸は絶え絶えに。すでに慢心は創痍。数十センチの間で忍と抹殺者が火花を散らす。
身体の錬度は同等。ならば勝敗を決する要因は装備。
それを悟ったギムレットがバルゴの腕を振り解き、噴水を挟んで大きく間を空ける。
いつの間にか手に握られていたライフルの銃口をバルゴに向ける。
怪訝な表情でギムレットを睨む。
無駄だ。そんな玩具は俺には通じない。
バルゴの無表情な表情から意図を読み取ったギムレットが不敵に笑う。
「旦那。確かに鉛球を打ち出すだけの玩具なら、あんたは殺せないだろうさ。だがな、こいつは玩具でも、ましてやただの銃なんかじゃぁないんだぜ」
モーゼルＫａｒ９８ｋ。独逸（ドイツ）が誇る傑作騎兵銃。しかしそれは仮の姿。
銃身から高圧縮された魔力という名のチャクラがユラユラと立ち上る。
「神文（ゴ・スペル）、解放」
銃神の主が封じられた力を解き放つ。
闇を塗り替えるような黄金の光が、強大なチャクラが暴風となってギムレットを中心に竜巻を造る。
轟音と轟風に、思わず身体が仰け反る。
まともに目を開けられない風の中で、何が起こっているのか目視しようと、薄目を開ける。
神々しい光の翼を携えた甲冑騎士が、光の中から現れ出でる。
古く、歴史の闇に沈みし黙示録（アポカリュプス）に残された天使が姿を現す。
篭手（ガントレット）に覆われた手にはモーゼルが握られており、銃身にはナイフが取り付けられ、突撃銃本来の姿を晒している。

ガシャンと、金属が重なる音と共にギムレットの前でひざまづく。
「コイツぁ、死を司る天使。名を『マラク・ハ＝マヴェト』って言ってな」
主の現状を理解した死の天使が、その双眸をバルゴに向ける。
「主（オレ）に敵対するヤツを必ず死に誘うんだわ」

閃光がバルゴの目を覆う。
ドン、と何かがぶつかった音がした。

いつの間にか眼前へと迫っていたハ＝マヴェトの、銀色に輝く鉄面の奥の赤い瞳が炎のように燃えた気がした。
「な……に……？」
一瞬の出来事に困惑する。
赤く見えるのは、自分の視界か？
腹部に激痛が走り、ゆっくりと痛みの源泉へと視線を向ける。
そこには、深々と突き刺さったモーゼルの銃刃が、腹を突き破り、背中へと達していた。
胃に溜まった血液が逆流し、口から盛大に吐血をする。

力が抜け、崩れるように膝から倒れる。
コツコツと、石畳を叩くようにギムレットが近づいてくる。
「言ったでしょ。コレは玩具なんかじゃないって」
ハ＝マヴェトから手渡されたモーゼルの銃口をバルゴの頭に向ける。
「さようなら、旦那。あんたのコトは忘れない」
冷たく、冷えた瞳でバルゴを見つめ、引き金を引く。
断末魔のような銃声が、無人の街に響き渡った。

忍者、異国で戦う　15

煌々と照る月が見下ろす無人の街に一発の銃声が響き渡った。
放ったのは白銀の天使を連れた聖なる意思の代行者。
抹殺者にして猟犬にして、死神の傀儡、ギムレット。
足元には異国の戦士が這い蹲るように倒れている。
「覗き見とは関心しねぇなぁ」
バルゴの頭に合わせた標準を、引き金を引く瞬間に逸らし、奥の闇へと向け発砲した。
聖なる銀弾が吸い込まれた影からゆっくりと、闇が這い出るように狢（むじな）が姿を現す。
顔につけた動物を模した面は、心なしか笑っているようにも思えた。
「お役目ご苦労様です。ギムレットさん」
音も無く、まるで浮いている幽霊のように近づいてくる。
「もう少し、この国の異能者の戦い方というのを見ておきたかったのですが、まぁいいでしょう」
「おめぇ、ソレは何だ？」
雲間の月の弱々しい光が、狢の腕の『何か』の輪郭を現す。
ギムレットの怪訝な声にバルゴが引きずるように顔を向け、ようやく狢を認識する。
「……。狢か……？」
搾り出したようなか細い声に、ギムレットが目を大きくし狢を見つめる。
「その通りです。バルゴ班長」
ギムレットにしがみ付きながら、フラフラと二本の足で身体を立たせる。
雲が切れ、一際明るくなった月明かりが、狢の全身を妖しく照らす。

その腕には――。
その腕にはぐったりとしたミゾレが抱きかかえられていた。
「ミゾレぇ！」
吐血しながらも、ありったけの感情で相棒の名を叫ぶ。
しかし、その表情に変化もなければ生気も感じられない。
「おめぇの目的は、この旦那じゃなかったのかよ！」
困惑したギムレットも感情をむき出しにして声を荒げる。
「私は狢。人を化かします。私の本当の目的は、ミゾレ様の方でした」
仮面に映る影がぐにゃりと歪み、口が裂けるように笑っているような気がした。
「ミゾレは、俺が知る限り……、最高の忍だ。お前にやられるとは……思えん」
眼光は鋭くも声は今にも途切れそうで一言一句がバルゴの寿命を削っているようにも思えた。
「確かに。私はミゾレ様には敵いません。忍としての技量も、鍛錬も、チャクラの量も、才能も全てにおいて匹敵しません。彼女と私とでは、忍として格が違いすぎます。貴方の言われる通り、ミゾレ様は最高の、最強の忍です」
おそらく立っている事も辛いのだろう、バルゴの額には大粒の冷や汗が流れている。
肩で呼吸をしているバルゴの身体を、複雑な面持ちでギムレットが支える。
「だったら、何故……？」
吐き出すような怒号でバルゴが感情をむき出しにする。
仮面の奥の冷酷な顔が、バルゴを見下すように晒う。
狢の手袋に覆われた指がそっとミゾレの頬を撫で、仮面の奥の双眸がバルゴを捉える。

「彼女は、妊娠しています」

「……な……に……？」

時間が、止まった。

それは比喩でも何でも無く、文字通りバルゴの感情を、痛みを、時間の感覚を、存在すら凍りつかすに足りる一言。

呆然と憮然とした姿で。心中は苛立ちと憎しみが入り混じった狢の表情を仮面が隠す。

そこには自らの姉を間接的に死に導いた婚約者　バルゴへ向ける感情の一つがあった。

自分の相棒の僅かな変化にまるで気がつかなかった間抜けなバルゴを見下し、侮蔑するように見下す。

対するバルゴは最近のミゾレの変化にようやく気が付く事になる。心当たりならある。そして最近の体調不良も、食の好みの変化も、妊娠していたというのであれば得心がいく。

「あなたは……」

大切にしすぎて逆に気が付かない。過去の過ちを再び繰り返す愚かなバルゴに、狢が抑えきれなくなった感情を口にする。

「あなたは、大事な人を守るフリをしながら、大切な部分に目を背け、僅かな変化に気付かず、……そうして我が姉、日向　ヒヨリを死に追いやったんですね」

バルゴは何も答えない。応えられない。

過ぎた事実に遠い過去。取り返しのつかない過ち。

忘れる事の出来ない古い罪（きず）が、今になってバルゴに最悪の形で襲い掛かっている。

「だが、……ミゾレは関係ないハズだ！」

「関係なくはありませんよ。ミゾレ様の、いや、『この女』のせい

で、貴方は姉の事を忘れてしまった」
「忘れてはいない！」
「現に貴方はこの女を好きでいるのでしょう！」
沈黙。
怒号の後の余韻が静けさを強調する。
「何も答えられないでしょう。それが答えです」
バルゴが肩を落とし、うな垂れる。
「つべこべうるせぇんだよぉ！」
消沈するバルゴの姿を見たギムレットが苛立ち、声を荒げ叫ぶ。
「てめぇは男同士の戦いにケチを付けた！ハ＝マヴェト！こいつを死に誘え！」
主の命令を受けた聖銀の天使が光のような速度で狢に迫る。
腰に携えた大降りの剣を振りかざし、月を斬らんばかりの勢いで切りかかる。
雷鳴の如き一閃。
しかし、斬られ真っ二つになった箇所が陽炎のように揺らめく。
「ギムレットさん。あんたは忍を舐めている」
まるで隣で囁かれたようにはっきりと聞こえた狢の声。
「幻？魔法か！」
「違います。忍術です」
ギムレットが声に反応し、振り向くより早く、狢が『千本』をギムレットの首筋に穿つ。
一瞬の出来事に困惑し、混乱し、錯乱しながら絶叫を上げる。
針治療にも使われる細く大きな針である千本は、人体急所を知る者が扱えば、最低限の刺し傷で死に至らしめる事ができる。
主から魔力の供給が断たれた天使の姿がボヤけ始め、再び繰り出された光速の斬撃は、当たる直前で霧散し、消えてしまった。
原因は一つ。首の秘孔を穿った千本には毒が塗られていた。ただそれだけだ。
「あ…、が……」

「ギムレット！」
「一度見た技がそう何度も通用すると思いますか。回避不可なら、予め分身という対策を講じておくのが手段というもの」
支える力を無くし、バルゴと共に石畳に崩れるように倒れる。
二人分の血溜りが、石の轍に流れ込む。
「無様ですね。バルゴ様」
「……お前の目的は、何だ……？」
指された箇所を庇い、背中を丸めながら立とうと足を踏ん張る。
「私の目的は、ミゾレ様。正確にはミゾレ様に宿るであろう、この赤ん坊です」
「どういう事だ？」
「忍の女性は子供を身ごもると一時的に能力が落ちます。それは、チャクラを含む全ての力を腹の子供に注ぎ、一族の力の継承に本能的に身体が専念する為です」
ゆえに妊娠が判った　くノ一は一つの例外も無く全ての任務を離脱させられ、子供の育成に集中させる。
それは未来を支える新たな息吹を護る里の方針。
「私の任務の一つはね、バルゴ班長」
冷たい石畳にミゾレを横に置く。
白く美しいミゾレの肌が青白く見える。
くるりと振り返り、バルゴの眼前に狢がゆっくりと無表情の面を近づける。
息遣いが仮面を通して聞こえてくる気がした。
「大蛇丸をこの地で甦らせる事、です」
それは。
それは、ミゾレの腹に宿った新たな生命を生贄にするという残酷な宣告。
狢が白い仮面にそっと手を添える。
「そして、これは私の私怨、目的ですが」
狢が、動物の面を模した白い面を、ゆっくりと外す。

「日向　ヒヨリを死に追いやった星空　バルゴを最も暴戻(ぼうれい)な状況で裏切る事」
仮面の奥から現れた日向一族の白き瞳がバルゴを捉える。
「お前は……」
「『おれ』は、日向　ヒオリ。この顔に見覚えがあるでしょう。おれの姉ヒヨリとは一卵性の双子の姉なのだから、ね」
額には卍型の呪印が。顔は昔想いを寄せた少女が成長したかのような女性的な顔立ち。
美女ともいうべき素顔の青年が、恨めしい双眸でバルゴを睨んでいた。
ヒヨリに弟がいるというのは聞いていた。しかし、一度も会わずじまいだった。
「過去は、どこまでもあんたを追ってくるぞ。逃げても、避けても、無視しても、忘れても。過去(おれ)は必ず、追いつき、捕らえ、あんたを逃がさない」
ようやく自分の本心を爆発させる事ができたヒオリがバルゴに凶刃を向ける。
ギムレットを穿った千本で、今度はバルゴに止めを刺そうと構える。
「星空　バルゴ。死ね！」
愛する少女を失った悲しみが再びバルゴを襲う。
ヒヨリを救えなかった自分が、情けない。口惜しい。悔しい。そして惨めだった。
ヒヨリを追い込んだ状況が、怨めしい。恨めしい。憎らしい。そして腹立たしかった。
何より、ヒヨリが追い込まれている事にすら気付かず、救えなかった自分が、許せない。
言葉の一言一句が鎖となり、重りとなり、バルゴを縛り、縫い付ける。
ヒヨリと瓜二つのこいつに殺されるなら、自業自得というもの。

俺は殺されて当然なのかもしれない。
諦めと同時に肩の力が抜け、瞼が重くなり瞳を閉じる。
「狢。あんたは忍(あたし)を舐めている」
囁くより速く、まさに電光石火の『千鳥』がヒオリのわき腹を抉る。
「うちは　ミゾレぇ！」
「自分で言ってたでしょ。あんたとじゃあ、格が違うのよ！」
怒りに燃えたミゾレの赤い瞳、写輪眼がヒオリを捉える。
「がっ……ぁ！」
雷撃を伴った一撃に苦悶の表情で声を絞り出す。
「ミゾレ……」
「バルゴ！あんたもあんたよ！いつまでも昔の女を引きずってるんじゃないわよ！いい加減にしないとぶっとばすわよ！？」
嫉妬から来る本音なのか、現状からくる本心なのか理解に苦しむ一言に、バルゴがポカンと口を開ける。
恐らく今まで一度もした事の無い間抜けな表情。アホ面。
「くっ……！」
ヒヨリがミゾレの腕から何とか逃れ、逃げるように距離を開ける。
「あ、いや、でも俺は……」
ようやく正気を取り戻したバルゴが、正常に廻り始めた頭で何かを言葉にしようとするが、喉まで出掛かった言葉が巧く口に出ない。
大事そうに腹を抱えたミゾレがバルゴに振り向く。
今まで見たことも無いような強い決意を携えた顔。
「どんな形であれ、どんな思惑があれども、あたしはあんたを愛して、子供を授かった。それは誰にも否定はさせないし、あたしも後悔はない。力が落ちるまで、まだ幾許(いくばく)の猶予がある。早く決着を付けて、里に帰りましょう？」
強く、優しい表情。

母は強し。
バルゴの脳裏にそんな言葉が浮かんだ。
『この女が真に心を刃と成り得ないのであれば、自分が刃(は)となり、悪となろう』
バルゴが、己が忍道を誰にも聞こえないように呟く。
二対一。
現状を冷静に判断したヒオリがこの場を後にする算段を整える。
「星空　バルゴ。書は倫敦大学連合地下深くに座せし魔法使いが持っている。ミゾレを母体として使えない以上、あいつはそこに転がっている抹殺者の娘を生贄にするだろうな。止めたくば来い。決着の舞台は整っている」
穿たれた腹を抱え、フラつきながらヒオリの黒衣が影と同化し、ゆっくりと闇へ溶けるように消える。

後には静寂だけが残された。

街は何事も無かったかのように静まり返るも、所々に残された傷痕が、先ほどまでの戦いの熾烈さを如実に物語る。
手当ても終わり、ギムレットの千本をゆっくりと引き抜く。
秘孔の位置から、仮死状態にさせる箇所である事は予測はできた。
喉に溜まった血を咳きとともに吐き出す。
「よう」
疲れたバルゴの表情。
「旦那。奥さん……」
同様に精魂尽きたギムレットの顔。
「御懐妊、おめでとうございます」
「ありがとう」
にっこりとし、応えるミゾレ。

「ギムレット、話は聞こえていたか？」
「ええ。旦那。一時休戦して、テセアラを助ける手助けしてくれませんか？」
「俺たちの目的は魔法使いとやらが持つ禁術書だ。優先事項は異なるが、それでもいいか？」
「もちろんでさ」
素直に了承すればいいのに、そう思いながらもミゾレは口に出さないでいた。
もうすぐ夜が明ける。
どう転んでも、この地で拝める朝日は残り少ない。
「煙草は、吸わないのか？」
「いや、久しぶりに吸ったら美味しくなくてね。テセアラと、奥さんと、何より自分の健康の為に、吸わない事にしますわ」
「それがいいな」
ぶつかり、互いに認め合った男たちのやり取りを横目に、ミゾレが新たに宿った命を抱えた腹を擦る。
自分の力が戦闘に耐えられる期間は残り少ない。
それまでにこの任務に決着は付くのか。
それまでにこの身体は持ってくれるのか。
何よりこの子は……。
一抹の不安を抱え、明るくなった夜空を見上げると、一際輝く一等星が目に付いた。
美しくも悲しく煌くその光は、地上のしがらみを見守る　よだかのモノかもしれない。
ミゾレは、そう思った。

幕間　狢―むじな―　二

うちは　ミゾレ。
木ノ葉の里において『うちは』の名を知らない者はまずいないだろう。
木ノ葉の里における最も優秀な一族として。
木ノ葉の里を度々壊滅に追いやった黒幕の名として。
その名声と悪名は今やアカデミーの教科書にまで載っている程で、木ノ葉創世記においても登場する古き血脈。
有能すぎるからこそ悪意を心中に携え、有能すぎるからこそ悪意の姦計に巻き込まれた、見方を変えれば悲劇の一族となるのだろう。
実際、何代か前の火影の代に遂に途絶える事となる。

しかし私、いや、『おれ』がアカデミーに在籍しているころから噂としてまことしやかに囁かれるようになる。
『うちはの一族はまだ生きている』
それは悲劇として完了した物語にたいする蛇足。
ご都合主義もいいところだ。
実際に彼女、うちは　ミゾレを見るまではそう思っていた。
彼らうちは一族は名を変え、姿を隠し、されど一族としての誇りは失わずに今日まで生きながらえていた。
もはや一族は彼女の家族、ミゾレとその両親のみを残すだけとなってしまったらしいが、ミゾレはそれまでの名前を捨て、『うちは』と名乗り火影を目指すと周囲に豪語していた。
当然のように、歴然のように、その道は困難を極める事になる。
なまじ優秀なだけ、恨み、妬み、嫉みなど、人間独特の粘りつくような負の感情に絡め取られ、がんじがらめになった事は容易に想像できる。
ミゾレが木ノ葉きっての上忍となれたのも、元来気が強く、生真

面目な性格というのもあるが、そこには現在の相棒　星空　バルゴの存在が大きく関わっているのだろう。
互いに切磋し、互いに琢磨しあう関係。
ライバルとも好敵手とも言う関係。
正直、羨ましいとさえ思う。
アカデミー時代。すでに中忍となっていたミゾレだが一度だけ大喧嘩をした事があるらしい。
いや、大喧嘩というレベルではない。
それは、一方的な暴力であったと聞く。
相手が二度と刃向かう気すら殺ぐに十二分に値する圧倒的な暴力。
理由は一つ。
『うちは』の名を汚されたから。
『そいつ等』がミゾレに対して一体何を言ったかは不明。
しかし、ミゾレの怒りを買った代償として、そいつ等は忍としての生命線を完全に断たれ、現在もその時の恐怖が頭から離れないのだという。
おれにとっては、名前も覚えられない程の取るに足らない連中だが、実際にミゾレと対峙した立場から言わせてもらうと、少しだけ同情する。
とはいえ、それだけの事件を起こしたミゾレは中忍の役職を剥奪。下忍へと降格となる。
だがそれがきっかけで、後の火影、流氷　ヒョウガとチームを組む事となる。
第二十五班＞ヒョウガ組＜
現在となっては名実ともに最強と名高く、伝説に近い隊であるが、結成当時はメンバー全員がいつ死んでもよい、いや、そういう難易度の任務ばかりを押し付けられるような、そういう人員が集められた小隊だったのである。
日向の本家の次女を間接的に死なせた星空　バルゴ。
里の仲間を再起不能にしたうちは　ミゾレ。

そして、過去に自分が率いた小隊を全滅させてしまった経歴を持つ流氷　ヒョウガ。
彼らの共通点は、過去に対する重すぎる責任。
懺悔か、償いか。その胸中を知るものは、本人たち以外にいない。
彼らに『科せられた』任務は熾烈にして過酷。生存確率は１０％を切るような内容ばかりだったらしい。
その中で生き残り、その中で成果をあげた彼らが小隊として機能した期間は、実際のところ短い。およそ1年である。
その期間内で功績を認められた流氷　ヒョウガは次期火影へと推薦され、バルゴとミゾレは暗部へと配属される。
出来すぎの話だ。
誰かが裏で糸を引いているように思えてならない。
誰であろうと、構わない。
おれは、おれの目的を達するだけだ。
おれは、狢（むじな）だ。
人を化かし、自分をも化かす。
そうして『本当』へと辿りつく。
そう。真実すらも化かして……。

忍者、異国で死す　1

真っ暗な空間に、その男は居た。
頭上を見上げると天井が大きく歪曲しており、そこがドーム形の施設であると理解ができる。
「ふむ。こんなところか」
本来、魔法や魔術を使用する為の魔方陣が描かれるはずの床には、一面に異国の文字が書かれ、刻まれていた。
中央には男の妹の娘である少女。
そして男が大事に抱えていた『魔道書』が少女の胸の上で、不気味な胎動を繰り返していた。
少女は見れば見るほどに、記憶の中の自分の妹とよく似ている。
少女の母親は、魔法使いだった。
ある目的を探求する魔法使いの家系に生まれた魔女。
彼女が不死の実験の最中の事故で吸血鬼化してしまった経緯について、一つだけ心当たりがある。
目の前で薬で眠らされている、この少女テセアラが原因だ。
出産した魔女は、急激にその力が失われていく。
妊娠前には扱えていた膨大な魔力が、出産を経験してしまった為に、持て余すようになり、暴走し暴発。
それは必然であり、原初の魔法使いが敷いた改竄不可能の不変のルールとかいうものに一抹の原因がある。
それはこの世に魔法使いが増えすぎないようにする為に。魔女の存在を増やさないように。
つまり、魔法の領域を損なわない為、という事にある。
固定概念否定の法則。まったく、厄介な法則を敷いたものだ。
おかげで魔法が魔法として確立できる領域は確保できるものの、それを使用し利用する自分たちの頭数が絶対的に少ない。
確かに、魔法使い同士での戦闘行為を避けるという意味ではやり

方としては正しい。
だが、いささか正し過ぎる。魔法使いとは本来、外法を操り、邪法を用いる人種だ。
そんな配慮や憂慮は不要だ。それこそ愚かであるとさえ思う。
悔しいが、口惜しいが、恨みがましいが、今はまだその法則に則って、『法』を使役しなければならない。
今はまだ……、な。
男が魔力の篭った瞳でテセアラを見つめる。
テセアラは自分の母親の魔力、才能を根こそぎ奪い取っているかのように思える程、夥しい量の魔力をか細い体内に留めている。
先日(むじな)狢に言った『呪いを掛けた理由』は、半分真実であった。
しかし、もう半分の目的はさすがに判らなかっただろう。
まぁいい。
残り『半分の目的』に取り掛かろう。
狢の、全てを見抜くと謳った真理の瞳でも。
ギムレットでも。
神でも悪魔でも見抜けなかっただろう。
この目的に。この意味に。
この魔道書により完成した自分の研究。結論。
そしてこの娘の母親が不死の研究をした先、我が妹の悲願の成就。
一族が生涯を掛けて研究していた二つの成果が、今自分の代で一つになる。
約束の刻は近い。
男の影がうねり、伸びるように一匹の蛇がテセアラを磨けて地面を這う。
その後を追うように何十何百の蛇がテセアラへと這い寄り、少女の小さな体躯をあっという間に覆い隠す。
ドクン、と手に持つ魔道書が大きく胎動する。
紫色の光が闇から浮き出るように妖しく輝く。
落ち着け。

まだその時ではない。
時はまだ満ちない。
我が魔力が最も高まる時。
満月の夜に。
月狂いの夜に。
我が人生最大の魔力を以って、生涯最高の魔法理論を構築し、『お前』を完全なモノにしてやろう。
「輪廻の輪からの逸脱。法則の支配……」
言葉が形を成すならば、ぼんやりと雲のように曖昧な弱々しさで、自らの目的を呟く。
暗闇に月のように金色に輝く爬虫類のような二つの瞳が写真立ての中の女を見つめる。
少女の母親は、相も変わらず穏やかな笑みをこちらに向けていた。

忍者、異国で死す　2

「お母さん」
丸っこい、金髪の頭をした少年は、そう言った。
自分も当然のように、自然にその少年を抱き上げる。
優しく。
愛しく。
まるで、力を加えれば砕けてしまうような柔らかい体を、すくい上げるように持ち上げる。
少年の体重は軽く、それでいて自分の両腕に掛かる生命の感触は、とても重い。
その少年が自分の顔をまじまじと見つめている。
顔の作りの目鼻は自分に、口と耳の形はどっかの誰かにそっくりだ。
少年の黒々とした瞳が自分を捉えている。おそらく少年から見ても同様であろう。
何だか少し照れる。
照れ隠しのつもりで口を横に開き、「いーっ」と言ってみせると、それが嬉しいのか頬にえくぼを作り、笑った。
自分もそれに釣られて笑顔になる。
幸せな時間。
理解している。
それが、夢であるという事をミゾレは理解していた。
何の前触れも無く、それは醒めてしまった。
音も無く、光も無く。
もう少し夢を見続けていたいという願望は、もう叶わない。
しかし、子宮（たいない）から感じる新たな生命の息吹が、確かな胎動が、さっきまでの夢がこれから始まるという事を告げる、鐘の音のように感じた。

夢の続きは、現実へと繋がる。
静かに自分の腹に手を当てる。
「あんたは男の子かい……」
まだ名も無い自分の子供に語りかける事ができる幸せは女だけのものだ。
女というだけで色々と苦労しているんだから、これくらい一人占めしたってバチは当たるまい。
暗がりで横を見ると、夢の中の少年の口と耳の形の『原因』が、寝息すら立てずに静かに眠っている。
ちょっとした悪戯を思いつく。
形の良い鼻をくにっ、と摘んでみた。
「……。んん……」
隙だらけだよ、ばーか。
そんな悪態が通じてしまったのか、自分から顔を背け仰向けに寝てしまった。
布団の隙間から見えた、腹から背中にかけた傷が痛々しい。
ギムレットと戦ってから一週間ほど経過したが、傷はほぼ完治しているようだ。
『ほぼ』というのは無論、消えない傷痕のことを指す。
相変わらず奈良一族の傷薬は良く効く。いや、効き過ぎるくらいだ。
死者の傷も治せるぜ、と豪語した当主の言葉はあながち嘘では無いのかもしれない。
窓を覆っていた夜の闇が、いつのまにか紺色になっている事に気が付いた。
もうすぐ夜が明ける。
朝が来る。
身体を廻るチャクラの量は次第に少なくなり、やがて戦闘は困難となるだろう。
まだだ。

あと少しだけ待って。
全てが片付いたら、やるべき事を終えたら、その時は精一杯の愛情を、『あなた』に向けてあげるから。
あなたを、育んであげるから。
だから。
だから、それまで待って。
気持ちが通じたのか、心臓の鼓動とは違うトクンという胎動で、腹の子供が応えられた気がした。
この子はきっと良い子に育つだろう。
自分に似て。
……。
自虐的な冗談に、失笑で頬が緩む。
それで決意が固まった。
さて、今夜は満月だ。
禁術書を封印する術を使用するのに、最も適した日。
大蛇丸。
過去に木ノ葉の里を窮地に追い込み、自分の先祖にも深く関わる因縁の蛇神。
先祖の因縁はこの手で、自分の代で、完全に断ち切る。
この遠い異国の地で、必ず決着を付ける。
ミゾレは強く心に誓った。

忍者、異国で死す　3

倫敦大学連合の敷地内にある、赤いレンガ造りの施設。
学生や関係者たちは、その施設を朱(あけ)の塔と呼ぶ。
その塔の地下には広大な空洞があり、そこがまさか魔術を使用する為の空間であるとは誰も思わない。
今にも雨が降り出しそうな曇天が空を覆っている。
少し離れた高い建物から、決戦の地を見下ろす者達が居た。
「バルゴ、準備はいい？」
ミゾレが腰に携えた長い刀に手を置く。
草薙の剣。そのレプリカ。ミゾレの得意な雷遁系の忍術との相性が抜群に良いとされる特別な金属を用いて特注した業物。
かつての先祖も同じような一振りを腰に携えていたらしいが、先祖も自分と同じように長刀を選ぶ辺り、戦闘理論は同じ領域に達していた事が伺える。
「抜かりは無い。ギムレット、お前はどうだ？」
バルゴが手甲の裾を掴み、馴染ませるように握りを繰り返す。
忍術、幻術ともに里のトップレベルのバルゴではあるが、しかしその本質は体術にある。
それは弛まぬ研鑽の結果。厳しい修練の成せる業。
忍術すらも凌駕してしまう蒼き炎。
「バッチリでさ。テセアラを助けてあの野郎をぶん殴ってやりますよ」
ギムレットがライフルのボルトハンドルをガチャリと引く。
いつでも撃てる準備が完了したという無言の意思表示。
銀に輝くライフルよりもその目は鋭い。
ギムレットの瞳には地下深く、下卑たる笑みを浮かべる魔法使いの姿が映っているようで、眼光はまさに獲物を目の前にした猟犬そのものだった。

鈍く光る刃のような眼差しに、おそらく自分も同様なのだろうという妙な親近感を覚える。
「ところで、お前の舌にあった『呪い』はどうなった？」
呪い。呪印。バルゴはギムレットのそれを『マルコシアスの呪印』と呼んでいた。
印を付けた者の居場所を話すと、呪いにより舌を噛み切ってしまう魔法使いの保険。
「ああ、あれですかい。ほら、この通り」
ギムレットが「べぇ」と舌を出す。
しかしそこには、前回見た時のような幾何学模様の魔方陣は無い。
バルゴの頭に？が浮かぶ。
「呪いに割く魔力を惜しんだのか何なのかは不明ですがね。まぁ、綺麗に消えてくれたんで良しとしましょうや」
「……」
思い当たる節はある事にはある。
呪いというのは掛ける対象が存在しなければ効力を発揮しない。
種類にもよるが、舌程度に掛かる呪いだ。効力は『対象が生きている限り』でしかないのだろう。
そしてギムレットは仮死とはいえ、一度死んでいる。
狢（むじな）、いやヒオリにより千本で首を二箇所穿たれた時に呪いは対象が死亡したと判断し、消滅。
結果的にギムレットは生きていたとは言え、効力が『存在し続ける迄』では無いため、以後は効力を失ったという事なのだろう。
ヒオリの狙いはこれか？一体何のために？
今考えても答えはでないのは明白。
ヒオリは自らを狢と名乗った。
その本質は『化かす事』にある。
何が嘘で、何が真実なのか。それを知る者はヒオリ本人のみである。
再び相まみえる時にこそ真実が白日に晒されるのだろう。

「旦那。奥さん。俺ぁ先回りして別ルートから進入します。御武運を」
「あぁ。お前もな」
「あたし達も後から行くわ」
ギムレットが了解の意を込めた親指を差し出す。
高所から身軽に飛び降り、民家の屋根へと着地する。
そのまま音も無く走り去り、やがて姿が見えなくなってしまった。
「……」
「……」
冷たい風が後に残された二人の間に吹きすさぶ。
戦いを前に緊張しチャクラがみなぎっている身体に、ひんやりとした風の感触は心地いい。
「……そうだ。バルゴ、知ってた？」
「何をだ？」
ふいにミゾレが口を開く。
その表情は決戦前には似つかわしくない程穏やかだ。
「実はね、私たちさ、里ではもう結婚した事になってるんだよ。火影の陰謀でね」
「……。は？」
バルゴがポカンという擬音が相応しいくらいに間抜けな表情をする。
バルゴのこんな表情を二度も見たのは自分だけだという意味不明な優越感がミゾレを支配する。
四ヶ月前の里での出来事の始終を話すと、バルゴが大きなため息とともにミゾレと向き合った。
「びっくりした？」
イタズラがばれた子供のように笑うミゾレ。
それに釣られ、何かが吹っ切れたかのようにバルゴも同様に笑い出す。
「ミゾレ」

「何よ？」
「愛してるよ」

突然の愛の告白に今度はミゾレが真っ赤になり言葉を失う。
まさかこんな辺ぴな場所で愛を囁かれるとは思わなかった為か、それは完全な不意打ちとなった。
ミゾレの腰に手を当て、そっと自分に引き寄せる。
バルゴの顔が眼前に迫ってきたと思った瞬間、唇が重なった。
短く、それでいて長い、キス。
倫敦（ロンドン）の街が霞みに覆われ、人々の距離感を曖昧にしてしまっていても触れ合っている確かな絆。
別れを惜しむかのように、ゆっくりとお互いの距離が離れる。
バルゴの中指がミゾレの額を優しくなぞる。

「バルゴ……。何をしたの……？」
急激に身体の力が抜け、崩れるように倒れる。もはや立っている事すら敵わない。
ミゾレを襲うのは、眠気だった。
「今の話で心中が決まったよ。魔法使いとの決着は俺が付ける。お前は家で休んでいろ」
風遁　流音香炉（りゅういんこうろ）
本来は幻術を掛ける際に使用するような催眠術に近い性質を持つ術。
決して強くはない初歩的な術にミゾレは簡単に掛かってしまった。
バルゴの服の裾を掴み、懸命に眠るまいと睡魔と戦う。
「……どうして……」
今にも途切れそうな意識を総動員して振り絞った一言。

「妻と子供を守るのが夫の役目だからな」
目を閉じ、完全に寝てしまったミゾレにバルゴの言葉が届いたかは判らない。
空を見上げると、たらふく雨を蓄えた灰色の雲が今にも堕ちてきそうだ。
起きたらミゾレは怒るだろう。
それでもいい。
この『二人』が無事であるならば。
「帰ってきたら、里で三人で暮らそう」
バルゴの腕の中で眠るミゾレの顔は彫刻のように美しく、とても安らかだった。

忍者、異国で死す　4

「何だこりゃぁ……」
倫敦大学連合。その敷地内に足を踏み入れたギムレットが感じた第一印象だ。
所々に人が生気を失い倒れている。
辺りの景色があまりに濃密な魔力により紫色を帯びているように見える。
全身を襲う吐き気と焦燥感。
この嫌悪感の中心にテセアラは居る。
間違いない、と予感は確信に変わる。
焦る気持ちをどうにか落ち着け、レンガ造りの建物『朱の塔』を目指す。
この人間が累々と横たわる風景は何処かで見た記憶がある。
いや、忘れようも無い。
戦場だ。
生物の息吹が感じられぬこの地はまさに戦場（いくさば）。
「ジャックの野郎をぶん殴る理由が一つ増えたな」
無関係な人間を巻き込んだ落とし前は必ず付ける。
いつの間にか失っていた、己の正義に忠実になるという精神が今のギムレットを突き動かしていた。
これもあの旦那のおかげかねぇ、などと不敵な笑みを浮かべる。
今の自分は誰の傀儡では無い。ただ己が目的の為だけに動ける事の何たる素晴らしさ。
心なしか、構えるライフルも喜んでいるように見えるのが不思議だった。
鏡のようなライフルの銃身がレンガ造りの建物を写し出す。
深呼吸をする。
落ち着け。ここは地獄の入り口だ。

何が出てきても不思議ではない。
鋼鉄製の分厚い扉に手を掛けた時、バルゴから無線が入った。
《首尾はどうだ？》
「上々でさ。今敵の根城のまん前に居ます。……奥さんはどうしましたい？」
《強制的ではあるが、予定通り眠らせてきた》
後が怖いよ、とボソリと呟くのが聞こえ、声を立てずに笑う。
《俺も今からそちらへ向かう。無茶はするなよ》
「了解でさ」
短く、事務的に。必要最低限の言葉しか発しないバルゴとの通信。
それがいかにもバルゴらしい。
気を取り直して鋼鉄製の分厚い扉に手を掛ける。
重々しい解放音と共に室内から流れてくる嫌な気配は外の比ではない。
外に倒れている連中はこの毒気に中(あ)てられたのかと、すぐに理解ができる。
照明は無く、見渡すとそこは書庫のような雰囲気で少しかび臭い。
まったく音の無い静かな空間。
しかし、足元から漂う冷たい空気はギムレットにはまるで地獄の沼地にいるかのような錯覚を覚えさせた。
仮に、もしここが本当に地獄の沼地だとすると三つの頭を持つ番犬が居るハズだ。
三頭を持つ番犬＞ケルベロス＜
だが、ギムレットの予測とは裏腹に、物陰から姿を現したのは一匹の蛇だった。
輪郭が影のようにぼやけて定まらない。影絵のような黒蛇。
蛇が自分に背を向け、身をくねらせながら奥へ移動し、やがて完全に影と同化してしまった。
誰か、居る……。
ようやく闇に慣れた瞳が写したのは人影。

体格から、どうやら女であると推測ができる。
足を引きずる音が聞こえる。
ずる。
ずる。
ずる。
通気窓から差し込む弱々しい外の光が、『その女』の姿を浮き上がらせるが顔は長い髪が邪魔をしてよく見えない。
でも、どこかで見た顔だ。
ギムレットの脳裏に古い記憶が甦る。
思い出した。
ギムレットの目が大きく開かれる。
なぜ、この女はここに居るのだ。
この女は死んだはずだ。
確かに、殺したはずだ。
テセアラを拾った、あの日に。
それまでの自分を捨てたあの時に。
忘れるはずがない。
長く赤い髪。
ルビーのように赤い瞳。
美しき吸血鬼。
テセアラの、母親。
「おいおい……、こりゃぁ、何の冗談だよ……」
ギムレットの頬を一筋の汗が流れる。
女が歩みを進める度に、ギムレットが同様に後退する。
夢でも、幻でも、一番逢いたくなかった人物が目の前に居た。
幻術の類でもなく、ただ本当に、実態として、そこに居た。
やめろ。
来るな。
来ないでくれ。
女が歩みを進める度に、責められているような気がした。

あの娘から母親(じぶん)を奪っておいて、父親ごっこ？
笑わせるな。
愛しい者の眼前で命を奪われる無念さを知れ。
もう、やめろ。
お願いだ、来るな。
頼むから、来ないでくれ。
ドン、と背中が鋼鉄の扉にぶつかる。
後が無くなってしまった。
まるで全力疾走したかのように全身から汗が流れ、息が荒れる。
とてつもない疲労感に見舞われる。
自らの過ちを目の前にギムレットの精神が折れそうになる。
女がいつの間にか眼前に迫っていた。
振り上げられた鋼鉄の爪を無様に転げながら避ける。
転がるように転身し、大きく間を空ける。
「はぁ……、はぁ……」
幻ではない。偽者でもない。
本物だ。
抹殺者の嗅覚がそう告げる。
荒れる呼吸を制してモーゼルを構える。
迷いが生じドコを狙っていいか思考が定まらないまま、取り合えず引き金を引く。
女がゆらりと揺れたかたと思うと銃弾は残像をすり抜けてしまった。
外した？
そう思う頃にはすでに身体は次弾を装填している。
無意識の行動に自分でも驚きを覚えながら女を目で追う。
右後方へと迫っていた鋭い爪をギリギリで避ける。
間合いを空ける為に威嚇の意味を含めた発砲をする。
広い場では不利と判断したギムレットは古書が立ち並ぶ本棚へと姿を消す事にした。

本棚がまるで迷宮のように壁として女の前に立ちふさがる。
気が付いた時にはすでにギムレットの姿を見失ってしまった。
女が苛立ちながら本棚という壁をあちこちに徘徊する。
女が通り過ぎた本棚の上で、完全に気を消したギムレットが静かにライフルを胸に抱え仰向けに横たわる。
銃を構える自分に問う。
本当に撃てるのか？
いや、違う。
本当に当てられるのか？
これも違う。
本当にもう一度、テセアラの母親を殺せるのか？
そうだ。これが今自分が抱えているわだかまりの正体だ。
音を立てずにゆっくりとうつ伏せに体勢を変え、ひんやりと冷たいライフルを構える。
緊張する。喉が渇く。引き金を引く指が針金を仕込まれているかのように硬い。
可も否もなければ是も非もない。
だが、しかたがない。
答えは出ず、ただ撃つ事だけに専念する。
発砲。
直線的に言えば右肩に命中したであろう弾道は念力のような不可視の力で操られた分厚い本の壁により遮られてしまった。
バサバサと数百の本が女を中心に渦を巻く。
その様子はまるで、トグロを巻く蛇を連想させる。
ギムレットが装備している聖銀製の鎖帷子は『魔力で構成されているモノ』には有効だが、『魔力で操作されている物体』には作用しない。
「おいおい……、本はそんな使い方をするもんじゃぁねーだろーがよ……」
本の蛇がギムレットを睨む。

女の瞳が大きく輝いたと思った瞬間、銃弾のような速度で分厚い本がギムレットに襲い掛かる。
的確に限りなく冷静に、一冊一冊を避ける。
しかし、開かれた本から破れ出る頁（ページ）の一枚一枚が剃刀のような鋭さで再度ギムレットに迫り来る。
気が付けば四方を完全に包囲されていた。
まるで花びらがひらひらと舞っているような錯覚。
ギムレットの足が止まる。
回避、不可。
女が右手を頭上に掲げる。
そして罪人の首を切り落とすギロチンのように、まっすぐに振り下ろす。
銃弾のような速度の分厚い本が、剃刀のような切れ味の頁が、中心のギムレットに襲い掛かった。
左側頭部に直撃し、頭にズキリと鈍い痛みと共に出血を伴う。
右肘を強打し、腕が痺れライフルを手放してしまった。
腰を、足を、背中を腹を。
全身を打ち付けられ、顔、手など肌が露出した部分は切り刻まれてしまった。
いつ倒れてもおかしくないような傷。
女がゆっくりと歩みをこちらに進める。
肋骨を通して肺に蓄積された鈍い痛みのせいで呼吸が荒くなり、胃に溜まった血液が逆流してくる。
「テセアラ。ごめん。もう一度お前の母親を殺すなんて、俺には……無理だ」
思考が停止。身体が重くなり膝からガクリと崩れる。
全てを諦めたかのように、瞳を、閉じた。

忍者、異国で死す　5

まるで閉幕した劇場のように静まり返った倫敦（ロンドン）の街を一人の忍が空を駆ける。
夜の闇を染めるオレンジ色の街灯も今日ばかりは頼りなく感じる。
街全体を覆う寒気。その中心にバルゴは向かっていた。
倫敦大学連合。市街の中央に位置する学びの最高学府。
その探究心の果てに辿り着いた外法。
人が手にしてはいけない禁断の領域に足を踏み入れた者に裁きを下す。
前方に何者かの気配を感じたバルゴの足がピタリと止まる。
人間独特の負の感情を孕んだ視線を送る者。
「ヒオリ……。いや、狢か」
それはどんな胸中なのか。ヒオリは狢（むじな）の面を付け、バルゴと相対する。
建物の屋上。冷たい空虚の風が両者の間に吹きすさぶ。
「星空　バルゴ。大蛇丸の復活を妨げさせるワケにはいかない」
「お前が誰に、どんな任務を言い渡されたか興味はあるが……。ここは押し通る」
「……通すと思いますか？」
「通るさ」
両者がまったく同時に動き出す。
クナイを逆手に構えるバルゴとは対照的に狢は徒手空拳で相手に挑む。
日向の体術。
それは木ノ葉流の体術と本質的に異なり、日向の血継限界である『白眼』を最大限に行使できるように編み出された秘伝。
両の掌を相手に見せるように構える。
バルゴのクナイによる一閃を筋肉の動きで、関節の動きで完全に

見切り、それを滑らかにいなす。
体術の基本は次の動きへ繋げる事にある。
いなされ、崩れた体重バランスを利用し左足による回し蹴りを繰り出す。
白眼により冷静にバルゴの動きを把握した狢がバルゴの足刀を左手で受け止める。
チャクラを纏った右の掌による掌底がバルゴの腹部をめがけ襲い掛かる。
柔拳法　獣歯餓狼（じゅうはがろう）
決まれば相手の腹部を文字通り『削り取る』獣の牙。
しかし、鋭く重いバルゴの足刀がそれを赦さない。
鍛え抜かれた筋力から生み出された遠心力により狢の身体が遥か後方へと強く叩きつけられた。
硬い石の壁に全身を強打する。
これは予想外だ。
白眼は相手の動きは見える。捕らえられる。しかし、形の無い『威力』までは見る事はできない。
今の初撃で理解した。
体術では、やはり勝てない。
狢が仮面の奥でニヤリと哂う。
両腕をダラリとし柔拳法の構えを解く。両腕が完全にローブに隠れてしまっている。
「バルゴ様。日向が使う柔拳法は、実は二種類あるというのをご存知ですか……？」
バルゴは狢の意味深の問い掛けに答えずとも怪訝な面持ちで相手の出方を伺う。
「一つは本家や分家の者が使う柔拳法。これは主に守りを主体としております」
両腕がローブで隠れてしまっている状態で狢がバルゴに迫り来る。
掌を相手に見せる型は、先ほどとまったく変わらない。

何が二種類だ。
コケ脅しにもほどがある。
バルゴが狢の動きを見切り、チャクラを纏った拳撃を浴びせようと前のめりに構える。
狢がバルゴの間合いより少し離れた時点で右腕を大きく伸ばす。
バルゴが袖の奥に鈍く光る『何か』を捕らえる。
気付いた時には無意識に身体が後方へ跳び、頭を含む上半身を両腕でガードしていた。
刹那、無数の槍が剣がバルゴの両腕に突き刺さる。
「これは柔拳法　暗。日向の分家の中でも一部の者しか習得していない技です」
敵の死角から繰り出される様々な暗器。
身体の至るところに武器口寄せの呪印を施している事は容易に想像できる。
タネは見えた。しかし、ドコに何が仕掛けられているか判らない以上は無闇には近づけない。
濃い紫色の夜空に月が煌々としている。
時間が、無い。
バルゴが両腕に傷を負い苦悶の表情を浮かべる。
「声一つ出しませんか。流石です。……ですが！」
戦いの流れを掴んだ狢の連撃。
その流麗たる動きの一つ一つに暗器という殺意がバルゴに迫る。
しかし、そのどれもがバルゴを捕らえる事は出来ないでいた。
どんなに虚を突こうとも、数多の死線を潜り抜け構築された戦闘理論が、未来予測が狢の全てを凌駕する。
焦る狢の顔面にバルゴの強烈な右回し蹴りが炸裂する。
左側面に綺麗に入った足刀により狢の仮面にバキリとヒビが入る。
圧倒的な実力差を、今更になって思い知る。
気が付けば自分の身体が重く感じる。
いや、自分の周りの空気が物理的に重い。

バルゴが二本の指を立て狢を睨む。
「風遁　風縛鎖の術」
「まさか……」
噂に聞いた事がある。
周辺の限定された空間をチャクラによって押し固める忍術。
対象となった者は密度を増した空気に捕らえられ、まるで水中に居るかのように身体の自由が利かなくなるという。
「半径２０メートルの空間の空気に俺のチャクラを練り込んだ。今から限定空間の内部を真空にして、お前を……殺す」
そんな事も出来るのか、と驚嘆する。
狢の攻撃をさけながらも冷静に次の状況を想定し、複雑な印を紡ぐ。
やはりこの男とまっとうに戦うのは絶望的に不利である事を再認識する。
狢を『殺す』と言い放ったバルゴの表情に何の変化も伺いしれない。
バルゴは既に狢を敵として見定めている。
敵に一切の情けを不要とする忍の掟の体現者。
バルゴが殺すと言い切った以上、自分の死は免れない。
危機的状況。絶体絶命。あと数分もしない内に自分の命運は尽きるというのに、なぜだろう？不思議と、笑いがこみ上げてくる。
ヒオリから狢の仮面が割れ落ちる。
女のような素顔が現れる。頬に当たる冷たい空気が少しだけ気持ちいい。
「何がおかしい？」
バルゴが冷淡な瞳で狢に問う。
その問いに、自分はやはり笑っているのかと認識する。
「……色々ですよ。色々な思いが交錯して、表情が『笑う』んです」
バルゴの表情は変わらない。
「……狢。お前に問う。なぜギムレットを助けた？」

「教えません」
「状況を理解しているのか……？」
「十分に。でも、イヤです」
バルゴが狢の首をガシリと掴む。術による窒息を待たずして首の骨を折るような締め付け。
「バルゴ様……」
狢がヒヨリの声色で苦しそうな声を出す。
記憶の中のヒヨリとヒオリが重なりバルゴの締め付けが緩む。
苦し紛れの作戦だったが、その効果は思いのほか成果を出した。
集中が切れ術が解けたのだろう。周囲を支配していた重たい空気が途端に軽くなる。
一瞬のスキを付き、バルゴを蹴り飛ばし間合いを空ける。
締め付けられた首にはくっきりとバルゴの指の跡が残っている。
肩で呼吸をしながら新鮮な酸素をたらふく肺へと送り込む。
「声を発するのも辛いですが、まぁいいでしょう。バルゴ様。今から真実（ほんとう）をお伝えします」
狢が首筋を擦りながら不敵な笑みを浮かべる。
「今回の任務。私は、あなた達より一ヶ月も前に仰せつかっていましたよ。火影からね」
「……なに？」
「あなた達はねぇ、嵌められたんですよ！あの火影にねぇ！」
狢の高笑いが辺りに響く。
バルゴの視界がぐにゃりと歪む。
「く……っ」
身体がフラつき足元が定まらない。
「ようやく効いてきましたか。おれの暗器には全て毒が仕込んであったんですよ」
卑怯ではない。相手を必殺するにあたり、僅かな切り口でも効果を発する『毒』を用いる事は忍として上等手段である。
「姉さんと同じ毒で死ね。星空　バルゴ」

霞む視界にヒオリが映る。
月による逆光のせいだろうか。バルゴの目には、ヒヨリがそこに居るかのように思えた。

忍者、異国で死す　6

埃っぽい空気とともに本独特のかびくさい臭いが、流れた自分の血と一緒にギムレットの鼻腔をくすぐる。
愛娘　テセアラを助ける為に勇んで来た自分を待ち構えていたのは、かつて自分が殺したテセアラの母親だった。
その姿に相違は無い。あの時、あの場所で殺した時の記憶のままの美しい『吸血鬼』だった。
精神的に追い詰められ、追い込まれる感覚。
ささやかな抵抗を試みるも迷いが生じている精神状態で敵う相手ではない。
心のどこかで予想していた通りの結果になった。
今、まさに分厚い本と刃のように鋭い頁の切れ端に四方を囲まれ、数刻と経たないうちに自分は死ぬ。
殺される。
あとはただこの場に『ギムレット』だった死体が残るだけだ。
それでこの女の気が済むのなら。
深いため息とともに自ら視界を閉じる。
しかし、いつまで経っても変化はない。
それどころかバサバサと本やページの切れ端が落ちる音がする。
何事かと思い、ゆっくりと目を開ける。
開けた視界には、相変わらず美しい女がこちらを見据えていた。
「どうした……？殺せよ」
投げ捨てるように自分の覚悟を口にする。
女のルビーのように赤い瞳が闇の中で炎のように光っている。
だが、感情は読み取れない。
怒りで燃えているワケでもなく、恨みという感情も感じ取れない。
一つ、強引に心当たりを上げるなら、それは『悲しみ』の感情。
なぜ、この局面でそんな表情をするのか、ギムレットには理解が

出来ない。
女の口が僅かに開く。
呼吸をする為に肺に空気を送り込んだのだろうか。
違う。ギムレットは直感的にそう思った。
この女は言葉を発する為に肺に空気を送り込んだのだ。
何のために？
恨み言を言うのであれば、そんな目はしないだろう。
まるで、死刑を宣告される受刑者のような気持ちで、女の言葉を、待った。

「……あの娘は、元気ですか……？」

しんとした空気に、鈴の音のように響いた女の言葉。
自分の聞き間違いでないならば。
それは殺した罪に対する恨みではなかった。
目の前に『自分の仇』が居る状況で、娘の安否を気遣う。
これが『母親』というものなのだろうか。
一筋の涙がギムレットの頬を伝う。
「私の赤ちゃんは……、元気なのですか……？」
この女の記憶は、まだテセアラが赤ん坊の時のまま時間が停止している。
「あの娘は、テセアラと名付けた。あんたの名前を付けた。俺の不注意で車椅子生活となっちまったが、それでも、よく笑う元気で、優しい子供に育ってくれた」
こみ上げる感情に上手く自分の想いを言葉に変える事が出来ない。
しかし、そんな拙い言葉でも想いは伝わったのか、女は陰りのある笑顔を作った。
「……ありがとうございます……」
女が深々と頭を下げる。
それを見たギムレットも上を向き、涙が流れるのを必死に抑える。

両者の間にあるのは、テセアラという愛娘に対する温かな感情だった。
女が顔を上げる。
その表情は何かを覚悟しているかのように険しい。
「抹殺者の方。お願いがあります。その聖銃で、私の頭を撃ち抜いて下さい」
「どういう事だ？」
「私は既に滅んだ身。魔法使いの兄は異国の術を用いて、『私だったモノ』をこの場にとどめているだけにすぎません。現に生前あった吸血衝動は、今は皆無です。身体の構造はおそらく人間だった時に近いのでしょう。」
「どういう事だ？」
「不老不死を専門としてきた私も、流石に異国の術式を見ない事には確証を得る事はできませんが、おそらく、生きた人間を媒介にして、死者の姿見を形成しているのだと思われます」
ますますギムレットには理解が出来なくなる。
「今は兄の集中が私ではなく、別のモノへ向いている為、ある程度の自由はききますが、時間の問題です。私の頭の中に、攻撃命令を書き記した術札が埋め込まれています。それを、銀の弾丸で、……撃ち抜いて……」
「……テセアラに……。あの娘には会わないのか……」
そんな事は聞かなくても判る。
自分の子供に会いたくない親などいない。
だが、目の前の女は既に死人。
本来この場に居てはいけない存在である。
女は悲しそうな笑顔で首を横に振る。
赤い長い髪が左右に揺れる。
想像を絶する覚悟がギムレットに伝わる。
この女は判っているのだ。
何が娘にとって最善であるかを、理解しているのだ。

聡明な女性だ。
ギムレットは心からそう感じた。
「娘の事を、宜しくお願い致します」
再びギムレットが上を向く。
先ほどまで流れていた涙が別の涙となって、瞼に溜まる。
この女を、テセアラの母親を、こんな形でしか救えない自分が、たまらなく悔しかった。
「あなたは、優しい方ですね……」
娘を拾ってくれたのが、あなたで良かった。
そんな呟きが聞こえた気がした。
聖銃を持つ手に力が入る。
ゆっくりと銃を構える。
この女を殺す事に、もう躊躇いは、無い。
「天に召します我が神よ。大いなる愛を以ってかの者に慈悲を。哀れなる魂に救済を。まことかくありしきや（アーメン）」
久しく唱えていなかった聖文は、まるで昨日も読み上げていたかのようによどみなく言う事が出来た。
言い終わるのと同時に引き金を引く。
引き金を引く刹那がどうしようもなく長く感じた。
『ありがとう』
吼え猛る獣のような銃声の間に、清く優しい声が聞こえた気がした。

女が言った通り異国の文字で綴られた札が、塵となった身体から出てきた。
生贄となった人物は既に白骨化してしまい、どこの誰であったかは皆目検討がつかない。
しかし、腰周りの骨格から男性のモノである事が推測される。

そしておそらく自分より大きな体格であろうが、女の身体付きに合わせるように所々が粉々に砕けている。
他人の命を玩具のように扱う魔法使いに、行き場の無い怒りの思いが爆発する。
「ジャァック！てめぇのドタマに銀の弾丸をぶち込んでやるからな！首を洗って待ってやがれ！」
ギムレットの怒号がかび臭い室内に響き渡った。

忍者、異国で死す　7

身体が燃えるように熱い。
神経の一本一本が焼き切れ、切断されるかのような激痛が全身を襲う。
嘔吐感こそ無いにすれ、指を動かす事すら躊躇われる倦怠感が纏わりついて離れない。
これが、ヒヨリが飲んだ毒の感覚か。
絶命寸前の状況でバルゴは、そんな事を考えていた。
倒れ、這いつくばり、意識がまどろみと現実の境を行き来している。
いっそこの倦怠感に身を任せてしまった方がどんなに楽だろうか。
そして、ヒヨリのもとに逝けたら。

馬鹿を言うな。
馬鹿を思うな。

甘えた自分の心に喝を入れる。
仮に自分が死んだところで行き着く先は地獄。
自分は既に人を殺しすぎた。
勝手に人の命を奪っておいて自分だけ安らぎを得るのは都合が良すぎる。
それに、そんな自分にヒヨリはたぶん、微笑んではくれない。
「星空　バルゴ。まだ動けるか……。一刺しで致死量に値するくらいの濃度を塗っておいたのだが。流石と言わざるを得ないな」
喉が漕げるように熱いせいで呼吸が上手くできず、肩で呼吸をする。
右耳が膜を張っているかのように音が聞き取りづらい。

それでも、指はまだ動く。
考えるだけの意識は、ある。
まだ、生きている。
諦めて、なるものか。
星空　バルゴという忍をここまで押し上げた不屈のど根性に火が灯る。

『タッテクダサイ』

懐かしい声が聞こえた気がして、思わずはっとする。
二度と聞く事は出来ないと思っていた日向　ヒヨリの声だ。
だが、それが幻聴だったとしても、嬉しい。
『自分に立ち上がれ』という事か。
『過去のしがらみを断て』という事か。
どちらでもいい。今の自分には同じ事だ。
閉じかけたバルゴの瞳に、再び光が宿る。
ヘソの下にある丹田からチャクラが生まれ、溢れるのが解る。
それはグルリグルリと渦を巻き、全身を走るもう一つの神経、経絡系を満たす。
ありがとう、ヒヨリ。
いつも君には寸前で救われる。
毒により壊死しかけた肉体に鞭を打ち、膝を付きながら、ゆっくりと立ち上がる。
震える手で眼前に二本指を立てる。
「おれには、いつ死んでもおかしくないくらいの致命傷に見えるのに。そんな状況下でまだ戦おうとするなんて……。凄いよ。本当に凄いよ。星空　バルゴ。驚嘆に値する」
ヒオリが柔拳法の構えを取る。
毒による死を待つのをやめ、止めを刺す事にしたらしい。
表情にも決意が見られる。

狙うは柔拳法　八極式　『立地通天砲』。
顎下から突き上げるチャクラを纏った硬質の掌底により確実に頭蓋を突き抜け粉砕させる大技である。
険しい目つきでバルゴを睨む。
白眼が捕らえたバルゴの経絡系は通常では考えられないほどの速度で身体中を駆け巡っている。
「ごふっ……」
壊死した組織から血液が逆流し、バルゴの口から血が流れ出る。
まだだ。チャクラが足りない。
体内を冒している毒を、自らの治癒力で取り除くには、まだチャクラが足りない。
ならば増やせばいい。
全身の経絡系は１００パーセントに近い稼働率でチャクラを回転させている。
ならば限界を超えればいい。
自己制御（リミッター）を取り外せばいい。
チャクラが、雄雄しく猛る。
「八門遁甲、休門。……解放」
それが合図だった。
全身を廻るチャクラの量が爆発的に加速する。
圧倒的に水増しされたチャクラを生命エネルギーに変換し、返還する。
死んだ細胞の下から新しい細胞が生まれる。
全ての細胞（パーツ）を取り替えるかのような、ミクロレベルの『蘇生』がバルゴの体内で起こる。
「その手があったか……！させるか！」
焦るヒオリが必殺の掌打をバルゴに向ける。
蘇生されたばかりの鈍い身体で、顎下から伸びるヒオリの初撃をかわす。
先ほど同様、死角から暗器が出でる。

姿を現したのは大きな扇。
バルゴの眼前で即座に開き、視認範囲を制限する。
一瞬の隙を付き、分銅付きの鎖がバルゴの右足に蛇のように絡みつく。
「取った！」
鎖を大きく振り回し、遠心力の強力な力で硬い石の壁に叩きつけようとする。
「これで終わりだ！星空　バルゴ！」
渾身の力でバルゴを石の壁に叩きつける。
鋭角の角に叩きつけられ、轟音と共に爆砕する。
僅かな粉塵が晴れ、哀れな肉塊となったバルゴを目にする。

勝った。
里で火影に次ぐと言われる最強の忍者に勝利した。
姉の仇を討てた。
ヒオリの胸中に万感の想いが去来する。
「……カイコ様。任務を、達成しました……」
任務達成の安堵感から、思わず独り言が口に出てしまった。
しまった。と口に手を当てるが、もうこの場に誰も居ない。

「なるほど。やはりあの男の差し金か」

ヒオリの後方ではっきりと聞こえた『バルゴ』の声。
全身から冷や汗が出る。
なぜだ？
バルゴの死体は自分の目の前にあるのに、なぜ死人の声が聞こえる？
眼下の死体がボワンと、音を立てて消える。

「影分身というヤツだ。覚えておけ」

再び聞こえたバルゴの声にようやく反応したヒオリが長い髪を振り乱し、後方を見る。
そこには。
右手に収まりきらない大きさの光球を携えたバルゴがこちらを睨んでいた。
いつ分身を造った？
まさか扇でバルゴの死角を作ったあの一瞬で？
ありえない程の速度。判断力。
やはり、この男には敵わないのか。
ヒオリの白眼が、バルゴの右手の光球の正体を捉える。
チャクラの塊だった。
それも考えられない程の質量が圧縮され乱回転している。
まるで大型の台風がバルゴの手の中で踊るように、甲高い声を発している。
暴風に引き込まれるような強い力で足元が動かない。
避けろ、と脳が命令をする。
かわせ、と意識が命令をする。
だが、その美しい光に魅入られたかのように脳と意識の命令が拒絶される。
「『狢』、お前を殺す」
聞いた事がある。
荒れ狂うチャクラを超高度なチャクラコントロールで押し止める術を。
数ある忍術の中でも唯一、印を不要とする術。
何代か前の火影が最も得意とした術。
その名は――。
「螺旋丸！」
狂瀾怒濤（きょうらんどとう）の一撃。
暴走する龍のようなチャクラの塊がヒオリの腹部にめり込む。

その狂気の流れにまともに立つ事を許されず、きりもみしながら後方へ強く叩きつけられる。
たった一撃で全身の力が削られる。
木ノ葉忍術の『奥義』と呼ぶに相応しい威力。
これが、星空　バルゴという男の実力。
やはり、この男を目標にして正解だった。
ヒオリは薄れる意識の中、今の自分が笑っている事に気が付いた。

忍者、異国で死す　8

全身を包む倦怠感に身を任せて大の字で群雲を仰ぐ。
つい先程までは月が見えていたのと、ヒオリは思った。
移ろいやすい天候に自分という存在を重ねながら、目線を隣に移す。
「……気が付いたか？」
「星空　バルゴ……？どうして……」
夜の冷たい風が頬を撫でる。
心なしか心配そうにヒオリの顔を覗き込むバルゴに、何故自分を助けたかを問う。
ヒオリはバルゴの寂しそうに笑う表情にバルゴの心中を垣間見た気がした。
この男の心には、まだ姉　ヒヨリが息づいている。
そして今もなおこの男に微笑みかけ、支えている。
自分が今日まで追い求めた姉の面影は、星空　バルゴの中にあった。
そう、確信した。
「何をしているんですか。時間が、無いのでしょう？」
バルゴから目を逸らし、そっぽを向きながら悪態をつく。
それを姉と重なるバルゴへの照れ隠しであるというのは、ヒオリ自身まるで気が付かない感情だった。
「ヒヨリの弟を、放っておけるワケないだろう。それに、お前にやられた毒の解毒に１０分程度、時間を要していたんだ」
情報は磐石。動くなら必中。殺すなら必殺。
万全の準備で事を運ぶのは忍の心得の基本である。
「いい気味です。姉の気持ちを思い知って下さい」
「そうだな。死ぬ程に思い知ったよ。文字通り……な」
「下らない冗談ですね。反省して下さい。姉は、ヒヨリはあんたを

想って死んだんだから」
気だるい身体を無理やりに起こす。
腹部に穿たれた傷は、ほぼ完治していた。
硬い腹筋が張り裂け、盛大に血液を噴出した形跡は今も残っているのに。
一体誰が？は愚問だった。
そんな事を出来るのは、今この場においては星空　バルゴ、その人しか居ない。
恨みや妬みとは違う、自分でも理解不能な感情でバルゴを睨む。
「ヒヨリが居たら、助けろと言うと思ってな」
確かにヒヨリが居たら確実にそう切願するだろう。
強く、気高かった姉　ヒヨリは、忍として生きるには難しい程に、優しかった。
「……で、おれをどうするつもりだ？事が終わるまで拘束か？それともさっきの問いを拷問でもして吐かせるつもりか？」
投げやりとなった気持ちを吐き捨てるように言う。

パシン、と乾いた音が辺りに響いた。

ヒオリの右頬がじんじんと痛む。
叩かれた。
そう意識するのに、数秒の時間を要した。
鳩が豆鉄砲を喰らったような面持ちでバルゴを見つめ返す。
何故、自分は叩かれたのだ？
何故、自分は驚いているのだ？
何故。
星空　バルゴは、今にも泣きそうな表情をしているのだろ。
あの屈強な男が。
里で最強の一人として数えられる程の忍が。
自分の目標としている星空　バルゴが、自分なんかの為に、今に

も泣きそうになってくれている事が、嬉しくもあり、そんな表情をさせてしまった自分を、たまらなく咎めたい気持ちで一杯になった。
「俺の言いたい事は解るな？ヒオリ」
螺旋丸を当てる時、バルゴは言った。
「『狢』、お前を殺す」という言葉の意味を、今になってようやく思い知った。
この男は断ってくれたのだ。
暗部の忍、狢（むじな）という自分が科せられていた過去の呪縛を、『殺す』事により全てを清算してくれたのだ。
今の自分は姉の想い人に嫉妬する狢ではなく、姉の死を胸に抱く日向　ヒオリなのだ。
ようやくバルゴの思いが理解でき、同時に物事を整理しきり、頭がすっきりした気持ちになる。
そう思うと目じりが熱くなるのを感じた。
悲しく睨むバルゴの視線に耐え切れなくなり、瞳を足元に向ける。
その仕草は、他人から見れば『頷き』に見える。
どう解釈されてもいい。
ただ一言。
「……ごめん、なさい……」
この一言が、バルゴに通じればいい。
「今まで辛く当たって悪かったな。ヒオリ」
バルゴの顔がまともに見る事ができない。
今、バルゴの顔を見ると恐らく自分の目からは涙がこぼれるだろう。
流石にそれだけは、誰にも見せたくない。何か話題を変えなくては。
「……なぜおれが、あの汚いおっさんを殺さなかったか聞いていましたよね？」
随分な言い草である。
汚いおっさんとはギムレットの事であろう。

「星空　バルゴ。自動細工人形って知っていますか？」
「ネジ巻き式の人形の事だろう？それがどうした」
自動細工人形。自動人形。機械人形。からくり人形。
様々な呼び方はあるがＡｕｔｏｍａｔａ（オートマタ）　その言語はａｕｔｏｍａｔｏｓ　すなわち『自らの意思で行動せしもの』。
「おれの言う自動細工人形はね、例えば、『風の国』のからくり人形や傀儡人形のような精巧なモノを指します」
「それほどの規模のモノ……。まさか」
「はい。ギムレットが持っていたあのライフルとかいう筒。それに封じられていた甲冑騎士の事です」
「あれは強力だったな。敵として二度は拝みたくない代物だ」
バルゴが以前に指された箇所を撫でるように擦る。
既に塞がった傷ではあるが、あの神々しい銀色の甲冑を思い出すだけで、塞がった箇所が疼く。
「この国の宗教組織、『蒼き薔薇の十字会』では、あんな兵器を多数管理しています。おれが火影から仰せつかった任務はね、それらの奪取。及び製造方法の特定です」
つまり、その足がかりとなるギムレットはさながら、その身に糸を付けられた蜂。
まだギムレットが『蒼き薔薇の十字会』に籍を置いている以上、必ず組織と接触する。
それを見越してギムレットを殺さないでおいた、という事だ。
そうなるとギムレットと同じアパートを借りた事は偶然ではなく必然。
先日ギムレットを調べさせた際の異常なまでの早さはその為か、とバルゴがしかめっ面で納得する。
「お前とカイコとの関係は？」
「カイコ様はおれの養父です。カイコ様からあんたを殺すように命じられていた」
「ふむ。ヒオリ。ヒョウガは一体何を考えている？」

「さぁ。自分にはわかりませんし、おれはまだ任務の途中です。製造方法なんかまったく判らない。まぁ、戦争でもやる気なんじゃないでしょうか。それにしても火影をその名で呼べるのは、あんた達くらいですよ」
もちろんバルゴとミゾレの事であるが、最後のヒオリの言葉は耳に届かなかった。
ヒオリの『戦争』の言葉が引っ掛かる。
「……。バルゴ？」
まるで時間は止まったかのようにピタリと動かないバルゴに、ヒオリが心配そうに声を掛ける。
それこそネジ巻き式の人形のように首をカチリとヒオリに向ける。
「ヒオリ。俺の考えが正しければヒョウガは俺たちを裏切ってはいない。そしてお前の言う通り、お前の任務の目的の先は戦争を起こすつもりなのだろう」
「戦争？馬鹿な。どことですか？」
ヒオリが嘲笑を交えて疑問を投げる。
バルゴは、何も答えないで紫の闇に染まった倫敦（ロンドン）の街を眺めている。
「……まさか」
つまり、西の国に戦争を仕掛ける、という事が容易に想像できた。
「そしてあいつは俺たちを使って何かをしようとしている」
「何か、ですか。この地で大蛇丸を復活させて？」
「どちらにせよ、今日、この地で封印すれば問題はあるまい」
バックの中の封印術式を記した巻物を手に取る。
赤と緑の特殊な糸で編まれた特別製の巻物。
ヒオリはその術式を一度だけ見た事がある。
破邪ならぬ、破蛇（はじゃ）を意味する『九字』が曼荼羅のように書き記され、数千の蛇の呪いを裁断し、圧縮し、術式内部へと収納する事を可能とした封印式。
「ヒオリ。俺は今から大蛇丸の復活を止めに行く。お前も怪我が治

り次第、追って来い」
恐らく解毒が9割がた完了したのだろう。
身体の毒が消え去った以上は、早急に任務に戻らねばならない。
「……。拒む理由はありませんね。班長の指示には従いますよ」
ヒオリが視線をバルゴから外しながら答える。
「そういえば、暗部の人間は素性を隠す為に面を付けるのが基本だったな」
「おれの仮面はあんたが割ってくれたでしょう？」
「そうだったな。これでも付けてろ」
バルゴがヒオリに一枚の面を渡す。
「これは……？」
投げ渡されたのは『狐の面』だった。
「俺の暗部時代の仮面だ。俺のコードネームをやる。お前は今から＞稲荷（いなり）＜と名乗れ」
「……だっさい名前ですね。まだ狢（むじな）の方がしっくりきますよ」
毒舌。しかもあれこれと文句の多い。
そうは思いながらも、これこそが日向　ヒオリという人間の本来の姿なのだと、今は逆にそれが微笑ましくある。
バルゴが探し物をするかのように雲で覆われた空を見上げる。
「むぅ。なら、＞夜鷹＜と名乗れ」
「姉が好きだった本から取りましたか。まぁそこらで手打ちにしましょうか」
そもそも部屋に置いてある植物に『うっきー君』と名付けている前科があるくらいだ。
この男にセンスの良い名前を期待するのは間違いなのかもしれない。
バルゴと逆方向を見ながらも、両手はしっかりと狐の仮面を抱えている。
「狢は死んだ。今からおれは、夜鷹。バルゴ班の夜鷹だ」
「宜しく頼む。夜鷹。バックアップは任せた」

「御意」
ヒオリが切れ良く返事をすると優しく微笑み、疾風のようにその姿が見えなくなる。
再び大の字に横になり群雲を仰ぐ。
「ありゃぁ、勝てねぇわ。カイコ様すいません。狢は死んで任務失敗です」
誰も居ないアパートの屋上で、ため息と同時に懺悔のように呟く。
夜鷹。夜の鷹。
影の徹する自分にぴったりの名だと思った。
「星空　バルゴ。あんたが往く道。姉の代わりに見届けさせてもらいますよ」
狐を模した仮面を着け、ヒオリから夜鷹となった一人の忍の覚悟を、異国の夜空が黙って見つめていた。

忍者、異国で死す　9

このまま地獄の底へ辿り着くのではないかと思われる程の螺旋階段を下ってしばらく、今自分は地下何メートルまで潜ったのだろう不安になる。

ギムレットは最近剃っていない無精ひげを擦りながら、下へ降りる度に不気味さを増す瘴気に、自分は今緊張しているという事を嫌という程に感じていた。

相対するのは魔法使い。仮名、ジャック。

魔術、魔法を研究する組織『十二の徒』のメンバーの一人にして、最強最悪と噂される人物。

他のメンバーの魔法の属性や使役する神秘について調べる事が出来たが、ジャックの魔法だけはどんなに時間を割いても調べる事が出来なかった。

故に対抗策がなく。

故に不気味さを己の中で大きくさせてしまう。

ギムレットの眼前に大きな扉が立ちふさがる。

ただ鉄の板を立てたかのような無骨な風貌。

僅かな隙間からは濃縮された瘴気が邪気を孕んで漏れ出している。

「待っていろ、テセアラ。今助けるからな」

一呼吸おき、扉に両手を掛ける。

開放の音が地鳴りのように低く響き渡る。

半球状の巨大な空間。

明かりは足元の僅かな蝋燭と、所々に敷かれた理解不能の魔方陣と呪文が不気味に輝いている。

暗闇と不気味な光に慣れた瞳が人影を捉える。

ヤツだ。

大事そうに抱えていた魔道書は確認出来ない。

「ジャァアアック！」

「来たかね、ギムレット君。私はキミに『シノビ』とかいう者を殺すように命じたハズだが、どうなったかな？」
「判ってんだろ？んなモン破棄に決まってんだろーが！」
相変わらず人を見下したような目でこちらを見ている。
「それにテメェから先に約束を反故にしたんだろ。報いを受けやがれ」
ギムレットが聖銀の弾が込められたライフルを構える。
「私は約束を守ったさ。この娘の呪いは間違いなく解除した。キミが色々と事が上手く運べば、『これ』の復活に妹の娘を贄に捧げる必要は無かったのだがね」
ジャックが振り向く先。
そこには大きな黒い塊があった。
球状の黒い物体を、ギムレットはまるで卵のように思えた。
「んだぁ？ありゃぁ……」
「これは神の卵。遠く、原初の魔法使いが敷いた魔法、魔術に関する全ての法則を『解き放つ』事ができる、新たな創造神だ」
「理解できねぇな。テセアラはどうした？どこに居る！？」
室内の空調がまるで黒い卵の胎動を表しているかのように辺りに響く。
「彼女には、新たな神の依り代になってもらったよ」
ジャックの瞳が金色に輝いている。
「完全な状態での開放となるのはまだ少し猶予があるが、何か足りないのだよ。神が生まれる為の『何か』が、足りないのだよ」
「何だと思うかね」と、ギムレットの無精ひげとは違い、立派に蓄えた顎ひげを擦りながら訊ねる。
「知るか！てめぇには死んでもらうぜ」
苛立つ声でギムレットが引き金に力を込める。
発射。
耳を劈（つんざ）くようなけたたましい銃声が広い空間に響き渡る。
刹那のマズルフラッシュで網膜を焼きつかせ視界を狭める等とい

う初歩的な事はしない。
だが、おかしい。
確かに銃弾はジャックめがけて発射された。
なのに、何故。ジャックはその場に居ない？
「はずれだよ。ギムレット君」
いつの間にかジャックがギムレットの正面、左側へ移動している。
舌打ちしながら次弾を装填し即座に発砲する。
「おや、どこを狙っているのかね。私はこっちだ」
先日の狢（むじな）のように後方から声が聞こえる。
聖銀の手甲に仕込んであるバネ仕掛けの甲剣が飛び出し、振り向きざまに斬る。
分厚い鉄の扉にぶつかり、鈍い音を出しながら火花を散らす。
「どこを向いているのかね」
今度は一番初めに居た場所に戻っている。
まるで瞬間移動でもしているかのような速度だ。
「魔法……、か」
「その通り」
ジャックの表情が醜く歪む。
「キミには一生掛かっても私に触れる事は出来んよ」
「だから何だってぇーんだ！」
ライフルから神々しい黄金の光が放たれる。
マラク・ハ＝マヴェト。
ギムレットが持つライフル、モーゼルＫａｒ９８ｋに封印されている天使という名の兵器。
高度に組み上げられた魔術式。
人間の魂を内包した納魂機関（シリンダー）。
魔力を極端に嫌う聖銀製の甲冑。
中身は錬金術と数秘術、魔術の混在体。
人造の神の使いが姿を現す。
「やれ！あの野郎を切り伏せろ！」

聖銃の主の命を受け、腰に携えた身の丈ほどの大剣を構え、光の速度で切りかかる。
質量を無視した亜光速での移動こそが、ハ＝マヴェトの特性。
狢の時は偽者を掴まされたが、今度はそうはいかない。
どんなに速く動こうとも光の速度には敵わない。
銀色の騎士がジャックの眼前に迫る。
ジャックの高速移動に何か仕掛けがあったとしても、それを行使する間も与えずに仕留める。
……はずだった。
切り込んだ先には既におらず、いつの間にかギムレットの目前に存在していた。
「どういう事だ……？」
ジャックの目が金色に輝き、瞳が爬虫類のように縦に走る。
「無駄だよ。ギムレット君。言っただろう。これは魔法だ」
得意なモノを自慢する子供のような表情でギムレットを見据える。
「我が秘術は『空間を支配する』」
さも、当然のように。
それでいて、悠然と。憮然と。
ギムレットの眼前に立つ魔法使いは、自らの存在をそう後付けた。
「意味わかんねぇ事を。俺はてめーと茶会に来たんじゃねーんだよ」
「まだ判っていないようだな。私は、キミを魔法の詠唱無しで、身動ぎ一つで殺せるという事だ。ここは魔法使いの工房、根城だ。キミは十全の装備で乗り込んで来ただろうが、私は万全の準備でキミを迎えた。いい加減諦めたまえ。キミは私の唯一と言っていい友人だ。共に新たな世界の誕生を見守ろうじゃないか」
白々しい嘘を。
こいつは自分を、もう道具としても見ていない。
ギムレットが辛酸を舐めた面持ちをする。
これはただの暇つぶし。時間稼ぎだ。
この部屋中央にある黒い卵が孵るまでの余興程度にしかギムレッ

トという存在を見ていない。
「本来、こういった魔法を行使するには膨大な魔力と、長々しい呪文の詠唱を必要とするのだがね。君も気付いているだろう。今この場には大量の、それでいて高濃度の魔力が満ち満ちている。もはや呪文の詠唱など……」
ジャックがギムレットの視界から消える。
「必要ない」という言葉がギムレットのすぐ隣から聞こえた。
刹那、ギムレットの身体が強い衝撃により弾かれ、レンガの壁に鈍い音と共に全身を強打する。
身体中の血液が逆流するかのような錯覚を覚え、たまらず吐血する。
主の異変に気付いた甲冑騎士が大剣を振りかざし、元凶の魔法使いに切りつけるも、その姿は別の場所に在った。
「……の、クソ野郎が……」
悲鳴を上げる前身に鞭を打ち、低姿勢でジャックへ詰め寄る。
獲物を狩るがごとくのいぶし銀の疾駆が、邪悪な魔法使いとの距離を一瞬で埋める。
「キミも懲りないな」
そう呟き、指をぱちんと鳴らす。
先ほどと同様の衝撃波が全身を襲う。
冷たく硬い石の床に削られるように身体を引きずられる。
ゴキリと右腕から鈍い音がした。
折れた、と感じる頃には言いようもない激痛が脳髄を支配し、嗚咽のような声を出す。
その声を聞いた魔法使いが満面の笑みを浮かべ、二撃、三撃と衝撃波を繰り出す。
聖銃の主を救おうと、銀色の騎士が再び亜光速でジャックに斬りかかるも、またしても寸前で場所を移動されてしまう。
四撃。五撃。六撃。
「……ほう」

七撃。八撃。九撃。
「私には、いつ倒れてもおかしくないように思えるが……。キミの評価を些か誤っていたようだ」
十。十一。十二。十三。十四。
もはや数えきれないくらいの衝撃波を全身に浴びる。
しかし、それでもギムレットは倒れない。
聖銀の銃ははるか遠くに落としてしまっている。
肩で呼吸をしながら、口から鼻から、耳から、目から。
夥しい量の出血をしながらも瞳は邪悪な魔法使いを捉えている。
獲物として。
抹殺対象として。
どす黒い殺気に鬼気迫るものを感じたジャックの表情に始めて変化が現れた。
「……どうした、ジャック。随分余裕ねぇ表情してるじゃねぇか」
抹殺者が一歩、歩みを進める。
魔法使いが一歩、後退する。
抹殺者が一歩、歩みを進める。
いつの間にか背後にレンガの壁が後退を塞き止めていた。
「俺ぁ、身体の頑丈さと、我慢強さだけが取り得でなぁ。俺を止めたければ、脳みそぶっ壊す位やらねーと。首だけになってもてめぇの喉笛噛み千切るぜ」
「……ならば、そうしよう」
冷徹な瞳でギムレットを見据える。
ジャックが聞き取れない発音の言語と宙に文字を描き出す。
一つの発音で三重四重の意味を持たせ長々しい呪文の詠唱を短縮させる高速発音術。
大掛かりな魔法が来る事が予想される。
「Ａｉｇｕｉｓｅｚ－ｌｅ　ｍａｎｇｅｚ」
『削り喰らえ』
ようやく聞き取れた言葉。

それはギムレットにとって絶対の死刑宣告。
「ううああああぁぁ！？」
巨大な半球状の空間全体に響き渡らんばかりの獣の咆哮。
空間を極限まで捻る事により生じた数千度にも及ぶプラズマが暗闇を明るく、熱く照らし出す。
ギムレットの前方を守護するように聖銀の騎士が灼熱の業火へとその身を投じる。
魔力を嫌う聖銀の性質により火球はハ＝マヴェトが触れた瞬間に蒸発するように消失してしまったが、余波として残った高温まではすぐに消えず、美しい聖銀は見るも無残に溶け始める。
直後、空間を削り喰らう不可視の球がハ＝マヴェトに襲い掛かる。
空間に空けた異次元の扉。
それを何の加工をせず現空間の対象を消失させる為だけに使う、それは空間の支配者たる所以。
しかし魔力で生じた全てを嫌う聖銀の騎士は、それすらも防ぐ。
あまりの衝撃に付加が掛かったのか、鈍い金属音と共に膝を突き、動きが止まってしまった。
これでギムレットを護る盾は無くなった。
もう一撃この腕を振るえばジャックの勝利は確定する。
だが、聖銀の騎士が倒れた後ろにギムレットの姿は、無い。
「よう」
死神の呟きが聞こえた方向に空間を揺さぶる衝撃破を放つ。
強烈な一撃がギムレットの身体を襲い、全身を揺さぶる衝撃に倒れそうになる。
倒れるな。
歩みを止めるな。
今まで鍛えた肉体は、この時の為に。
ジャック。他人の運命（テセアラ）を弄んだ罪。
てめぇの所業は万死に値する。
「ハ＝マヴェト！」

渾身の力と魔力を込めて聖銀の騎士の名前を叫ぶ。
主の意図を即座に理解した騎士が溜め込んだ全ての力を使い、光速で魔法使いに斬りかかる。
「くっ！」
冷静な判断を失くしたジャックが思わず右腕でその身を庇う。
超重量の大剣が容赦なくジャックの肘から先を切り捨てる。
そしてその一瞬の隙をギムレットは見逃さない。
折れていない左腕に仕込んだバネ仕掛けの甲剣がガチャリと飛び出す。
あばら骨に平行に。
抹殺者が放った一閃は魔法使いの心臓を的確に、正確に貫いていた。
「テセアラは、返してもらうぜ」
「ふ……、ははは……はは」
ジャックが笑いと共に吐血する。
「最後まで笑うか。それもいいだろうよ。先に地獄で待っていな」
突き刺した甲剣を引き裂くように引き抜く。
ギムレットの背中でジャックの身体が崩れ落ち、傷口から噴水のように大量の血液が流れる音がした。
最後に笑う。笑いながら死ぬ。
ギムレットには、ジャックと名乗った偽名の魔法使いの心中をついに知る事はなかった。
「馬鹿野郎が」
小声でボソリと呟き、部屋中央の黒い卵を身ら見つける。
ドサリという音がした。
冷たい石の床の感触に、ギムレットは自分が倒れたのだと気が付いた。
ダメだ。駄目だ。
立たなくては。テセアラの元へ行かなくては。
左腕を必死に伸ばす。

自分の視界が真っ暗になる。
テセアラ。
いま、たすける。
暗闇に手を、伸ばす。

忍者、異国で死す　１０

錆び付いた鋼鉄製の扉に手を当てる。
僅かな力で簡単に開いた事から、誰かが既に開放したであろう事を察する。
血臭。
バルゴは僅かに鼻腔をくすぐった臭いに警戒しながら音を立てずに室内に侵入する。
「これは、……魔方陣とかいうヤツか？」
床一面に書き込まれた不気味に光る文様を観察する。
「いや、忍術の要素も含まれているな」
理解が出来ない異国の魔方陣の中に、見慣れた忍術の構築式を発見した。
むしろ忍術が主体となっており、魔方陣はそれの補助をしているように思える。
描かれているのはチャクラ吸収。
周囲のチャクラを取り込み変換するコンバーターの役目を果たしている。
「あれは、ギムレットか？」
暗がりの中に以前見かけた風体に目がいく。
ギムレットを中心に周囲が激しく壊れており、つい先ほどまで壮絶な戦いがあった事を物語っている。
ピクリとも動かないギムレットの傍にもう一人誰かが倒れている。
おそらくこの一連の事件の首謀者であろう。
儀式用の黒いローブが血の色と重なり、より黒く変色しているように思える。
右腕は肘から先は無く、あばらに平行した刺し傷は心臓に達しているのであろう事が容易に想像できた。
「相打ち……、か」

物言わぬギムレットの遺体を部屋の端に寄せ、聖銀の銃を胸元に添える。
知り合った人間が、目的を供にする仲間がまた一人逝ってしまった。
この状況だけはいつまでも慣れる事は出来ない。
ギムレットの手が何かを握っている事に気付く。
「これは……」
ギムレットから剥ぎ取ったソレを懐にしまい込む。
ふぅ、と一呼吸し、床一面に張り巡らされた魔方陣が放つ光の先を見つめる。
大きな黒い塊が、まるでこの部屋の主であるかのように鎮座していた。
「あれが禁術書の中身、いやまだ孵る前という事だな。たぶんテセアラもこの中か」
天井の換気口がまるで黒い卵の胎動を示しているかのようで、その存在、殻内のチャクラは醜悪で不気味だ。
見たところまだ覚醒に至っていない。腰にぶら下げた銀の懐中時計で時刻を確認する。
封印と覚醒を司る忍術が最も強く効力を発揮する時間は同時刻だ。
そして今がちょうどその刻。
バックの中から赤と緑の糸で編まれた特別製の巻物を取り出す。
「臨める兵、闘う者、皆、陣列べて前に在り」
邪。即ち蛇(じゃ)を払う言霊に反応して巻物が輝きだす。
己の目的を知ったかのように巻物がバルゴの手中から勢い良くその封印を自ら解く。
規則正しく並べられた文字が宙を舞い、黒い卵の周りを包むように覆う。
「忌まわしき蛇、か」
空中に浮かんだ文字を追い、特殊な布で編まれた巻物が部屋中央の黒い巻物を余さず包み込む。

九蛇封縛　滅尽殺。
数ある封印術の中でも取り分け高位に位置しており、かつて尾獣を完全に封印したとされる最高位の封印術、幻龍九封尽を簡易化、簡素化、簡略化した術。
日々弛まぬ忍術の進歩は古の天才忍者たちが数人掛りでようやく発動させた超高等忍術をたった一本の巻物で行使できるまでに進歩していた。
無論、オリジナル程の縛力は無いが、『蛇』の呪いに特化させればおよそ真に迫る事はできる。
一呼吸置き、バルゴが封印術の名を唱える。
黒い卵の上空に曼荼羅のような文様が浮かび上がる。
成功した。
蓄積されたチャクラがあまりに膨大な為、全てを吸引するには時間が掛かる。
後は。
「そろそろ起きたらどうだ？石の床は冷たいだろう」
バルゴが視線を石の床に横たわっているモノに、意識と殺気を向ける。
「ほう。気が付いていたのかね？」
「お前が、……魔法使いか……」
心臓を貫かれ、死んだはずの『ソレ』が膝からゆっくりと立ち上がる。
「左様。初めまして異国の暗殺者、忍よ。我が野望成就の立会いに、わざわざご苦労」
「貴様のチャクラはまったく消えていなかったからな。しかし何故生きている？」
バルゴが臨戦態勢を整え、クナイを逆手に持ちながら死んだはずの魔法使いに問う。
「魔術の一種だよ。自らの真名と引きかえに、生命の根源である心臓を身体から排している」

それは、つまり。
「不死身、なのだよ。我が妹の研究成果さ」
自らの右腕をぐりぐりと肘につける。
接続された事を確認した魔法使いがニタリと哂う。
夜鷹の報告にあったテセアラの母親が人外に堕ちてしまった『事故』というのは、これを行う為だったのかと理解する。
瞳が金色に輝く。それはもはや蛇。
「魔法使い。確かジャックと名乗っているそうだな。貴様の野望とやらは成就しない。もう封印は始まっている。誰にも止められない」
「その通り。それはもう、誰にも止められない」
おかしい。
余裕すぎる。
目的であった黒い卵は今現在も自動で封印が行われている。
なのに、何故焦ろうともしないのだ？
バルゴの頭の中で数通りの答えが同時に展開される。
その中で最悪のケースが、予感として胸中によぎる。
「……まさか！？」
ジャックの表情から予感が確信へと変わったバルゴが後方の黒い卵に振り向く。
しかし、そこには既にジャックが『居た』。
「正解だ。キミは随分と頭が廻るようだな」
空間が歪む程の衝撃が全身を襲う。
見えない力に体が弾かれ、あっという間に入り口付近へと飛ばされてしまった。
「この卵が孵る方法を私も色々と試したのだがね。どうやらようやく成ったようだ」
「開放のカギは……、封印式を取り込む事と言うワケか……」
破蛇封印の巻物は火影から直接手渡された物。
火影の掌で踊らされた事に腹が立つ。
バルゴは地面に描かれたチャクラ吸収の呪式の意味を理解した。

大気中のチャクラを吸い、封印術のチャクラで取り込む。
そのチャクラとは、まさしく封印式のチャクラを意味していたという事。
「その通りだ。ありがとう。キミのおかげで古き盟約を捨て、新たな理を構築する事ができるよ」
「そうだとしても、貴様の息の根をここで断てば、問題無い！」
バルゴの俊足が一手でジャックに詰め寄る。
しかし、振りかぶったクナイはジャックの残像しか捕らえる事は出来ない。
「亜光速で動く聖銀の騎士よりは遅いな」
声のする方向に素早く転回する。
「……無駄だ。我が秘術は空間を操る」
「それがどうした？」
「何？」
バルゴがバックから丸い物体を取り出す。
勢い良く地面に叩きつけると、真っ白い粉塵が辺りを包む。
「くっ。煙幕か？小賢しいマネを」
「俺は空間を操る事なんかよりも、もっとタチの悪い術を使うヤツを知っている。その程度の事、いくらでも対処のしようがあるさ」
煙幕で自らの身体がジャックの視界から消えた事を確認し、高速で複雑な印を紡ぐ。
半径２０メートルの空間の空気を自在に操るバルゴの得意忍術、風遁　風縛鎖の術。
夜鷹と戦った時は空間内を真空にしようとしたが、今度は煙幕が有効エリア外に漏れないように滞留させる。
バルゴに遅れてジャックが煙幕を空間ごと弾こうとするも、空気だけが流動し、煙幕の霧は一向に晴れない。
「……ふん。どこから来ようとも、私は不死身だ」
「その驕りが命取りと知れ」
暗く、冷たい声が右側から聞こえる。

振り向いた瞬間、鮮やかな斬撃が『左側』から繰り出された。
あまりに咄嗟の出来事に、今、宙を舞っているのが自分の腕である事を認識するのに数秒の時間を要した。
「ぐぅ！」
「痛覚はあるようだな」
後方から声が聞こえ、顔を向ける。
しかし、今度は『前方』から首骨を折らんばかりの蹴りがジャックを襲う。
吹き飛ばされ、硬い石床に身体を打ちつける。
間髪入れずにクナイ、手裏剣がジャックの全身を突き刺す。
「調子に乗らない事だ」
光すら屈折させる程の空間歪曲がジャックの前面に展開、解放される。
石畳を全てひっくり返さんばかりの衝撃がバルゴを襲う。
大気を震わす轟音と共に壁に背中を強打する。
幸い意識ははっきりしており、猫のように四肢のバネで着地をする。
獣のような格好で両足に力を込め、爆発させたかのような加速でジャックに迫る。
クナイを大きく振りかぶったところで見えない壁に叩きつけられる。
いや、バルゴが全速力で不可侵の壁に激突したのだ。
頭が割れ、血が噴出す。
木ノ葉忍者の証である額当てが鮮血で赤く染まる。
全身のチャクラを込めても少しも前進できる気配がない。
ギムレットの聖銀の弾丸ならたやすく突破できる空間の壁は、バルゴの前では難攻不落の城壁と化していた。
が、この程度の障害で諦めるワケがない。
正面がダメなら側面、上空、あらゆる角度で進行を挑戦する。
しかし、どの角度からも全て分厚い空間の壁により、弾かれ、全

身を石壁に叩きつけられる。
次第にボロボロになるバルゴを心底嬉しそうにジャックが見つめる。
「Ｕｎ　ｓｅｒｐｅｎｔ　ｖｉｅｎｔ」
『来たれ　蛇』
ジャックが宙に文字を描きながら短く、しかしはっきりと呪文を唱える。
自らの内に蓄えた魔力を、霊力を持った言の葉へ変換し、大気中の『マナ』と呼ばれる超常の力の塊に接続、生贄や魔方陣を用いる事により発現可能となる神秘を行使する。
空中に無数の魔方陣が浮かび上がり、中央から夥しい数の蛇がバルゴに襲い掛かる。
「口寄せ、か？」
ジャックが行った行為を自国の秘術に宛がう。
「この国の召喚魔法というモノだ。気に入っていただけたかね」
「悪趣味だ」
「ごもっとも」
無数の毒牙がバルゴを襲う。
波のようにせまる蛇の群れを紙一重で避け、両手にしたクナイで切り刻む。
「死ぬまで踊り続けたまえ」
このままでは埒が明かないと判断したバルゴが壁を伝い天井に張り付く。
複雑な印を手早く結ぶと、バルゴから一陣の風が半球状の空間に流れ込んだ。
「この風は……。なるほど考えたな」
「氷遁は使えなくてもマネ事くらいはできる。それに身近に蛇使いがいるから対蛇戦はお手の物だ」
冷たく冷えた風が半球状の空間を余さず包む。
変温動物である蛇の群れは、機敏な動きを弱めていき、冬眠する

ようにとぐろを巻くモノまで現れた。
いくら猛毒を持つ凶暴な蛇でも本能には逆らえない。
バルゴの機転に感服しながら、召喚した蛇たちを送り返す。
ボワンと音を立てながら次々と姿を消していく。
「では、時空の亀裂はいかがかな？」
魔法使いが指をパチンと鳴らす。
バルゴの前方を不可視の『何か』が迫り来ているのを本能で感じた。
直感で右方へ跳躍するように避ける。
刹那、バルゴの肩当が鋭利な刃物で斬ったかのように吹き飛び、後方でカランと落ちる。
一体何が？と考える暇も与えられず、その何かが次々に自分に向かって迫り来る。
一つ、また一つと素早い動きで対応しかわしていく。
「……ちぃっ……。見えない時空の亀裂が見えているとでもいうのか？」
悔しさで表情を歪ませるジャックとは対照的に、バルゴの瞳は確かに不可視であるはずの『何か』を捕らえていた。
全身の毛が僅かな大気の流動を感じ取ろうと逆立つ。
迫り来る一刀両断の空間断裂は無数。
人域でない対応速度で全てをかわす。
集中力がまた一つギアを上げる。
空間の断裂は僅かではあるが認識できる。
あとは、魔法使いを守護する厄介な不可視の壁。
バルゴが銀色の短い筒を口に加える。
先ほどギムレットがその手に持っていた犬笛だ。
この壁が魔法で出来ているならば。
ジャックに突進し、あらん限りの息を吸い込み犬笛に向かって吐き出す。
ジャックの眼前からバルゴの姿が消える。

後方には、『死んだハズ』のギムレットが折れていない左腕で自分に照準を付けている。
「死んだフリは、てめぇだけの十八番じゃねえんだよ！」
この不可視の空間の壁が魔法で構成されているならば、聖銀の銃弾の前に脆く崩れ去るハズである。
折れた右腕の支えを聖銀の騎士に任せる。
発射。
美しい銀の直線が空間の壁に直撃し、ガラスが割れるように穿ち、虚空の壁を消し去る。
強制的に通常空間に戻された事による突風に僅かに魔法使いが怯む。
それを、忍は見逃さなかった。
ジャックの身体が顎下からの蹴り上げに宙を舞う。
成す術の無いジャックに無数の連撃が四方八方から襲い掛かる。
悲鳴すら上げる暇を与えない、一つ一つが必殺の一撃。不死でなかったらそれだけで勝敗は決していたであろう拳と蹴りの集中砲火。
「旦那ぁ！ぶちかませぇえ！」
「獅子！連弾！」
ジャックの腹部をめがけ、岩をも砕くバルゴの踵落としが炸裂する。
踵が突き刺さるように腹部にめり込み、その勢いのまま石畳へと叩きつける。
ギロチンのような一撃に堪らずジャックの胴体は上下に分かれる。
「あぐっう！？」
悲鳴にすらならないジャックのうめき声。
「なまじ不死である事が仇となったな。俺の目的は貴様を倒す事ではない。貴様の悲願であるあの黒い卵が封印される様をそこで見ていろ」
「……ふは。ふふは。ふははははは！」

「何がおかしい？」
気でも触れたかのように笑い出すジャックに怪訝な表情で睨み返す。
「これは失礼。いや、しかしこれが笑わずにいられるものか」
「どういう事だ？」
ドクンと、一際大きな胎動が半球状の空間に響いた。
バルゴとギムレットに悪寒が走る。
「見たまえ」と黒い卵へと視線を誘導する。
「有り体にいえば、試合に負け、勝負に勝ったというところだな。時間稼ぎは成功したようだ」
黒い卵が渦を巻くように収縮し小さくなっていく。
「あの魔道書を通して私に語りかけていた『神』の誕生だ。さぁ！私の願いを聞き入れたまえ！享受せよ！我が宿願を！全ての知識を私に授けろ！」

再び胎動が響く。
もはやそれは、完全な心臓の鼓動に近く大きく脈打つ。
黒い卵の殻にパキリとヒビが入る。
「見たまえ。これが、神の知識を喰らいしモノ。原罪の蛇。我々は、『ウロボロス』と呼んでいるよ」

ガラスが割れるような音と共に一匹の巨大な白い蛇が姿を現す。
そして半球状の空間をぐるりと周り自らの尾を飲み込む。

黄金に輝く神々しい白蛇。
それの姿は天使の輪のように美しく。
巻き起こる風が、見上げる者全てに死を与える堕天使の祈りのように耳に劈(つんざ)く。
「こりゃぁ……」
ギムレットが呆然としながら生まれたばかりの『神』を見つめる。

「……尾獣……。零尾……、ウロボロス……」
圧倒的なチャクラを前に、バルゴが阻喪(そそう)のあまり肩を落とす。

絶望せよ。慟哭を上げろ。
眼前に開かれるは地獄の標(しるべ)。
この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ。
さぁ、宴の始まりだ。

幕間　夜鷹―よだか―　六道計画

『六道計画』というものが在った。
厳密に言えば、今現在もなお進行している。
それはおれ達が生まれる前から木ノ葉の里の闇で密かに行われていた。
目的は一つ。
忍の始祖である＞六道仙人＜を人為的に造りだし、量産するというもの。
六道仙人が開眼したとされる『輪廻眼』を携えた部隊で混沌とした忍世界を統一する事を理想に掲げる一方で、人体実験を繰り返したと聞く。
輪廻眼とは、うちはの写輪眼、日向の白眼に並ぶ三大瞳術の一つとされ、最も崇高にして最強の瞳術とされている。
かつて、何代か前の火影の時代に輪廻眼を操る人物が何人も出てきたと言うが、本来突然変異で生まれる輪廻眼の保持者が同じ時代に何人も出て来るなぞ眉唾もいいところである。所詮は伝説だ。脚色されているに違いない。
ゆえに実験は成功するハズなどなく、現火影により研究機関は廃止、解体された。
研究者たちは忽然と姿を消し、後に残されたのは夥しい数の遺棄された死体の山だけだったという。
数少ない研究資料の一つに『甲第一級禁術封印指定書』　通称『大蛇丸の書』についての記述がある。
それによると『六道』へ至る道の一つとして、尾獣の存在が不可欠とされている。
尾獣の発生方法はいくつか方法があり、その定義は時代によって異なる。
かつての魔人　大蛇丸は全ての忍術を手に入れようと画策してい

た。
その一環として、自ら尾獣を創り出す一歩手前まで迫る。
しかし、それは現実となる一歩手前で頓挫してしまう。
大蛇丸暗殺事件である。
首謀者は木ノ葉の抜け忍である事までは判明しているが詳細は不明。一説にはうちはの一族が真犯人であると目されているが真相は闇の中だ。
生前大蛇丸は、自分が殺された際の保険としていくつかのトラップを、あらゆる方法で残していた。
自分の細胞を取り込んだ者の肉体を次第に侵食する『呪い』である。
そして、それは大蛇丸の書も同様だ。
書の中には大蛇丸の魂の一部が封じられている。
この書を読み解き、開放する者は次第に精神も肉体も魂すらも大蛇丸に侵食され、果ては新たな大蛇丸が誕生してしまうらしい。
あの魔法使いは依然として自我を保っているように思えるが、それも時間の問題だろう。
六道へと至る道。それは六道仙人が敷いた忍術の理を崩壊させ、新たな六道が新たな忍術を創生する。
あの魔法使いも同様の結論に達していたようだ。
そして、そのカギとなるのは、書に封印されていた『零尾』である。
真の零尾。
しかもただのチャクラの塊ではなく、この世の始まりから終焉までに及ぶ膨大な知識を有しているとされる。
だがしかし、それほどまで大量の知識を果たして人間が扱えるのだろうか。
おれが思うに、あの狡猾な魔法使いは、零尾がもたらす知識をテセアラとかいう娘を介して自分に転送させようとしている。
長年あの娘を蝕み続けた蛇の呪いは、魔法使いとの間にチャクラ、

いや魔力の共有を可能としている。
つまり、零尾が有している無尽蔵の知識の塊をテセアラが受け取る。それを共有魔力のバイパスを伝い、魔法使いへと転送させる。
その方法を取れば魔法使いは安全だが中間となるテセアラは、まず脳が持たない。
あらかたの知識の転送が終わる頃には廃人となる。
バルゴ班が受けた任務は、『大蛇丸の書の奪還。不可能と判断した場合は完全なる封印』である。
自分で封印を命令しておきながら、封印開放の手助けもしている。
任を受けた当時は特に考える事も無かったが、今では火影の意図がまるで掴めない。
しかし、火影の考えている事。星空　バルゴには察するところがあったらしい。
火影。大蛇丸の書。零尾。戦争。そして、六道計画。
おれ達が生まれる前から仕組まれていた人造の宿命。
バラバラに散らばった『点』が『線』で結ばれ、『立体』となり正体を表す時、全ての真実が白日の下に曝されるのだろう。

六道計画。
その全貌を知るものは、いない。

忍者、異国に叫ぶ　1

人は死んだら何処に逝くのだろうか。
生まれた時から魔法使いとなる事を宿命付けられた男にとって、その課題はあまりに難しすぎた。
先祖が挑戦し続けてきたこの議題に一族が人生の全てを賭けて挑戦し続けた。
祖父がそうであり、父や母がそうであったように、自らも魔法使いになる事に疑問を抱く事はなかった。
故に、それは一族の総意であると考えた。
何事にも例外というのは付いて廻る。
名前を捨てジャックと偽名を名乗っている男にとって、妹がそうだった。
いや、元々『魔女』の家系なのだ。
男より女の方がそういった能力に秀でている。
優秀な妹。
才能だけであれば自分を遥かに超えてしまっているセンスを持ち合わせていた。
自分が持っていない才能。
難題が生じた時、彼女は直感で正しい答えを導き出す事が出来た。
後はその答えの正しさを証明すれば良いだけと、平気な顔で言った事が今でも脳裏を離れない。
その彼女が儀式の最中の事故で畜生へと身を堕ちてしまった事は、男にとって天が崩れる程の衝撃だった。
確かに複雑な呪術式を用いてはいたが、彼女ならば決して失敗はしないはずだった。
彼女の死後、儀式失敗の原因は何なのかを必死に研究した。
答えは単純だった。
式に間違いは無く、手順も正しい。

彼女自身が間違っていただけだった。
出産直後の落ちた魔力で、高出力の魔術を行使しようとした。
それが失敗の要因だ。
大いに笑い、大いに泣いた。
妹の溢れ出る才能妬ましく、羨ましかった。
だからだろう。
彼女がやろうとした事を自分が叶えようとした。
しかし本来才能が無い、落ちこぼれの魔法使いなのである。
行き詰まり、挫折するのは時間の問題だった。
故に偶然手に入れた東の国の異能力を記した『魔導書』の存在はまさに天啓だった。
新しい発想。
斬新な着眼点。
全てが新鮮で、全てが捻れ狂った本だった。
眠っていた才能が開花したのか、東の国の『忍術』が男の肌に合っていたのかは判らない。
しかし結果だけ見ると、今こうして誰にも到達出来なかった神の領域へ足を踏み入れる事が出来た。

見上げると、妹の忘れ形見が黄金の光を放つ白蛇の輪の中心に居る。
光と戯れるような美しさ。
粒子を弾いて遊ぶ無邪気さ。
一枚の絵画として永久に保存したくなるような儚さを兼ね備えた、究極の美。
壊してしまうのが勿体ないという想いは総じて、壊してしまいたいという衝動に変貌する。
魔法使いが両手を上げ、高らかに叫ぶ。

さぁ！私に全ての叡智を授けたまえ！

その声が届いたのか、羽が落ちるようにふわりとジャックの下へ舞い降りる。

ジャックの、黄金に輝く蛇の瞳がテセアラの瞳を捉える。

そこには、

ジャックと同様の蛇の瞳が、無様に地べたを這いずる自身を見下していた。

テセアラが上を向き、おもむろに右手を口の中に入れる。

ゆっくりと何かを引き抜く。

刀だ。

それもテセアラの身長と同等の長さを有している。

ジャックの瞳が大きく開かれた直後。

ざくん、と鋭い音がした。

脳天を貫かれ、一時的に意識が寸断される。

細切れとなる意識の狭間に天使のような美しい声が聞こえた。

「今までご苦労さま。もうあなたはいらないわ」

テセアラの影から這い出るように大蛇が現れる。

ゆっくりと大口を開き、魔法使いを飲み込もうとする。

飲み込まれる。

喰らわれる。

なぜ自分が。

予定が違う。

約束が違う。

喰らわれるのは、あの娘のハズだ。

「ふざけるなぁあ！なぜ私ではないのだ！大蛇丸！」

魔法使いの、ジャックの怒号が広くない空間に響き渡る。

「いやだ、死にたくない！あと少しで叡智が、全てが手に入るのに！私を選ばなかった者たちを見返せるのに！あと……少しで……っ

！」
それから先の言葉は無かった。
その場に居合わせた者は、人間の上半身が断末魔を上げながらゆっくりと飲み込まれていく異様な光景を、ただただ見守るしかない。
追悼も。黙祷も。
哀れみすらも感じる余裕もない異質な出来事。
事を終えた大蛇は舞台を降りるかのようにテセアラの影へと入り、潜るように姿を消す。
「テセアラ……なのか？」
ギムレットが僅かな希望を込め愛娘の姿をした魔人に問う。
しかし、金色の瞳を妖しく光らせ口元に邪悪な笑みを浮かべるだけで何も答えない。
「大蛇丸……。遂に復活してしまったか……」
バルゴが小声でボソリと呟く。
その声に反応した大蛇丸がテセアラの瞳でバルゴを見つめる。
「うずま……？」
バルゴの顔を見た大蛇丸何かを言いかけ、驚いたように大きく目を開く。
「いや、違うわね。他人だわ」
記憶の中に見知った人物でもいたのだろうか。
懐かしい者を見るように。
憎らしい者を睨むように。
その表情は様々な感情が読み取れるも、その心中は大蛇丸しか知る由はない。
バルゴか静かに深く、ため息のように深呼吸をする。
「ギムレットすまない。俺は、俺の目的を達成させる」
「旦那、待ってくれよ……。なぁ、他に方法はあんだろ。な？」
それは、テセアラと一緒に大蛇丸を封印するという宣言。
ギムレットには娘の死刑判決を言い渡されたような気がした。
折れた右腕を引きずるように近づくギムレットに背を向け、バル

ゴがクナイを逆手に持ち、構えを取る。
「木ノ葉流忍者　星空　バルゴ。……参る」
太陽のような金髪と青空のような碧眼がテセアラに取り憑いた大蛇丸を睨む。
搾り出すように吐いた言葉（決意）が崩れかけた室内に溶けて消えていくようだった。

忍者、異国に叫ぶ　2

夢でも見ているようだった。悪夢と言っても差し支えはないであろうその光景は、もはや常軌を逸していた。

歩けない、車椅子生活を強いられていた愛娘が床を壁を、あまつさえ空中を縦横無尽に辺りを駆け、バルゴの攻撃を流麗な動作で避けている。

恐らく魔力、チャクラで強化しているのであろう両の足は、おおよそ少女の筋力では耐えられるモノではなく、数分と経たずに噴出す血で赤く染まっている。

その攻防は一進一退で目まぐるしく変化し、これが遠く東の国の者同士の戦い方かと、ギムレットは場違いな感想を漏らす。

バルゴの頭上を目掛けて大蛇丸に侵食されたテセアラが踵落としを繰り出す。

それを右腕で防ぐ。が、木ノ葉の体術、忍者組み手の基本は『仕留める迄連続して攻撃をする』にある。

テセアラの右足とバルゴの右腕が接地した瞬間に身体を大きく捻じ曲げ、逆さになったテセアラの顔とバルゴが数センチの距離で眼を合わせる。

「見れば見るほど似てるわね」

誰に、という疑問を持つ間も無く、テセアラの口から飛び出た大蛇がバルゴの首に絡みつく。

「くっ！」

咄嗟に左手に持ったクナイで蛇の胴を切断する。

その間に両手足を付いて着地したテセアラが高速で印を紡ぐ。

潜影多蛇手。

影から這い出た無数の蛇がバルゴの足に絡みつく。

あっという間にバルゴの両腕を塞ぎ動きを封じられる。

床に突き刺した刀をゆっくりと引き抜く。

「この大蛇丸を相手に影分身で挑もうなんて、愚かにも程があるわね」
バルゴの『影分身』を袈裟切りにすると、空気が抜けたかのように音を立て消える。
本体は何処だ？
上か。下か。後ろか。
「そこね」
テセアラが足元の蛇に切りかかる。
「……ちっ！」
木の葉を隠すなら森。蛇に紛れるなら蛇に。
正確に自分の位置を知られたバルゴが変化を解き大きく後退する。
「この大蛇丸を出し抜こうなど百年早いわ」
「それはどうかな？」
不敵な笑みを浮かべたバルゴが音を立てて煙のように消える。
「……なに？」
直後、音も無く接近した『本体のバルゴ』が後方からテセアラに迫る。
右手に携えた光球が闇の中で一際煌く。
振り返るより速くバルゴの螺旋玉がテセアラを貫く。
「テセアラぁあ！」
ギムレットの愛娘の名前を呼ぶ悲痛な叫び。
直撃した。
そう思えたのもつかの間。直撃した腹部がぐにゃりと歪む。
今では使えるものが居なくなってしまった失われた術。『蛇分身』である。
「しまった……！」
通常の分身とは違い、接近戦に特に効力を発揮するその術の最大の特徴はカウンター。
穿った箇所から無数の毒蛇がバルゴの右腕をがぶりと咬む。
手甲のおかげで咬まれた箇所は思った程少ないが、手と腕の関節

部分に一箇所かまれてしまった。
バルゴを咬んだ蛇はハブ。ホンハブとも呼ばれ、その毒は出血毒でストレプトキナーゼと呼ばれる酵素により蛋白質を分解し血管系を破壊する。
先ほど夜鷹戦で見せた大量のチャクラによる細胞蘇生という芸当は、チャクラの残存量を考えるともはや不可能であると判断したバルゴが、咬まれた箇所をクナイで躊躇する事なく真横に切り裂く。
噴水のよう、とまではいかないものの、夥しい量の血液が毒素とともに流れ出る。
バックから消毒剤と止血剤を手早く取り出し応急処置を行う。
蛇分身であるテセアラの身体が、まるでバケツをひっくり返したかのようにばしゃりと崩れる。
そしてその後方から、ゆっくりとテセアラが姿を表す。
「その術……。確か螺旋玉だったかしら。本当、ますますそっくりね」
「……誰の事を言っているかさっぱりだな。長く眠りすぎた所為で頭がボケたか？」
バルゴが治療をしながらテセアラの中の大蛇丸を挑発する。
口元を吊り上げ金色の瞳でバルゴを見抜き、臨戦態勢を整える。
しかし、テセアラの身体を限界を超えて行使したツケは重く、両手足、身体中の駆動系は全てが悲鳴を上げていた。
「……ふん。この身体は脆いわね」
血だらけになったテセアラの身体を見た大蛇丸が吐いて捨てるように呟く。
治療を終えたバルゴが再びクナイを片手に構える。
ゆっくりと姿勢を低くし、両足に力を込め爆発させる瞬間を静かに待つ。
「旦那！」
ギムレットがバルゴの眼前に飛び出す。
「頼む、旦那！テセアラを殺さないでくれ！中身はバケモンでも、

……まだ、あいつはテセアラなんだ！だから……っ」
「……。どけ」
バルゴの、『忍』の氷のような瞳がギムレットを射殺す。
折れた腕を庇いながら、冷たい視線を滾る視線で交わす。
「ここであいつを封印しなければ、より多くの人が死ぬんだぞ！」
「俺には！俺には、不特定多数の人間よりぁ、テセアラ一人の命の方が何倍も重いんでさ！」
そんな事をこの男に懇願しても無駄である事は重々承知している。
しかし、それ以外に自分の行動が思いつかない。
「俺はお前と命に関して議論を交わすつもりはない。戦わないなら失せろ」
ダメだ。これ以上は。
ギムレットの言いたい事が解りすぎてしまう。
ついこの間までならいざ知らず、今の自分にはミゾレが居る。そして出来立ての生命も宿っている。
もし自分がギムレットと同じ立場なら、ギムレット同様、第三者に泣いて縋るかもしれない。
ギムレットから顔を逸らし肩を掴み払いのける。
「旦那ぁあ！」
ドシンと、ギムレットがバルゴに体当たりを仕掛ける。
足に踏ん張りが利かず、そのまま雪崩れ込むように倒れる。
「ギムレット……？」
先日、ギムレットの天使、ハ＝マヴェトに刺された箇所が、燃えるように痛い。
また、刺されたのか。
同じ轍を二度も踏んでしまった自分を心中で咎める。
ギムレットが悲しそうな表情で何かを言っている。

ああ、そんな顔をするな。
大切な人を守りたいというお前の気持ちは、良く解る。
ギムレットの言っている事がぼんやりと遠くの出来事のようで何も聞こえない。
なぁ、ギムレット。頼むから、そんな顔をしないでくれ。

連戦続きで疲弊した肉体に文字通り止めを刺され、急に瞼が重くなる。少しばかり血を流しすぎた。

「そろそろね」
始終をつまらなそうに見届けた大蛇丸がゆっくりと歩き出す。
テセアラの向かう先、部屋の中心の黒い卵の残骸から『何か』が、ボコボコと音を立てながらあふれ出る。
むき出しの臓物。そう思える程に醜悪な『何か』が急速に体積を増しながら、バルゴとギムレットへと迫る。
閉じかけた瞳で冷静に現状を把握する。
大蛇丸は成る気だ。
テセアラの身体を依り代に自らの魂を。
零尾のチャクラで自らの肉体を復活させる。
そして、大蛇丸は、『大蛇丸』へと成るつもりなのだろう。
『敵』はかつて、木ノ葉の里を壊滅寸前までに追い込んだ蛇神だ。
そんなモノがこんな異国で復活されては最後。味方の増援も望めない以上、止める手立てはバルゴには、もう無い。
「星空　バルゴ、とか言ったかしら」
閉じた天は未だ暗く、床一面に腐食の臓物が浸食する魔境に響く悪魔の魂を内包した天使の声。
「あなたの名前は覚えておいてあげる」
朦朧とした意識の中のバルゴには、大蛇丸が発した言葉の意図が理解出来ないでいた。

ミゾレ。せめてキミだけは、『キミ達だけ』は、生きてくれ。

言葉にすらならない願いを想ったところで、バルゴの意識は漆黒の闇へと落ちていった。

忍者、異国に叫ぶ　3

うちは。
木ノ葉の里において、この名を知らぬ者は居ない。
一族の者は総じて黒い髪、黒い瞳を携える。
取り分け黒い瞳の奥には、一族の最大の特徴である血継限界（紅い瞳）が秘められている。
写輪眼と呼ばれるその瞳は、うちはの一族に科せられた呪い。
戦乱の時代より始まる自らの祖が、大切な者の『死』を忘れんとする呪い。
悲しみを体現したかのような、紅。
怒りを表したかのような、紅。
それは忌むべき呪いでありながら、同時にうちはの誇りでもあった。
ふと、ミゾレは思う。
先刻の夢に出てきた少年はどうだったろうか。
瞳は黒。間違いなくうちはの血統である血継限界が隠されているのだろう。
だが、髪はどうだっただろうか。
夢の中の少年の髪は金。
バルゴと同じ、太陽のような金髪。
可笑しくなる。
　うちはの血（呪い）が少しずつ薄れていると感じた。
血みどろで、真っ暗な夜のような一族の歴史に射した光明。
文字通り日の光が、頭上から降り注いでいたかのようだった。
もしかしたら、闇に捕らわれ続けたうちはの一族の呪いは、この子の代で、ようやく終われるのかもしれない。
そんな事を思いながら、ミゾレは人の気配で目を醒ました。

「……人の寝顔を覗き見るなんて、イイ趣味してるじゃない？狢（むじな）」
「おはようございます。ミゾレ様。今は『夜鷹』と、改めました」
ふん、といいながら髪を掻き分け身体を起こす。
眠りたくもないのに強制的に眠らされ、あからさまに不機嫌である事が伺える。
夜鷹が付けている面を見て絶句する。
見覚えのある狐の面。
それは……。
夜鷹の視界からベットから身体を起こしたばかりのミゾレが消える。
あまりにも咄嗟に消えたミゾレに対して身体が反応しない。
前面から強い力で押さえつけられ、その勢いのまま壁に全身をぶつけられる。
首にクナイをあてがわれ、思わずごくりと唾を飲む。
まるで大きな壁が目の前にあるかのようだった。
殺気という重圧は突き刺すように夜鷹の全身を覆う。
呼吸もままならないまま、慎重にゆっくりと視線をクナイからミゾレに移す。
ミゾレの瞳は、真っ赤に燃えていた。
写輪眼だ。
「どうしてアンタがその面を付けているのかしらね。それはバルゴの……！」
「……その星空　バルゴから頂戴した」
「信用できないわね」
「おれと議論を交わす余裕があるのか。こうしている間にもあの人は交戦中なんだぞ」
真正面から正論を言われ、苦虫を噛み潰したような表情でクナイを仕舞う。
「ちッ」という声が静かな部屋に響く。
「信じられないなら勝手にしろ」

夜鷹が俯きながら呟く。
「なら、行動で示してもらいましょうか。早くバルゴの所に案内しな。ぶっ飛ばしてやるんだから。でも、その前に……」
夜鷹の腹部に強烈な一撃が入る。
「……あが……っ！？」
ミゾレの右の拳が深々と突き刺さっていた。
あまりに強烈な一撃に膝から崩れ落ちる。
「先日、私を気絶させた一件はこれでチャラにしてあげる。バルゴに感謝しなさい。バルゴがあんたを認めていなければ、八つ裂きにするところだったんだから」
ミゾレは嘘を言っていない。
そうはっきりと取れる程の強烈な殺気を纏っていた。
夜鷹は忍である。常、いかなる状況下においても咄嗟に行動できる訓練を積んでいる。
しかし、先ほどのミゾレの一撃はどうだろう。
それはまさしく電光石火。
速くて、速すぎて反応が出来なかったという方が正しい。
これで本当に妊娠し、能力が落ちているというのだから恐ろしい。
夜鷹には、ミゾレが依然として上忍クラスの力を有していると思えた。

突如腹の底から響くような地鳴りが辺りにこだまする。
何事かと窓を開け、倫敦大学の方向を見渡す。
何か、光る黒い柱のようなモノが曇天の夜空をを穿っているように見えた。
そこから溢れ出る醜悪なチャクラに凶事が脳裏をかすめる。
一度だけ見た記憶がある。
それは以前の任務で戦った尾獣もどきが放った光線。尾獣玉と呼ばれる強烈なチャクラの圧縮体。
完全な尾獣でなかったとしても山一つが跡形も無く消し飛んだ光

景を思い出しゾッとする。
今あの場にはバルゴとギムレットがいるはずだ。
だが、今こうして邪悪なチャクラが空間全体を支配しているという事は。
「バルゴ……、しくじったわね……」
咎める相手がいないストレスが背中越しに夜鷹に突き刺さるように伝わる。
「狢……、じゃなかった。夜鷹。あたしが先行する。あんたは後方の支援をしなさい」
「信用するのか？おれを」
「その面が証拠でしょ。あたし達は本来三人一組（スリーマンセル）なのよ。班長が信用するなら、あたしはそれに従うわ」

三人一組。何とも嬉しい言葉を残し、雷遁を纏ったミゾレの姿が消える。
自分は今、あの伝説の忍たちと一緒に戦っている。認められている。
そんな自分を誇らしく思い、割れた空を見つめる。
一陣の風が吹いたかと思うと、夜鷹の姿もまた、消えていた。

忍者、異国に叫ぶ　４

「これは……、何ともまぁ、醜悪な事で……」
小高い建物の屋上で周囲を警戒していたミゾレにようやく追い付いた夜鷹が、白眼で捉えた穴の底を透視してぼやくように感想を漏らす。
通常であれば人々の憩いの場、学徒との学び舎として賑わうハズの倫敦大学公園が、まるで奈落の穴が口を開いているかのような光景で思わず絶句する。
漏れ出すチャクラは禍々しく、常人であれば数分で正気は保っていられないと、そう確信できる程の邪気を発していた。
「何です？コレ……？」
夜鷹が怪訝な声でミゾレに問う。
「ふん。既に自分の踊る舞台がとうの昔に無くなっている事に気がつかない大馬鹿者が、他人の舞台を荒し回っているのよ」
「大蛇丸が復活したって事……ですか？」
ミゾレの遠まわしの言い分に夜鷹が補足するように継ぎ足す。
「迷惑千万だわ。反吐が出る。それより夜鷹。あのウスラトンカチは何処？」
十中八九バルゴの事である。だが、ミゾレの背中越しに伝わる異様な殺気に思わずゴクリと唾が喉を通る。
「ギムレットにおぶられて穴から這い出てきます。……正面です」
最後まで話を聞く事なくミゾレの姿が消える。
白眼で捉えたバルゴはどう見ても瀕死の状態だ。
まさか、本当に止めを刺すつもりじゃないだろうな、という心配が胸中に過ぎり途端に心配になる。
慌ててミゾレの後を追う。
不思議だ。つい先刻までは殺してやりたいと思っていた自身の心が、今では１８０度反転している。

「止まれ！」
ミゾレの言葉に身体が反応しピタリと止まり、瓦礫に身を潜める。
壁に張り付くように後方を伺っているミゾレの視線の先をゆっくりと追う。
そこには自らの尾を飲み込んだ黄金に輝く巨大な白蛇がゆっくりと穴から浮かび上がっていた。
あれが尾獣か、と内心で呟く。
しかし、尾獣の定義は尾を持つ魔獣。妖魔である。膨大なチャクラと比例するように必ず尾が生えているいるのが『在るべき正しいカタチ』である。
だが、この尾獣はどうだろう。
自らの尾を食らっている尾獣。『零尾』など聞いた事がない。
確かに、尾獣の線引きは時代によって異なる。
古く、忍術の祖である六道仙人により生み出された『それ等』は、その後あらゆる時代に、姿も形も発生方法ですら、まったく異なる形式で造り出されてきた。
尾獣を軍事上における他国への牽制と捉えたいと考える国。反対に侵略の要として利用したい里。
様々な思惑と欲望が複雑に絡み合い、まるでその思いを汲み取ったかのようにあらゆる戦乱の世に度々姿を現してきた。
そして、それは今、ここ倫敦（ロンドン）に邪悪な姿を現している。
火影は倫敦を混沌の渦へと誘いたいのだろうか。
頭を振り、生じた疑問をかき消す。
余計な事を考えるな。意味ない事で悩むな。
ここは戦場だ。集中しろ。
気持ちに余分があればそれだけ死にやすくなる。
「……尾獣……。いや、零尾か」
狐を模した仮面の奥の白い瞳で円蛇を見つめる。
ゆっくりと旋回している白い蛇は、まるで夜の暗闇越しに、この

世の地平全てを見渡しているように思えた。
ふいに夜鷹の白眼が周囲の異変に気がつく。
白い蛇の神々しい輝きに気を取られ過ぎていた。
右から。左から。正面から。後ろから。足元から。
無数の視線が自分たちを狙っている。

「ミゾ……っ！」
囲まれている。
そう発するはずだった声は、いつの間にか目の前に居た人物により遮られる事になった。
テセアラ。正しくはテセアラを形取った影のような黒い何か。
もちろん本物ではない。そしてこれは零尾の一部だ。思える程の異質感が。違和感が夜鷹を臨戦態勢へと導く。
「テセアラ？何で？」
「推測ですが、たぶんこれは零尾の防衛手段なのではないでしょうか」
「防衛手段に呼び出した者の、いえ、主の形を借りて外敵に対抗しているってコト？」
「おそらく。膨大な知識と圧倒的なチャクラを持っていても、所詮産まれたばかりの蛇です。身近な物体を形だけコピーしたのでしょう」
「そうなると、やはりテセアラは大蛇丸に取り込まれたというワケね」
ミゾレに応える事なく日向の柔拳法独特の、手の平を見せる構え取った刹那、紫電の如き一閃が眼前を通り過ぎる。
雷遁を纏ったミゾレの草薙の剣による電光石火の一太刀がテセアラを袈裟斬りに斬り伏せる。
「ぼっさとするな！」
二人の瞳が忙しなく周囲を警戒する。

ミゾレが刀を鞘口に当て、静かに手を離す。
ゆっくりと鞘内を通っていく。
夜鷹にはその一瞬が、どうしようもなく長く感じた。
カツン、と長刀を鞘に仕舞う音が辺りに響き渡る。
「……来る！」
それを合図に見渡す程に乱立したテセアラの『真っ黒い影』が一斉に忍に襲いかかる。
「この動き……、木ノ葉の体術か！？」
少女のものとは思えない俊敏な攻撃に夜鷹がたまらずに叫ぶ。
「ちぃ！」
上忍クラスの流麗で狡猾な動きに翻弄される。
歩行、走り方はさる事ながら、突き、蹴り、そして次の攻撃へと繋げる体重移動の方法、その全てが『忍』の動きそのものだった。
圧倒的物量とめまぐるしく変化する攻防を前に、徐々に後退を余儀なくされる。
黒い空。荒廃した街中で、背中合わせにミゾレと夜鷹が周囲を牽制し合う。
「どうしたの？もう息が上がってるわよ」
「こっちは仮面越しで酸欠なんですよ。誰が影如きに遅れを取りますか」
「ふぅん。でも、これは反則だとは思わない？」
ミゾレの視線の先、いや、ミゾレ達の周りに地面から生える様にテセアラの影が現れる。
倒しても倒しても湧いて出てくる無限地獄。
感情を押し殺し、無機質に戦うバルゴとは対照的に、本来のミゾレの戦闘スタイルは『戦いを楽しむ』事にある。
それは天才ゆえの独創的で型破りな発想による所が大きい。
しかし、今のミゾレにそんな余裕は無かった。
自らに宿った新しい生命を護るという事が、お荷物とは言わないが、想像以上に神経を使う。

今まで経験した事がない状況にミゾレの頬に一筋の汗が流れる。
周囲を警戒する傍ら、冷静にミゾレを分析して夜鷹は違和感を覚えた。
何かが違う？
何が違う？
何で違う？
違うのではない。
違わないのだ。
戦闘が始まったというのに、ミゾレの瞳は黒。
写輪眼独特の紅ではない事に、夜鷹は気がついた。
この程度の烏合の集に写輪眼は必要ない、とふんだのか。
いや、そうではない。ミゾレは戦いのプロフェッショナルだ。獅子が兎を全力で仕留めるように、ミゾレもまた戦いには持てる力を全て行使する。
故に、その黒い瞳は慢心の現れではない。
そう結論付けた夜鷹に一つの解答が浮かぶ。
ミゾレは写輪眼を使わないのではない。使えないのだ。
だが、先ほど自分を睨んだ時は燃えるような赤い瞳だった。
雷遁による光速移動との併用は不可。つまり、それが限界なのだろう。
ほぼ大半のチャクラを胎内の防御に当てている事が、夜鷹の白眼には文字通り目に見えた。
再び影たちが一斉に向かってくる。
ミゾレが長い足で水平に蹴り抜く。
バシャリと水が弾けるような感触と同時に蹴り抜いた右足がズシリと重くなる。
何が起こったか理解する間も無く、次々に影が四方から迫り来る。
「なっ……！？」
標的はミゾレ。そう言っているかのように無数の影がミゾレを取り囲む。

ミゾレの姿は既に泥のような黒い影に覆われてしまい、形が確認出来ない。
夜鷹は思わず言葉を失う。
白眼でも影の中を透視出来ない。
「一体何なんだ、こいつら……！？」
困惑する仮面の下で大量の汗が吹き出る。
「こうなったら……」
夜鷹が袖の影から暗器を取り出す。
手にしたのは手持ちの武器の中で最も重量がある身の丈程の巨大な鉄扇。
超重量をもって突き刺すように穿ち、ドーム状に覆われたミゾレを助けようとする。
刺さった箇所がぶすり、と飲み込まれる。
焦って鉄扇を引き伸ばすと、差し入れた箇所が、まるで溶けた、いや『融けた』かのように無くなっていた。
夜鷹の背筋がゾクリと凍る。
天使の輪のような、金色に輝く白蛇が、獲物を狙う蛇が、こちらを視ていた。

輪の中央に黒い粒子が集まり、収縮していく。
先ほど夜空を裂いた『尾獣玉』が、夜鷹に標準を向けていた。
臨界点を超えた邪悪なチャクラの塊が放たれる。
人一人程度に向けるモノではない、圧倒的なエネルギー体が夜鷹に迫る。
宿主の居ない尾獣。
産まれたばかりの零尾。
心のどこかで油断があったのかもしれない。
そんな後悔の念を感じる間も与えられず、夜鷹の視界は、真っ暗闇に支配されていった。

忍者、異国に叫ぶ　5

まるで空間が裂かれたかのような光景だった。
夜の闇夜を切り裂くような黒い光。その光すら屈折させる程の密度を持った尾獣玉。
この世に在ってはいけない存在、零尾の一閃により倫敦(ロンドン)大学公園は見るも無残な荒廃した平野となってしまった。

頭痛がする。
生きている？
そう夜鷹が意識を覚醒させるには数秒の時間を要した。
なぜ、自分は生きているのだろうか。
理由は明白。夜鷹の眼前には聖銀の騎士が覆うように被さっていた。
「生きている……のか」
「無事か？黒いの！」
黒いの、とは自分の事であろう事は容易に想像できる。
声のする方を見ると瓦礫に隠れるような人影が確認できた。
異国の抹殺者、ギムレットが星空　バルゴを抱えながら夜鷹の方に歩いてくる。
なぜ、自分は助かったのかを冷静に考察する。
おそらくはこの騎士が身に纏う『聖銀の魔力を嫌う性質』が、魔(チャ)力(クラ)の塊である尾獣玉を弾ききったのだろう。
ありがとう、の意味を込め、騎士のボディを一度だけノックする。
「それより……、思ったより重症だな。一旦、身を隠しましょう」
後方に奇跡的に無傷の建物を見つけた夜鷹がギムレットを誘導する。
同時に白眼で二人の身体状況を確認する。
ギムレットは右腕骨折。

バルゴに至っては右腹部の刺し傷が肝臓を傷つけている。
適切な手当てはされているが非情に危険な状況である。
「おい黒いの。奥さんはどうしたい？」
「あんたが来る少し前にテセアラを形をした影が無数に襲ってきました。囲まれて、……今はおれの白眼でも捕捉出来ません。近くには居ると思う。たぶん……」
夜鷹が仮面越しに大きく口を空けた大穴に視線を送る。
以前の憮然とした態度とは打って変わり、自信の無い弱々しい態度に、ギムレットが少しだけ目を丸くする。
「あの中って事か……」
夜鷹が零尾を見る。
尾獣玉を一度放って以来、何も仕掛けて来ない。
まるで……。
「こいつ、一度攻撃したら暫く攻撃してこねぇんだよ」
ギムレットの言葉に嫌な予感が走る。
まるで、自分たちを観察しているような雰囲気。
この尾獣は何を考えているのだろう。
考えている？
戦闘本能しか無いはずの尾獣に、知性？
そうだとすれば状況は最悪の局地だろう。
零尾の金色の瞳が夜鷹を捉える。瞬きすらせず、無言のプレッシャーが夜鷹を襲う。
畏れるな。恐れるな。
そして、呑まれるな。
冷静になれ。
もし、自分がバルゴだったら、どういう判断を下す？
自分が星空　バルゴだったら……。
ゆっくりと深呼吸をし、気持ちを切り替え、白眼でギムレットを視診する。
凄まじいと思った。

右腕の骨折による「痛み」が脳へ伝達されていない。
正確には『僅かしか届かないように抑制している』のだ。
方法は分からないが恐らく自己暗示により、脳内麻薬を意図的に分泌しているのだろう。
傷付き、倒れても任務を完遂する事のみを目的とした肉体、人生だった事が伺える。
「おい、おっさん。おれがあんたの右腕を治せば、あんたまだ戦えますか？」
「ん？まさか、おめぇ骨折を治す魔法でも使えるのか？」
「だから魔法じゃなくて忍術だっての。それよりどうなんですか。やれますか？」
以前とは別の仮面を付けているからだろうか。ギムレットには夜鷹と名を改めた狢（むじな）がまったくの別人に思えた。
「当たり前だ。……俺はまだテセアラを助けちゃいねぇ」
抹殺者としてではなく、一人の父親として、娘を助ける事が出来ない自分を戒めるように言葉を吐く。

ようやく辿り着いた建物は警備室のようで、大きな地響きにより、映像機器や書類が乱雑に散らかっていた。
「外でやるワケにはいかんし、贅沢は言ってられないな」
夜鷹が一本の巻物を取り出し、横一閃に紐解く。
「おれの専門分野は医療。医療忍術のエキスパートです」
巻物からボワンという音と共に治療道具が飛び出す。
スプレーのようなものを取り出し、辺りに散布する。
「何してんだ？おめぇ」
「腕を出してください。骨折箇所を切り開き、骨を無理やり接合します」
空になったスプレー缶を几帳面に巻物に仕舞い、メスを手に持ちながら狐の仮面がジリジリと歩み寄る。
夜鷹の異常なまでの迫力に思わず後ずさる。

「ままま待て！落ち着け！少し話し合おう！右腕なら大丈夫だ！痛くないように自分でしているから！頼む！早ま……」
「五月蠅い」
喚きながら拒絶するギムレットの首筋に『千本』が撃ち込まれる。
以前、ギムレットを仮死状態にしたのと同様の箇所を綺麗に貫いていた。
「また……か……」
抱えていたバルゴとともに倒れる。
よし、これからは時間との勝負だ。
零尾が攻撃を仕掛けてくる事は、おそらくは無いだろう。
何故なら零尾の欲するモノは知識。
破壊された人体がどのように治していくなどは興味の的だろう。
故に、施術中の攻撃は無し。
どういう訳か大蛇丸が姿を現す気配もしない。
気がかりなのはミゾレだが、まずは目の前の『患者』の治療に専念する事にした。
頭上を白眼で透視すると、やはりと言うべきか、零尾がこちらの行動を興味深そうに注視している。

バルゴの顔色を診ると、体内の血液がだいぶ足りない事が伺える。
消毒をし、巻物から取り出した輸血パックを手早くバルゴの右腕の大動脈へ通す。
次はギムレットだ。
バルゴ同様切開部の消毒をする。
赤黒く腫れた骨折箇所にメスを入れると溜まった血液がどろりと流れる。
無事な筋繊維を極力傷つけないように注意しながら荒廃した空間でオペを行う。
衛生面は最悪。後に破傷風になる事の無いように全チャクラをギムレットに注ぎ、持てる知識と技術の粋を以って取り掛かる。

自分で設定した時間は三十分。敵は、どれくらい待ってくれるだろうか。

何にせよ、早い方がいい事は必定。

誰にも知られる事の無い、夜鷹の孤独な戦いが幕を開ける。

忍者、異国に叫ぶ　6

『そうまで名誉が欲しいか？』
これが、ミゾレの祖父の遺言だった。
およそ孫娘に向けた言葉ではない。
祖父は最期までミゾレが本来の『うちは』を名乗る事に反対していたという。
なぜ一族が『うちは』の名を隠し、今まで生き長らえてきたかをよく考えろ、と幼少の頃から言われ続けていた。
ミゾレの母は『うちは』の血統の者で、父は自身の婿入り先が『うちは』である事は知らされていなかった。
理由は明白だ。そして至極当然。今までの歴史が物語っている。
余所の里も同様だ。
うちはの内に眠る血継限界、『写輪眼』を永久に秘密にする為。
強大すぎる力は、味方より敵を多く造る。
木ノ葉の歴史においても悪名だけが轟き響く名前だ。
まだうちはが生きている事が知れれば、それを利用し、利用され、姦計の渦へと巻き込まれてしまう。
ミゾレの祖父、母はそれを避けたかった。
しかし、先祖の意思を絶やす訳にはいかない。
優しかった祖父が厳しく伝え、厳しい母が優しく諭す。
自らの本当の名前を。
なぜ、名前を隠す必要があったかを。
なぜ、父には知らせず、ミゾレに木ノ葉の『本当』の歴史を伝えるかを。
全てを聞き、感じ、受け止めた。
まだ十歳のミゾレは必至に考えた。
教科書で聞いていた『うちは』の所業。真っ赤な嘘。
祖父から聞いた先祖の業績。真っ黒な真実。

果たして、どちらが正しいのか。
あらゆる場所に散りばめられた、今にも口からこぼれ堕ちそうな矛盾を必至に抱える事になった。

重すぎる難題に悩み、苦しみ、そして得た結論。
『火影になり、うちはの歴史を正す』

うちはを名乗る事を父に伝えた時、父は優しく微笑んだ事が印象的だった。
何も言わず頷くだけだった。
その後、母と、祖父に「今まで辛かったね」と口にした。
父もうちはとして生きる事を決意した瞬間だった。

故に祖父の遺言となった言葉はとてもショックだった。
違う、と反論したかった。
うちはの歴史を紐解いてみても、一族が裏切ったという証拠は何一つ無い。
むしろ木ノ葉を救った英雄だろう。
それを子孫である自分たちが、『裏切り者』の汚名を甘んじて受け、まして改名までして生き長らえている事に、ミゾレは憤りを感じていた。
裏切っていないのなら、堂々としていれば良い。
うちはを名乗り、闇から日の光の当たる場所へ行きたいと願う事が、なぜいけない？
忍でない、母に問う内容ではない。
うちはでない、父に問う内容ではない。
忍であり、うちはであった祖父だけが答えを知る。
だが、もう祖父は。
もう居ない。

「おじいちゃん……」
ミゾレの頬に一筋の涙が伝う。
気が付くと真っ暗闇の中に居た。
確か、テセアラの形をした『何か』に襲われ、その後の記憶が無い。
無意識に右手が腹に手をやる。
大丈夫。ちゃんと繋がっている。
言いようのない安堵感が、ささくれ立った神経を落ち着けてくれる。
状況を確認する。
広大で誇りっぽい半球状の室内に、血臭が充満している。
生温かい感触が左腕、そして両足を拘束している事に、ようやく気が付く。
捕まったのか。
そう結論するのに時間は不要だった。
誰にという問いも意味をなさない。
臓物のような物体がミゾレの眼前に迫り、ぐちゃぐちゃと形を成す。
「おはよう、テセアラ。それとも大蛇丸の方かしら？」
「ふぅん。あなたも木ノ葉の者のようね」
ミゾレの額当てを見て少女の中身を侵食した大蛇丸が呟く。
気色悪い触手が右腕を掴み、完全に張り付け状態となる。
「あのバルゴとか言う男もそうだったけど、あなたも『似てる』わね。憎たらしいくらい」
ミゾレの顔を恨めがましい面持ちで睨む。
金の眼に縦に走った瞳。まさに蛇。
「あなた、まさかうちはの血統？」
「……だったら何よ？」
金の眼が一際大きく見開かれる。

「……は、……ははは。あはははは。あはははははは！」
気でも触れたからと思う程に、タガが外れたかのように笑い出す。
「まさか、百年以上の歳月を経て、うちはが再び私の前に現れるなんてね。何と言う僥倖！運命はまだ、この大蛇丸を見捨てていなかったようね！」
思い出した。
大蛇丸は昔、うちはの写輪眼を手に入れようと暗躍していたらしい。
祖父の言葉が思い出される。
『強大すぎる力は、味方より敵を多く造る』
大蛇丸が右手を顔に当て、引っかくように下へ移動する。
下瞼がめくれ、充血した裏側を見せる。
「さっき手を腹に当てていたわね。あなた、今、妊娠しているわね？」
最悪だ。
自分の事ならまだしも、標的を胎内の子供に向けられた。
焦ったミゾレが全力で拘束を振り解こうとする。
「無駄よ。それが分からない訳ではないでしょう？」
「ちぃ……！」
「ふふ。良い事を思いついた。自分の身体が出来上がるの待つつもりだったけど、『その腹の子供に転生』する、という方が面白いわね」
うちは。
うちはの名。
うちはの写輪眼。
今まで自身を支えていた誇りが全て瓦解する気持ちだった。
それだけはダメだ。
それだけは……。
ミゾレの黒い瞳が赤い写輪眼へと変わり、三つの勾玉模様が幾何

学模様へと姿を変える。
一族の秘伝、万華鏡写輪眼がが姿を現す。
「テセアラ、ごめんね。あんたを殺すわ」
万華鏡写輪眼　天照。
古の神の名を冠する大術。
視界に捉えた対象を燃やしつくすまで消えない『黒い炎』を発生させる強力な火力の具現。
大量のチャクラとスタミナを消費する為、通常の状態でも日に何度も使用出来ない術である。
ズキリと右目に痛みが走る。
涙が流れるように血が頬を伝う。眼球の血管に負荷が掛かったであろう事が予測される。
だが、しかし。黒い炎が、出ない。
何故かは明白だ。
術の発動は行われなかった。
自分の体力、チャクラ残存量を見誤った。
適切なチャクラとスタミナが無ければ術は不発に終わる。
不発に終わるだけならまだいい。
万華鏡写輪眼は使用の度に術者の視力を削る諸刃の刃である。
「あっ……くぅ……」
視界が霞み、苦悶の声が出てしまう。
「どうやらロクに術も使えないようね。滑稽だわ」
もはや写輪眼すら維持する事が出来ず、元の黒い瞳に戻ってしまう。
想像以上に体力を消耗し、肩で呼吸をする。
おぞましい臓物の塊がテセアラの形から、一匹の蛇へと姿を変える。
ダメだ。やめて。それだけは。
ミゾレの懇願が聞き入れられる訳はなく、無慈悲な大蛇がミゾレを飲み込む。

真っ黒い絶望が、ミゾレを包む。
ミゾレの叫びがむなしくこだまするだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6828k/

NARUTO　――　外伝　――　星空のバルゴ

2011年10月26日03時08分発行